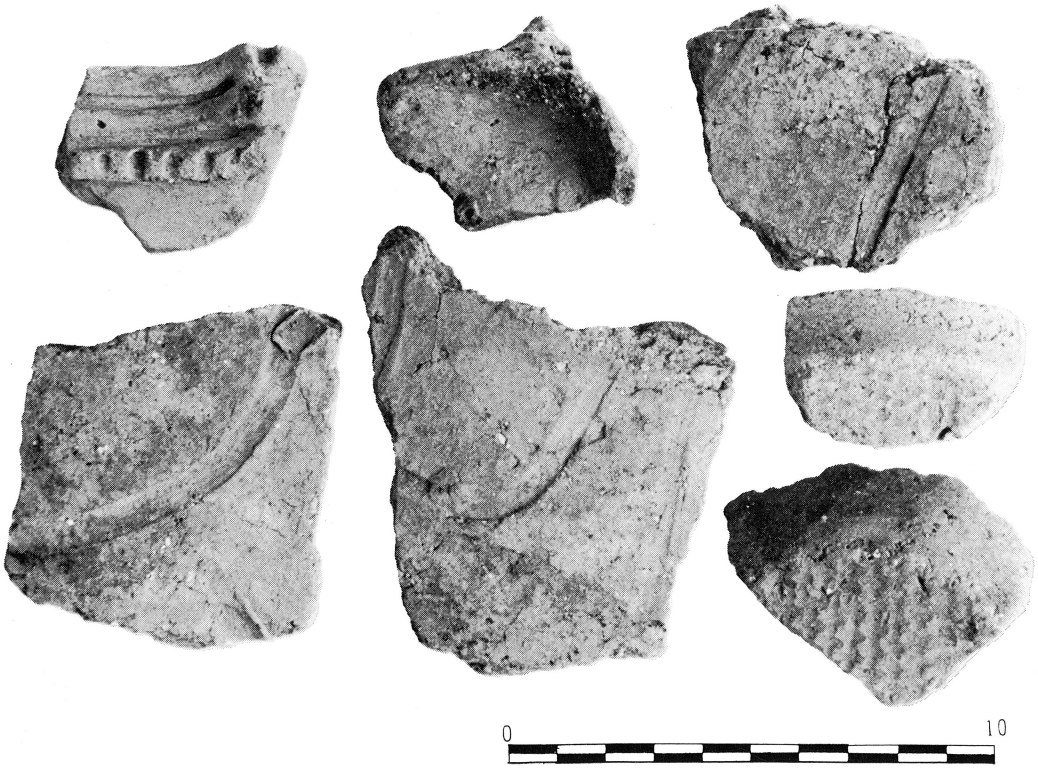
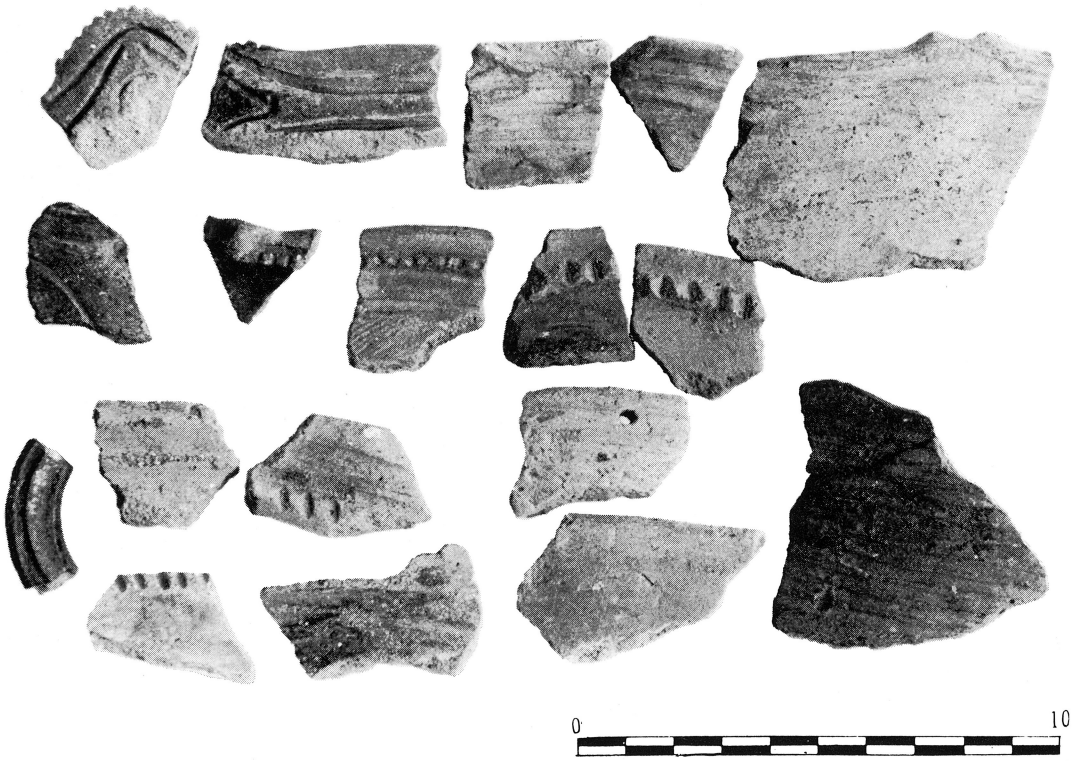


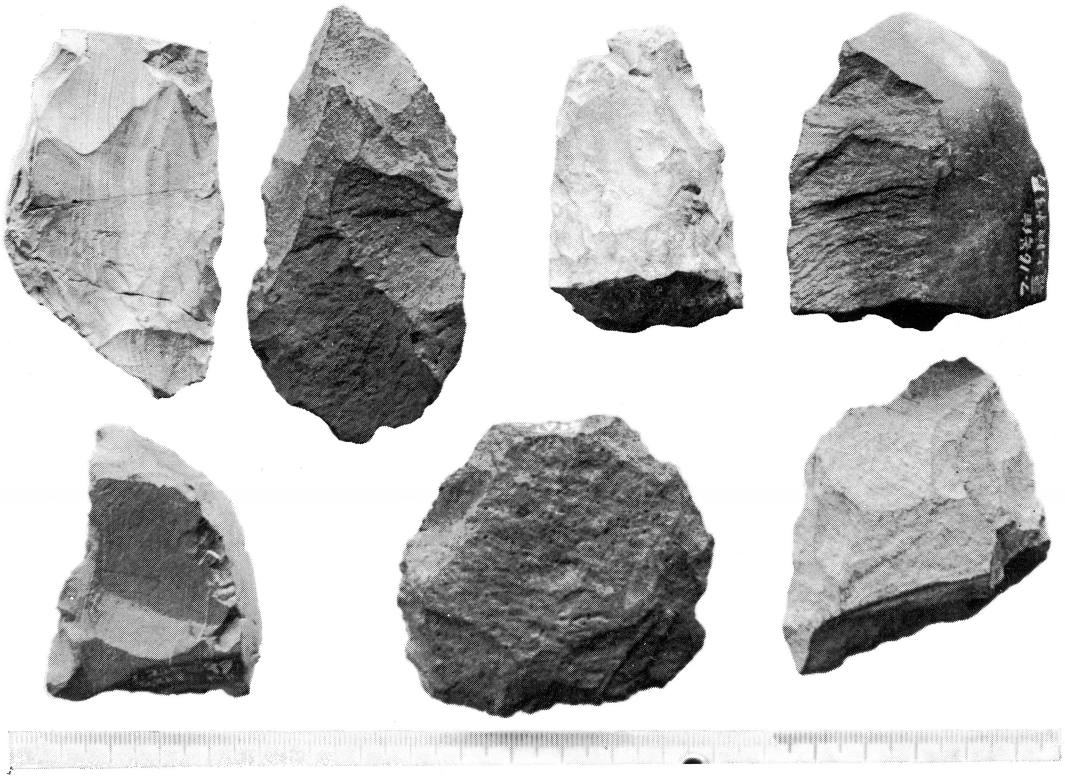
第8 類土器



第9類

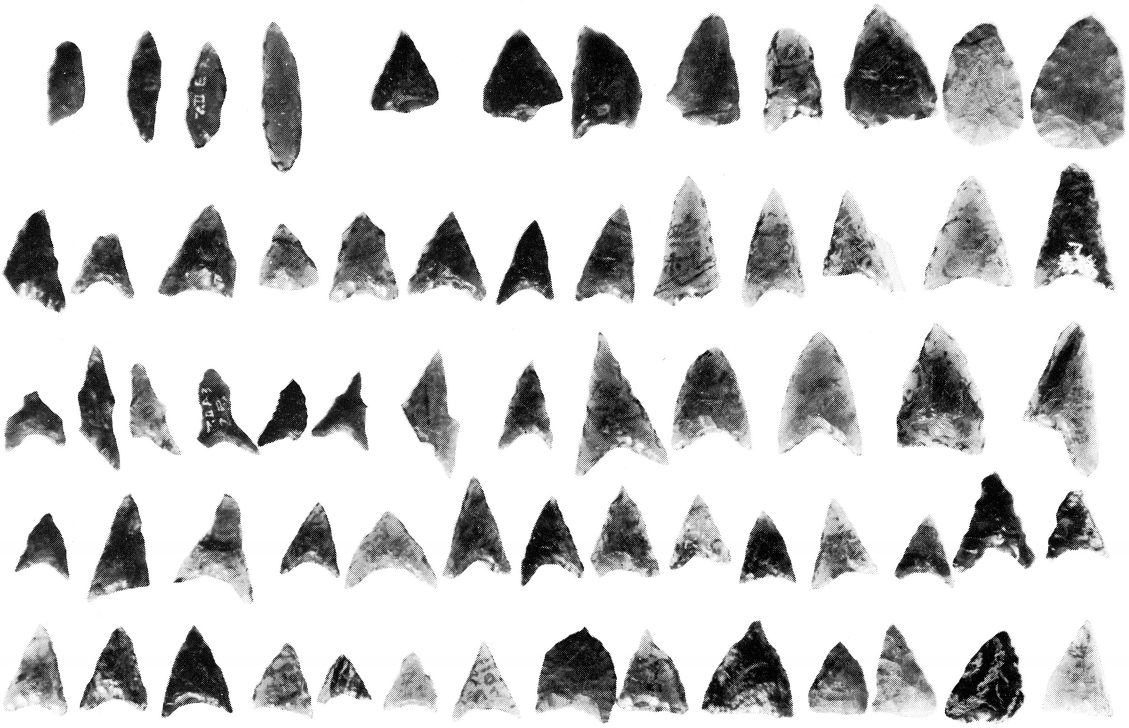
図版XVI　第Ⅰ層内出土土器

1.　石匙（上）小形磨製石斧および従長列片（下）

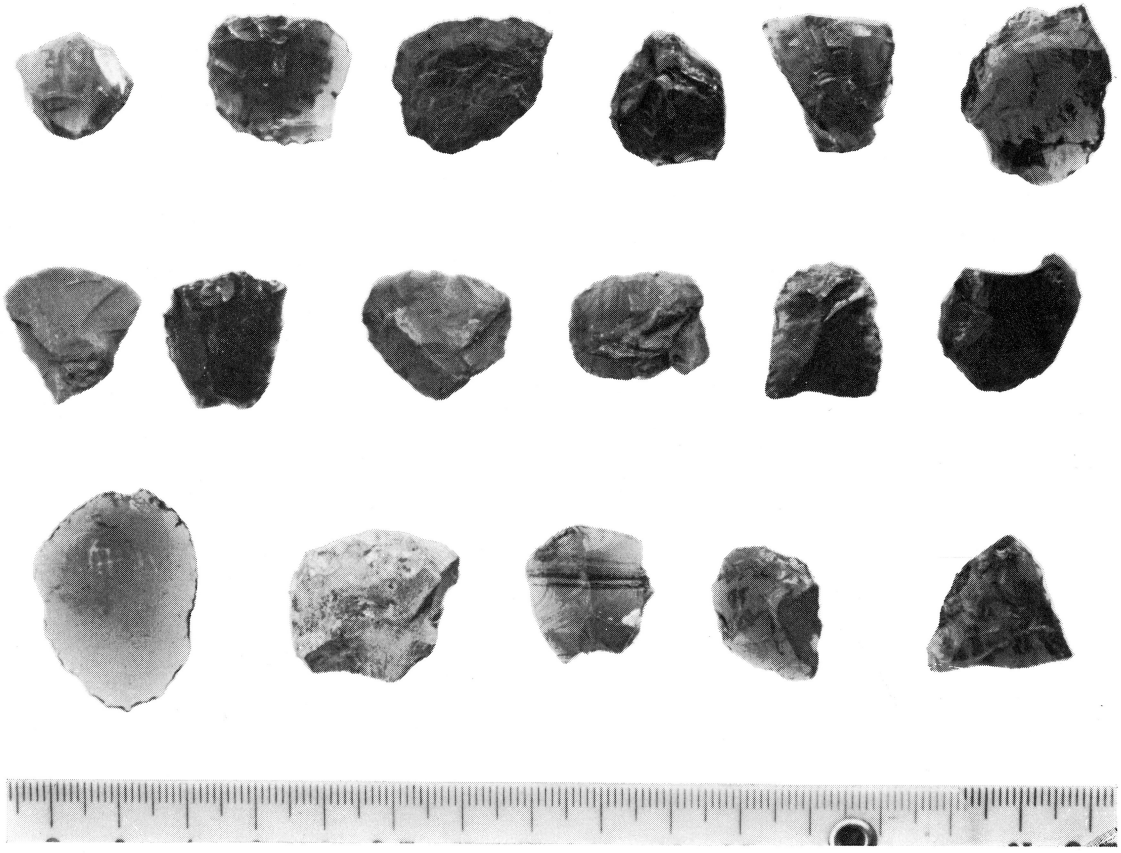


2.　打製石器

図版XVII　石器



1.　石鏃（第Ⅱ層以下）



2.　掻器（第Ⅱ層以下）

図版XⅧ　石　器

一　遺跡地の環境

Ⅰ　位　　置　（第１図）

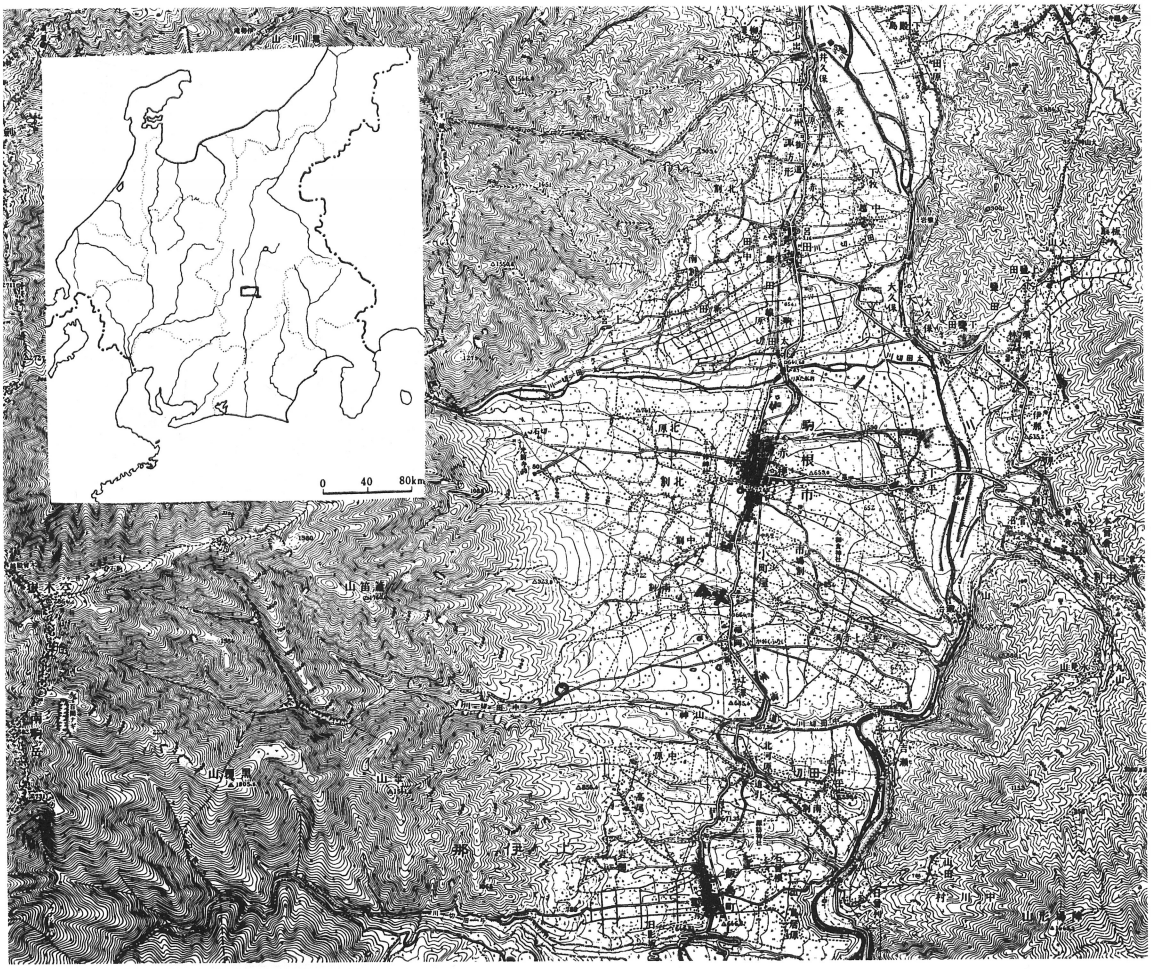
舟山遺跡は，長野県駒ヶ根市赤穂8639番地に所在し，天竜川上流部の右岸に位置している。

交通上からいえば，東海道線豊橋駅に発した飯田線が北上して約165kmで駒ヶ根市駅に到達するがここから南南西へ直線距離にして2km の地点で，国道153号線が上穂沢川を渡橋したすぐ西側の独立丘である。赤穂の市街の南端にあって旧部落でいえば，中割区，小町屋区，福岡区境界線の相接する地点となる。

Ⅱ　地　　形　（第１図）

古く伊那谷とよばれる伊那盆地は，諏訪湖から南流する天竜川を中軸線として南北に長い盆地状地形を呈するが，東側に赤石山脈（仙丈岳3,033m），西側に木曽山脈（駒ヶ岳2,956m）が盆地の中軸線に並行してそびえたっている。伊那盆地は，沖積世以前にこの高峻な両側の山地からの過剰堆積により山麓に大小いくつかの扇状地を形成しているが駒ヶ根市赤穂地域は，木曽山脈の急斜面を奔流する大田切川と中田切川によって形成された二つの大きな扇状地の複合した地域である。大田切川は，主峯駒ヶ岳を分水界として流れ出し，山麓一帯に東西にのびる中軸線7km，南北の扇端間7kmを測る大きな扇状地を作り，中田切川は，空木岳より東流し，中軸線4km，南北の扇端間3.5kmの中位の扇状地を作る。この二つの扇状地の力は強く，直角に交わる天竜川の流路を東側の山麓に圧迫して深いU字谷を形成させている。

舟山遺跡は，この相並ぶ二つの扇状地の接点にある孤立丘で北側を大田切扇状地側から流れ出す上穂沢（わぶさわ）川に，南側を中田切扇状地から流れ出す如来寺川に侵食された残丘状地形で東西200m，南北60mを測る船体状を呈し，ボートを伏せたような稜線を画いていることから，古くから「舟山」と呼びならわされている。近世から明



第１図　舟山遺跡の位置（10万分の１）　　×印

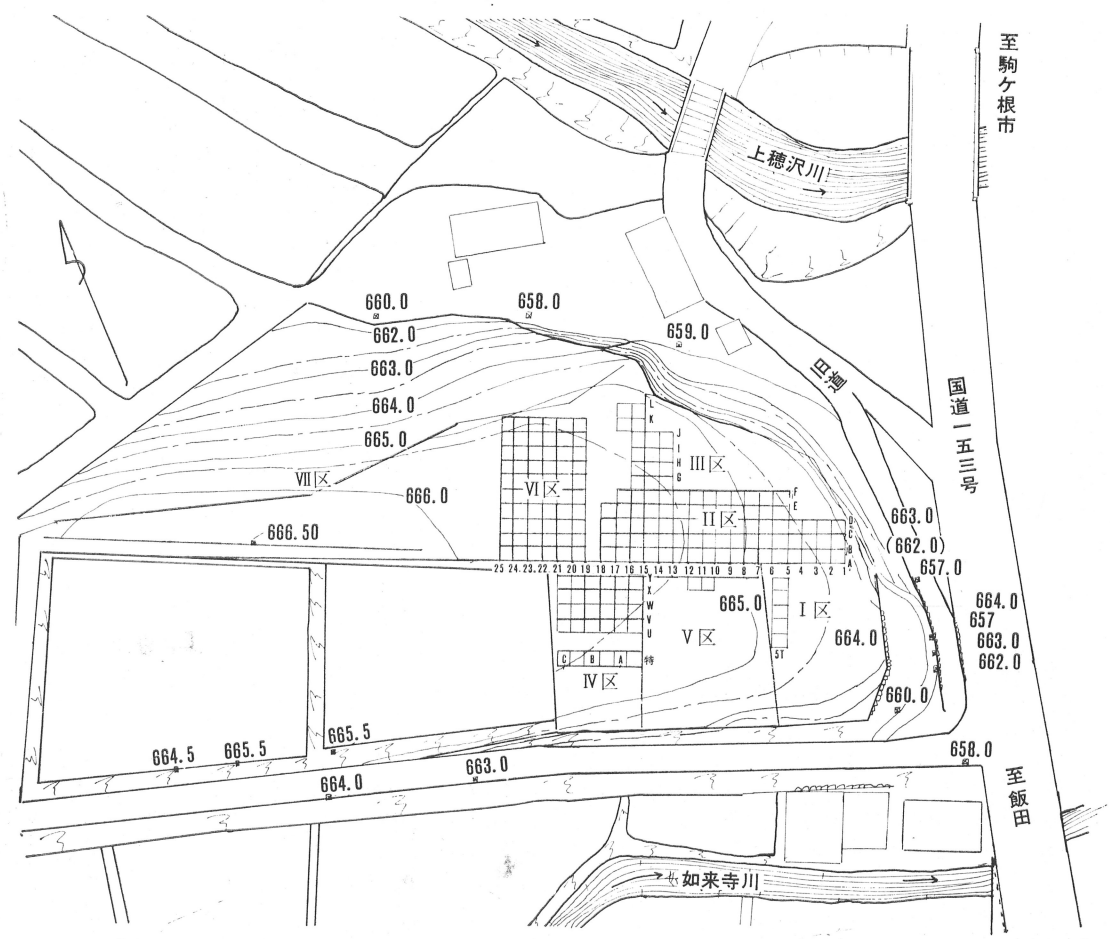
治にかけて三州街道の開通，修復により東端部3分の1を切削され，さらに近年国道153号線の付替路線の開設により，横断切削されて現長140mの丘陵となっており，遺構は国道に臨む丘頂に発見された。北側は上穂沢川の深いV字渓谷でその地高約20mを測り，南側は如来寺川のゆるやかな広いU字谷でそれとの比高約10mを測る。

舟山丘陵の基盤は前にのべた扇状地礫層で，領家花崗岩，領家片麻岩，変成岩などの径2mから30cm内外の大小の礫と介在する厚い砂層から成り，上部1.8mに土層を載せている。すなわち地表は黒土層30cm内外を第Ⅰ層とし，第Ⅲ層は30cm内外の黄色軟質粘土層が形成され，第Ⅰ層と第Ⅲ層との間に褐黒色の漸移層（第Ⅱ層）を介在させ，第Ⅳ層は硬質の黄色粘土層1.3mが堆積しており，各層の関係は極めて整合的である。第Ⅳ層以下はいわゆる信州ローム層の最上部で，御岳火山に由来する新期ロームの最後の堆積物と見做される。第Ⅲ層のソフトロームは，やや汚れており二次的に移動し形成された疑いが大きい。（第4図参照）　（林　茂樹）

Ⅲ　歴史的環境

舟山遺跡の所在する駒ケ根市赤穂地区は，名勝光前寺をはじめ史跡的なものが多いがここでは，先史および原史に関する遺跡の分布について限定して述べたい。

前述の地形で述べたように大田切川扇状地の南半部，中田切川扇状地の地半部によって構成される赤穂地区内の遺跡は実に100箇所を越え，先土器文化遺跡は発見されていないが，縄文早期から弥生時代を経て土師，須恵の時期そして灰釉陶器を出土するなど各時代の遺跡が存在する。その分布状態は，扇状地面を僅かに開折した三段の段丘が扇状地面を横断している。まず木曽山脈の山麓線には養命酒工場遺跡をはじめ，縄文早期および中期，土師・灰釉の遺跡が点線状に連なる。次の段丘標高800mのコンターに沿って中割原遺跡，切石墓地，大徳原南，横山新田，同南，三つ石原等同じく縄文中期または後期，灰釉などの遺跡が連なる。次の段丘は，標高700m付近で，八幡原，作左衛門分，大城林など縄文中期の大集落が展開している。次が600mコンターの上下に同じように辻沢（縄文早期および灰釉）十二天（縄文中，後期），藤助畑（縄文中期），羽場下（縄文前期）などが展開



第2図　舟山遺跡地形実測図（1,000分の1）

し，それより東部はやや無遺物地帯が広がり扇端部に至って縄文中期，弥生式末期，土師灰釉などの遺跡が増している。その代表は，飯坂遺跡であり，赤須古墳群である。これらの遺跡は，扇状地等高線に沿って線状に並ぶが，よく見ると扇状地面を扇子の骨状に流れる川，古田切川，田沢川，宮沢川，小鍛冶川，上穂沢川，辻沢川を段丘線が直角に切り結ぶ辺りの台地に存在する傾向が多い。特に上穂沢川の沿岸は遺跡が密集しており，舟山遺跡は，上穂沢川群を代表する遺跡といってよいであろう。また舟山遺跡のある丘陵の東麓は，縄文晩期末の遺跡が多いことで著明である。

（林　茂樹）

二　発掘調査事業の経過

Ⅰ　記録保存事業の経緯

舟山遺跡は，縄文時代の初頭から，弥生式時代にかけての長い期間，人びとが生活していたといわれ，地形も扇状地上の孤立丘で典型的な姿をしており，重要な遺跡とされていたが，この遺跡がたまたま国道153号線に接し，宅地造成が急速にすすみ，格好の採土予定地となり，採土後の住宅建設も希望されるに至ったため，昭和45年度文化財補助事業として緊急発掘調査を実施する以外に方策がないと考え，次の経過を経て緊急発掘作業に着手した。

昭和45年1月6日，昭和45年度駒ヶ根市一般会計予算に「舟山遺跡緊急発掘調査費」を計上することについて，長野県教育委員会の指導をうける。

1月　7日　舟山遺跡緊急発掘調査計画書を提出する。

2月　9日　昭和45年度文化財補助事業計画について，埋蔵文化財緊急調査表を添付して書類提出。

2月25日　県営ほ場整備事業地区概要図を作成し，舟山遺跡の参考資料として長野県教育委員会へ提出。

3月24日　舟山遺跡調査費100万円（国庫補助金50万円，県補助金15万円，市費35万円）を市議会で議決。

4月　6日　市報「こまがね」に舟山遺跡の紹介記事を掲載する。

4月26日　駒ヶ根市指定「史跡」として，舟山遺跡を指定する。

5月30日　長野県教育委員会へ，舟山遺跡補助金について依頼する。

6月　9日　舟山遺跡緊急発掘調査補助金について，文化庁長官あて書類提出。

6月16日　県教育委員会あて，舟山遺跡補助金について，文化庁へ問合せ方依頼する。

6月23日　舟山遺跡の調査について，林茂樹氏と打合せる。

7月29日　補助金の内示について，県教育委員会へ重ねて問合せを行なう。

7月31日　県教育委員会から，舟山遺跡緊急発掘調査補助金について内示があった旨，電話で通知があった。

8月　3日　舟山遺跡緊急発掘調査打合せ会を駒ヶ根博物館において開催し，調査委員会，調査団の編成ならびに事業の細部について協議，団長に林茂樹氏を内定する。

8月4日　関係地主と交渉し，発掘の承諾を得ると共に，林茂樹氏，友野良一氏と打合せを行ない，調査委員会，調査団関係者に通知，連絡し手配を完了する。

8月5日　財政課と打合せを行ない，器材器具の購入を行なうと共に，調査用具および器材点検を実施。鍬入式並びに調査協力依頼状を関係方面に発送するほか，市理事者，関係当局の了解を得る。

8月6日　県教育委員会金井指導主事に連絡，明日着工と決定する。午前10時から市公協において発掘調査について協力を要請し了解を得る。

現地に天幕，器材の運搬を完了，如来寺ほか関係民家へあいさつ，諸準備を完了する。

遺跡の全面測量および杭打ちを友野良一，小池政美の両氏が主力となって行なう。

（小池　金義）

Ⅱ　調査の組織

舟山遺跡緊急発掘調査委員会

顧　　問	駒ヶ根市長	座光寺久男
〃	駒ヶ根市議会議長	山崎　清次
委 員 長	駒ヶ根市教育委員会委員長	気賀沢治夫
副委員長	駒ヶ根市文化財保存会々長	山崎　清次
副委員長	駒ヶ根市郷土研究会々長	気賀沢善右衛門
副委員長	駒ヶ根市文化財調査委員会委員長	木下　義男
委　　員	駒ヶ根市教育委員	鈴木　義昭
委　　員	駒ヶ根市教育委員	早田　和夫
委　　員	駒ヶ根市教育委員	伊藤　義文
委　　員	駒ヶ根市図書館（博物館）協議会々長	春日津多恵
委　　員	駒ヶ根市文化財調査委員，駒ヶ根博物館学芸員	下村忠比古

委　員	駒ヶ根市文化財調査委員	白鳥　静男
委　員	駒ヶ根市文化財調査委員	宮下　一郎
委　員	駒ヶ根市文化財調査委員	松村　義也
委　員	南割区長	北原　宣男
委　員	小町屋区長	永井　徳一
委　員	地主代表	米山　清吉
委　員	駒ヶ根市教育委員会教育長	北沢　照司
委　員	駒ヶ根市公民館連絡協議会長	中城　　正
委　員	駒ヶ根博物館長	小池　金義
委　員	駒ヶ根博物館学芸員	友野　良一
委　員	駒ヶ根博物館学芸員	山本喜久男
委　員	駒ヶ根博物館学芸員	福沢　伝市

◦事務局　（駒ヶ根市立駒ヶ根博物館）

事務局長	小池　金義	（駒ヶ根博物館長）
幹　事	小林　理人	（駒ヶ根市教育委員会社会教育係長）
幹　事	福沢　正陽	（駒ヶ根博物館）
幹　事	武蔵　法子	（駒ヶ根博物館）

舟山遺跡緊急発掘調査団

顧　問	藤森　栄一	（長野県考古学会々長）
団　長	林　　茂樹	（日本考古学協会々員）
調査員	本田　秀明	（長野県考古学会々員）
調査員	友野　良一	（長野県考古学会々員）
調査員	中村　竜雄	（日本考古学協会々員）
調査員	三村　兼清	（長野県考古学会々員）
調査員	木下平八郎	（長野県考古学会々員）
調査員	北原　昌紀	（赤穂高校教諭）
調査員	長瀬　康明	（長野県考古学会々員）
調査員	柴　登巳夫	（長野県考古学会々員）
調査員	遮那藤麻呂	（長野県考古学会々員）
調査員	土屋　長久	（長野県考古学会々員）
調査員	小池　政美	（国学院学生）
調査員	吉村　　進	（明治大学学生）
調査補助員	山田　　年	（長野県考古学会々員）
調査補助員	田中　清文	（長野県考古学会々員）
調査補助員	伊藤　　修	（大正大学学生）
調査補助員	高林　重水	（国学院大学学生）
調査補助員	児玉　卓文	（国学院大学学生）
調査補助員	宮沢　成吉	（大正大学学生）
指　導	金井　汲次	（長野県教育委員会指導主事）

Ⅲ　発掘作業日報

8月7日（金）雨のち曇　　午前8時30分から雨の中で鍬入式の準備を現地で実施。午前9時30分から駒ヶ根博物館において調査団の打合せ会を実施，午前11時から現地において鍬入式を挙行，引きつづき駒ヶ根市役所会議室に駒ヶ根市長ほか関係者が参会，調査団の結団式，委嘱状の伝達を行なったのち，説明会を行なう。

午後1時，現地において試掘開始，第Ⅱ区試掘。早くも土器片の出土をみた。

8月8日（土）晴　　第Ⅱ区発掘，作業時間午前8時30分から，午後5時まで。グリット14個分，56m²を調査，第二層を中心に縄文早期および晩期の土器片が出土した。地主と作物補償について交渉。

調査員　6名，作業員　19名，事務局ほか　3名。

8月9日（日）晴のち曇　　第Ⅳ区1部試掘。第Ⅵ区にグリットを設定し，12個分，48m²を発掘する。同区南部に落込み部分を発見する。弥生式土器片の出土を認める。他のグリットは縄文早期土器が多く出土するも，層序は耕作のため撹乱されている。

調査員　6名，作業員　24名，事務局　3名。

8月10日（月）晴　　第Ⅵ区の調査すすみ，竪穴式住居址2個を発見。撹乱層から縄文早期の遺物が多数

出土した。

調査員　6名，作業員　40名，事務局　2名

8月11日（火）晴　　第Ⅵ区第1号住居址下部に円形小形竪穴の存在を確認する。また第2号住居址下部にも小形円形竪穴を発見する。いずれも縄文早期に所属する遺構である。一部完了地区の埋戻しを実施する。午後7時から宿舎の如来寺において，調査員の研究会を開く。

調査員　5名，作業員　27名，事務局　2名

8月12日（水）晴，夕立　　第Ⅱ区および第Ⅰ区の一部を試掘する。第Ⅲ層下部に小形竪穴の存在を把握する。同竪穴 No 5，No 6，No 7を発見した。

次回の発掘予定地を残して埋戻しを実施，午後6時30分から現地において第1次調査の終了式を挙行し，駒ヶ根市北沢教育長のあいさつがあり，午後7時30分から駒ヶ根博物館において調査団会議を開催した。

尚，駒ヶ根市議会文教社会委員一行が現地を午後視察した。

調査員　4名，調査補助員　3名，作業員　24名，事務局　3名

8月13日（木）うす曇　　器材点検，後片付を実施し，遺物，器材を駒ヶ根博物館へ撤収する。

長野県教育委員会より補助金の内示があり，併せて補助金申請書提出について指示があった。

調査員　1名，作業員　1名，事務局　2名

8月14日から22日まで，遺物整理，22日午後3時から石器など整理打合せ会を開く。

○　　○

8月19日，8月12日付，昭和45年度文化財保存事業国庫補助事業計画について文書受付。

8月23日　遺物整理研究会を午後1時から駒ヶ根博物館において開く。

8月24日　補助申請書，発掘届を提出する。

○　　○

10月21日　第2次調査の準備開始，関係者に依頼状を発送する。

10月28日　作業員，器材，配車について手配完了。

10月30日（金）晴　　器材点検，調達，作物下調査。

10月31日（土）晴　　ベルコン備付。天幕，器材を現地へ運搬。諸準備完了。小池・吉村調査員ほか。

11月1日（日）晴　　午前8時30分作業開始，午前9時30分より第2次調査着工式，北沢教育長あいさつ。第Ⅱ区排土作業，グリット5箇分の包含層調査，晩期の土器および縄文早期終末の土器，石器多数出土。排土作業にベルコン使用。

調査員　8名，補助員　2名，作業員30名，事務局3名

11月2日（月）晴　　第Ⅱ区調査，8グリット調査，第15トレンチおよび第17トレンチ設定。ローム層中に小形円形竪穴3個を発見する。No 5，No 7，No 9である。長野県教育委員会金井指導主事が指導に現地を訪れた。

調査員　4名，補助員　1名，作業員　31名，事務局　3名

11月3日（火）晴　　第Ⅱ区の調査を推進する。グリット17個分，68 m^2 の精査が進み，小形円形竪穴 *No* 8，*No* 9が発見された。晩期土拡墓の石積下底部から青銅製飾具断片が出土した。

調査員　8名，補助員　3名，作業員　29名，事務局　3名

11月4日（水）晴　　第Ⅱ区東部および，南端部の排土作業を行ない，調査範囲を拡大する。

調査員　3名，補助員　1名，作業員　14名，事務局　3名。

11月5日（木）晴　　昨日の排土部分精査を進める。pit の複合か，土拡墓か，やや異様な小形竪穴 No 15を発見する。同じく No 13，No 14，No 16を発見する。中央道調査員応援に来市。

調査員　3名，補助員　2名，作業員　17名，事務局　2名

11月6日（金）晴のち曇，小雨　　第Ⅱ区の小形円形竪穴の排土および精査作業をすすめるとともに，第Ⅳ区の排土作業を実施する。小形円形竪穴 No 15，No 14，No 16の精査をすすめ，縄文早期の土器が，包含される事実を把む。第Ⅳ区からも遺物多数出土。

調査員　4名，補助員　4名，作業員　25名，事務局　2名

11月7日（土）晴　　第Ⅱ区で，小形円形竪穴 No 15，No 16，No 6，No 18の精査をすすめる。馬蹄形にこれらの遺構が配列されていることが判明する。第Ⅳ区西端に弥生式竪穴住居 *No* 17を発見し，そのプランが明らかにされた。その東側に縄文後期の柱穴列を発見し追跡調査する。

調査員　7名，補助員　4名，作業員　30名，事務局　2名

11月8日（日）晴のち曇　　第Ⅱ区では，小形竪穴 No 7，No 20，No 15，No 13，No 16，No 21の精査を進める。No 18，No 19も発見され，精査する。いずれも縄文早期に所属する竪穴である。第Ⅳ区では，弥生式竪穴住居址の清掃，後期柱穴遺構の清掃，実測を行なう。第2次調査終了。

調査員　8名，補助員　4名，作業員41名，事務局　3名

11月9日（月）晴　　第Ⅱ区の各遺構の実測，舟山丘陵全体と発掘地点の実測作業などの補充調査を実施。

調査員　1名，補助員　2名，作業員　6名
11月10日（火）　昨日に引続き実測作業。
調査員　2名，補助員　2名，作業員　4名，事務局　2名
11月11日（水）　雨および雪あれ　前日に引続き竪穴の補充調査，器材撤収作業。遺構実測作業。
調査員　1名，補助員　1名，作業員　1名，事務局　2名
11月12日（木）晴　埋め戻し準備，器材整理。
11月19日　埋戻作業，出土品整理はじめる。
12月11日　昭和45年度文化財補助事業（舟山遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査）県費補助交付決定通知受付。
昭和46年2月23日　史跡など保存整備費補助金交付決定通知書（12月11日付）。受付。

舟山遺跡の発掘調査は，第1次調査を8月7日から12日まで，第2次を11月1日から8日までの2回にわたって実施したが，この間，長野県教育委員会をはじめ関係当局のご指導をいただき，調査委員会，調査団，地主をはじめ，駒ヶ根郷土研究会，老人クラブ，赤穂高校・赤穂中学校郷土クラブ，調査に参加していただいた多くの方々の献身的ご協力とご配慮によって，ここに初期の目的を達成することができましたことを，心からお礼申しあげます。
（小池　金義）

Ⅳ　調　査　概　要

1．第一次調査

8月7日（金）から8月12日までの6日間実施したが，初日の鍬入式の時豪雨に見舞われた他は晴天に恵まれ，酷暑の中延人員550名によって懸命に行なわれた。

今回の発掘は，遺構の所在とその範囲を確認するための試掘的要素が強いので，機械類は一切使わず，手持の用具のみを使用した。調査対象地は，田中清文氏の過去における表面採集状況を検討した結果，丘陵の東半部に多いことが明らかになったので，これを参考に東西に長い孤立丘の中軸線により南北に分け，南側を，東から西へ耕地別にⅠ区，Ⅴ区，Ⅳ区，北側を同じくⅡ区，Ⅲ区，Ⅵ区に区画した。このうち桑や野菜などの作物のあるⅠ区，Ⅴ区は保障費が伴うので発掘を避け，第Ⅱ区，第Ⅲ区，第Ⅵ区を発掘することに決定した。

発掘区は，グリット方式によることとし，丘稜の中軸線を東端を基点として西方に向って2mを単位として，算用数字で，南北をアルファベットで記号することとした。第Ⅱ区はグリットA1からグリットf16まで80グリット第Ⅵ区は，A19からJ25まで60グリットを設定し，一列空きの千鳥状に試掘を行なった。

層位は，その1例をグリットC10を発掘した測定結果によれば，第Ⅰ層は地表から黒色腐植土層までが20cm，第Ⅱ層は栗色を主とする黒土からローム質土への漸移層で約15cm，第Ⅲ層は軟質黄色土（ソフトローム）で25cm，第Ⅳ層は軟質黄色粘土層（ハードローム）で110cm，以下十数mの厚さの砂礫層となる。

まず発掘は第Ⅱ区のグリットを1列置きに千鳥状に掘ることにし，その深さは第Ⅱ層まで及ぼすことにした。発掘したグリット数は，A列の1, 3, 5, 7, 9, 11, C列の2, 4, 6, 8, 10, 12, 14, E列の1, 3, 5, 7, 9, 11の19グリットである。

この調査の結果，各グリットからの遺物出土状況には斉一性が認められ，第1層中位から下位にかけて，縄文晩期に処属する土器片が若干出土し，第1層下位には縄文早期末様式の土器片，前期初頭の土器片が含まれており，第Ⅱ層からは縄文早期の繊維土器が比較的多く出土すること，これに伴う石鏃，爪型掻器なども認められること，さらに押型文土器片が伴うことが判明した。確実に遺構と認められるものはまったく認められず一部のグリットの第Ⅰ層中位に，黒色の堅緻な面が部分的に存在したこと，グリットA1, A5, A11, C1, の第Ⅰ層下部に，規則性のない礫群が存在したことが把握された。また第Ⅳ層まで盗掘のため撹乱されていたグリットA3は，ローム層内80cmの位置に硅岩製石匙の出土を見た。この点第Ⅳ層内に注意を向ける必要を感じた。

第Ⅵ区の発掘は，第Ⅱ区の傾向を把握した結果，この地区に遺構の存在を予測してまず第Ⅱ区同様，グリットを千鳥状に掘ることとした。いずれの地区も第Ⅳ層までの撹乱が甚しく，地主に尋ねたところ，数年前に長芋を栽培したとのことであった。僅かに南部のグリットA19, A21, A23, は農道に近く撹乱が及ぼされず，第Ⅲ層に深いおちこみ部分が発見された。これを追跡の結果，1辺約4mの隅丸方形の竪穴であることや，床面の埋甕から弥生式後期末の中島式に所属する住居址であることが判明した。第1号竪穴（pit 1）と命名したが，この床面北東の柱穴址を清掃中，柱穴内部に壁がなくソフトローム層が拡大されやがて壁が確認され径1.3m内外の円形竪穴となった。条痕繊維土器破片が出土したことから早期に所属する遺構と確認した。この発見によって縄文早期の遺構の存在を予測するうえで，従来の認識を改変する必要に迫られた。即ち第Ⅱ区の発掘の深度限界をソフトローム上面までに限定していたからである。第Ⅳ層内のハードロームに切りこまれて構築された遺構に，殆ど同色のソフトロームが流入堆積している事実を把握できたことは望外の喜びであった。この円形竪穴を第3号竪穴（pit 3以下同様に記す）と命名する。これより先のpit 1の北側，C24に弥生式の竪穴pit 2を発見し，床面を追跡した結果，床面の下層に小形円形竪穴を発見しpit 4とする。この遺構からも繊維条痕のある土器片が出土した。第Ⅵ区全面を探索したが，前記したように撹乱がひどく遺構の検出は困難を究め遂にこの地区は放棄せざるを得なかった。但しどのグリットからも，縄文早期の押型文，斜縄文，茅山式系の土器片や，縄文前期

の木島式後期加曽利B式土器片，同晩期の条痕文土器片などが出土し，黒耀石製石鏃，磨石，石棒，磨製石斧なども出土した。特に縄文早期の土器片が比較的多いことから pit 1 同様の遺構の存在を推察するのみにとどまった。第Ⅳ層における小形円形竪穴の発見によって，第Ⅱ区の第Ⅲ層以下を発掘探索する必要を生じたので再び主力を第Ⅱ区に投入して調査する。

グリット C14 では第Ⅲ層上面に平石 1 個があり，その下層がやや軟いのでこれを追跡し小形円形竪穴 pit 5 を発見する 。床面近くから条痕大爪形文土器片が出土した。グリット A8 にも発見され pit 6 となる。また A5 グリットを南方に延ばし，第Ⅴ区と第Ⅰ区との境に長さ 10 m のトレンチ 5 を設定する。ここは桑畑耕作のため第Ⅱ層まで黒色土となり，ソフトローム層が 20 cm の厚さにあるが，ここにもやや大形の円形竪穴が発見された。上部から押型文土器，下部から茅山式系土器片，磨石などが出土する。これを pit 7 と命名する。

Ⅳ区の南側斜面に特 A～C のグリットを 3 個所設定し第Ⅳ層まで掘りさげたが，遺物，遺構の存在は認められなかった。

以上で 6 日間に亘る第 1 次調査を終了したが，第Ⅳ区において，第 1 層下部から第Ⅳ層上面にかけて構築された弥生時代竪穴式住居址 2 箇および第Ⅲ層から第Ⅳ層にかけて構築された縄文早期の円形小形竪穴 8 個を調査することができた。

第 2 次の発掘は丘陵南側に調査を及ぼすことと，縄文早期の遺構群の分布状況を把握することを狙いとしたい。

（林　茂樹）

2. 第 2 次 調 査

中央道地域の埋蔵文化財記録保存事業が隣接宮田村地区に開始され，第 2 次の調査団編成は極めて困難な状況に置かれたが，この時期を失っては季節的に機会を失うので，11 月 1 日から 10 日間の予定で着手することにした。第 2 次着手の寸前に第Ⅸ区は宅地造成により，余すところなく削平され，ブルトーザの輪だちの痕に，無数の土器細片，黒耀石破片が散乱しており，特に細石刃，石鏃の存在が注目され調査団を歎かせるのみであった。

今次調査は，このような悪環境で実施されたが幸いに好天に恵まれ，初期の目的を達成することができた。以下この概要を述べよう。

今次調査の目標は，第Ⅱ区，第Ⅲ区および第Ⅳ区，第Ⅴ区におけるローム層中の小竪穴遺構群の把握であったが，第Ⅴ区は桑が栽培され，第Ⅰ区は野菜が収穫前であったので，これを避けて第Ⅱ区，第Ⅳ区を中心とする精査を行なうことに努めた。（以下第 3 図参照）

まず第Ⅱ区西部の 11 列の AD，15 列の AD まで 11 箇のグリット計 64 平方 m を発掘する。こ こでは，小形円形竪穴址 No 5 を再発掘しその南側に枕大の石 4 個を並べた配石遺構が第Ⅲ層内にあり，北側第Ⅰ層下部に縄文晩期の配礫遺構が出土した。グリット D13 において小形円形竪穴 No 8 を発見しグリット No 15 列を L 区まで北に伸ばし Trenche 15 を設定する。また No 17 列では A, B, C, D, E のグリットを掘る。Tr 15 では，D 区北壁に小形円形竪穴 No 10 を発見し，爪形文土器半個体分が床面につぶれているのを確認した。また Tr 15 の北端で小形竪穴 No 9 を発見した。F 15 では黒土層からのおちこみを発見し，追跡の結果，縄文晩期の土拡で周辺に無文土器が多数出土し内部に拳大の礫で組石遺構が存在することが判明した。これを遺構 No 11 とする。なおこの石組遺構の中から青銅製品の断欠が出土した。Tr 15 の J～G を南側に拡大し，小形円形竪穴 No 14 を発見しその北に接して楕円形竪穴 No 16 を発見し，精査の結果，炭化物，灰層の所在をつかみ，茅山式系土器半個体分，石器多数が出土し，炉穴であることが判明した。さらにその北西部に小さな土拡に平石があり下に栗石状に礫を配した遺構が発見され，茅山式系土器を出土した。これを No 21 とする。グリット 12 AD から 15 AD の東方部を追跡し，グリット 8 AE から 11 AE の 20 グリット分計 80 m^2 を全面発掘する。まず第 1 次調査で確認した小形円形竪穴 No 6 を精査し，グリット 10 C に同 No 13 を発見し，続いてその北東に近く同 No 15 を発見し精査にかかる。No 13 は単独，No 15 は相接する 2 箇の円形小形竪穴で枕大以上の石による配礫が縁辺南部にあり，断面精査の結果，埋没状態は人為的なものが認められ，他の竪穴とはやや異なることからあるいは墓拡ではないかと推定された。この 15 号址からは押型文土器破片，茅山式系土器片が混在して出土した。

つづいてグリット A 列の南側の農道に沿って Y 列を設定し 5～11 まで 7 グリットを発掘する。10 Y に円形竪穴 No 18 を発見する。壁が浅く 10 cm 内外で，他の小型遺構と異なり北側に配礫 3 個があり茅山式系土器片および表面に縄文ある土器片を出土した。さらに No 13 の南に近く，全く遺構の存在が第Ⅲ層では判らなかったところから小形円形竪穴 No 22 号址が発見された。この竪穴の床面は枕大の石 10 数個をもって組み合せた石組の存在が判明した。また 6 号址に接して 17 号址が発見され精査するうちに床面近くの炭化物層が互いにつながることから同一の遺構と判定された。

Trenche 5 では東側に 1 m を拡大して調査を行ない，第一次発掘の際確認された 7 号址を発掘したところ，南側に切り合った床面の高い竪穴が発見され，その状態から 7 号址の入口としての構造と考えられた。さらに南 4 m に小形円形竪穴を発見し 20 号址とする。

第Ⅳ区の調査は，最終段階に実施され，YU 15 から YU 21 まで 24 グリット計 96 m^2 を第Ⅱ層まで全面発掘を行なったところ第Ⅰ層下部に黒土と炭化物の混在した敲き面が存在した。しかし耕作のため撹乱され部分的に残っているのみであった。これが縄文後期の生活面であったことはやや下層に入って無数の柱穴の存在が明らかに

されたことで判明した。この柱穴址（23号址）は，NE方向からSW方向に中軸をもった長楕円形プランで，長径7m，短径5mを測る隅丸矩形に近い形態をもつ一単位の遺構と認められ，内部に不規則な配石炉1箇と，貯蔵穴2箇をもっており，配石炉近くから堀の内Ⅱ式類似土器が出土した。また，最西部のグリット21の隅から，方形の竪穴住居址が発見され，精査の結果，壁外に柱穴をもつ小形の竪穴で，弥生後期（中島式）に所属する遺構であることが判明し第17号址と命名された。なおこの二つの遺構の柱穴から縄文早期の土器破片が出土したので，この下層に第Ⅱ区出土の小形円形竪穴の存在が予測されたが，調査期間がなく，第Ⅱ層までで終了となり残念であった。

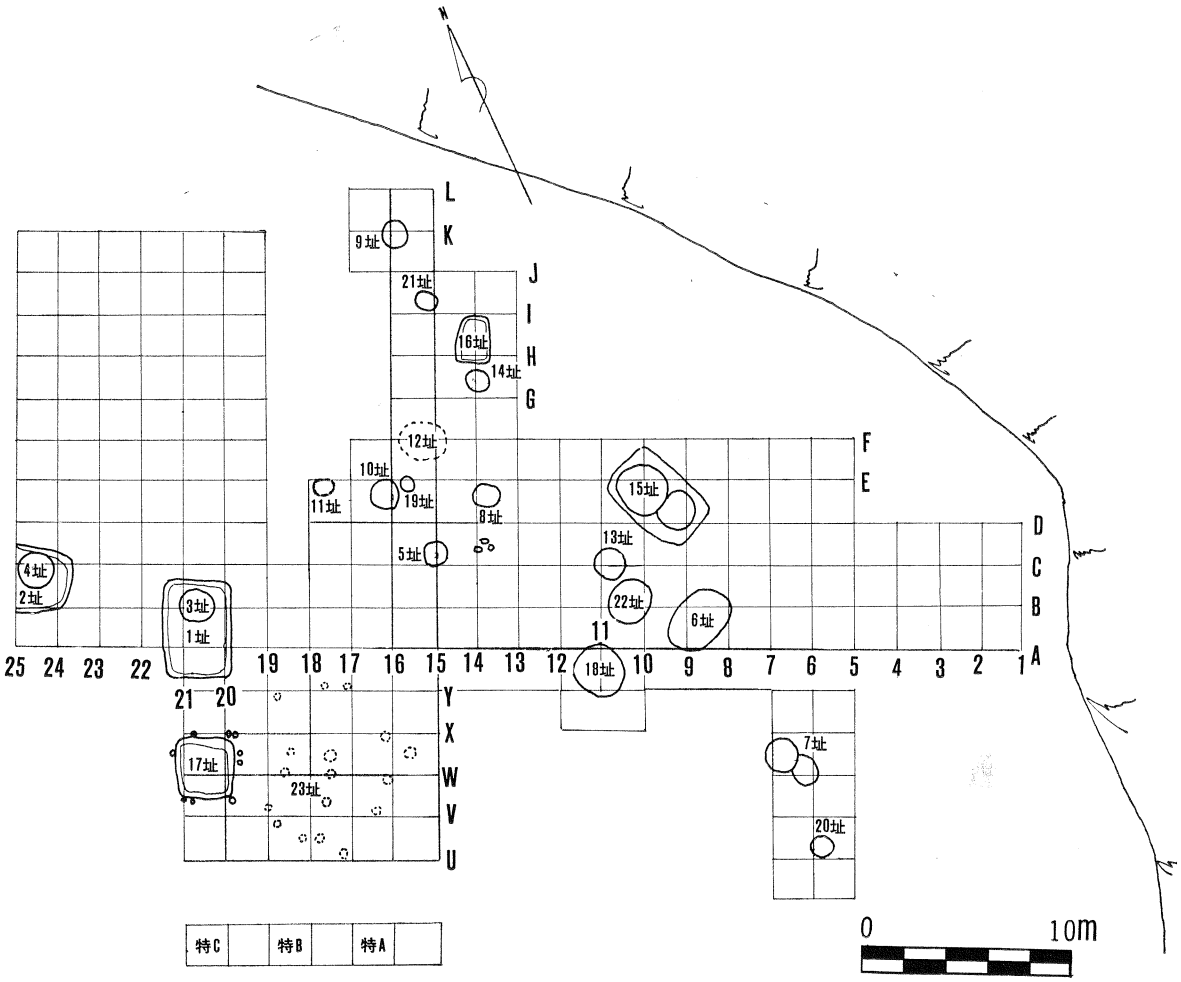
以上9日間にわたる発掘の状況であるが，最終的な実測作業が後2日間実施され，これが終了した時は，急に襲った寒波のため露呈された遺構群は，完全に白雪に覆いつくされてしまっていた。（林　茂樹）

三　遺　　構

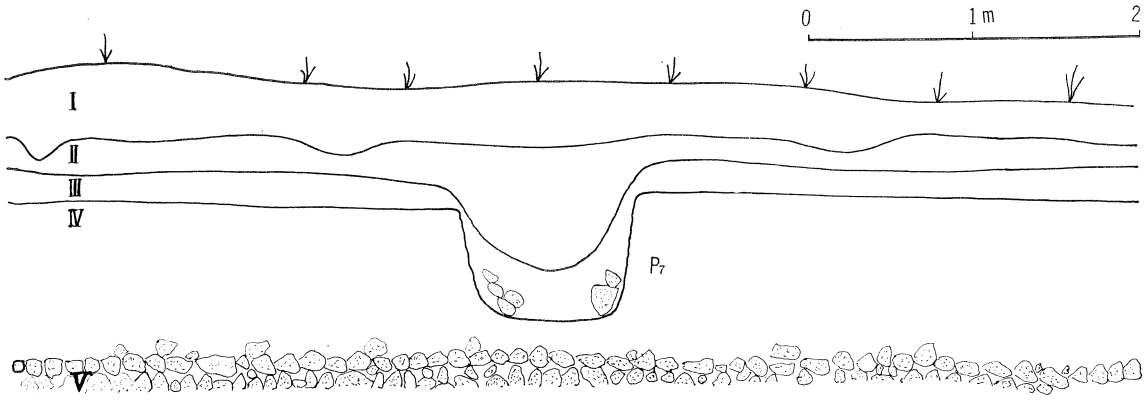
第1次，第2次調査を通じて25個を数える遺構が出土した。このうち特筆すべきは，第Ⅳ層中に深く設定された小形円形竪穴遺構18箇で内部の堆土もソフトローム（黄褐色軟質粘土層）で肉眼で見る限り第Ⅳ層とほとんど同じでこの検出は相当に困難を極めた。また，第Ⅱ，Ⅲ層には弥生時代竪穴式住居址3基，第1層下部には，縄文時代後期平地住居跡が発見された。以下遺構ごとに詳述したい。

Ⅰ　第Ⅳ層内の遺構（第3図参照）

第Ⅳ層内の遺構は大部分が小形円形竪穴で現発掘範囲内で見ると三群に分れて謂集しており，謂集状態は，半孤状もしくは馬蹄形を呈するものと思われる。即ち第Ⅱ区の中央部から第Ⅰ区南にかけて15号址から20号址ま



第3図　舟山遺跡発掘区全測図



第4図　舟山の地層断面図　(Tr 5)

で9個の竪穴が並び，第Ⅱ区の北西部に5号址から9号址まで8基の竪穴が半円状に並ぶ。また第Ⅳ区に2個が存在するがこの周辺は第Ⅳ層まで撹乱されているので他は不明である。

1.　第3号竪穴址（第5図上・図版Ⅳ上）

1号住居址（弥生式住居）のピット No 4の底部が床面らしき堅さを持っていたため，柱穴周囲を調査すると，柱穴周辺が貼床になっていることが判明した。貼床を掘ると汚れたソフトローム，その下に30 cm 程つづき土器片，黒耀石製石鏃曽，根形石核が出土し，炭化物が多くなる。更に炭化物の混合したソフトローム層が20 cm あり，床面直上に10 cm 程有機質の腐食土・黒色土が堆積していた。

竪穴は直径1 m 40センチ，弥生式床面よりの深さ60 cm の円筒状の竪穴である。床面直上より爪形（粕畑式類似）土器（第5図1. 2）三片が発見され，その北東隅に火熱を受けた花崗岩の枕大平石2個が多少床面に食い込んだ状態で発見された。床面および壁面はロームを敲き固めてある。　（福沢　正陽）

2.　第4号竪穴址（第5図中）

この竪穴は遺構第2号（弥生式住居址）中央北壁よりに発見されたものである。厚さ10センチ程の貼り床が施された下は黒色土，よごれたソフトロームと堆積し，床面真上に黒色有機質腐食土が認められた。プランは1 m 40 cmのほぼ円形をなし，深さは弥生式竪穴床面より65 cmを測る。床面は敲き固められており，良好である。出土遺物は少なく，覆土上層より鵜ケ島台式類似土器（第5図3），茅山上層式類似土器（第5図4）が出土している。

3.　第5号竪穴址（第5図下・図版Ⅳ下）

第Ⅲ層下部を切り込んでよごれたソフトロームが充満している。プランは長径1 m 40 cm，短径1 m 20 cm の楕円形を呈し，深さは約60 cmを示す。床面壁面はタタキが加えられており，花崗岩礫が3個埋められた状態で出土している。出土した土器片は少なく茅山上層式類似土器（第5図—5，6）が出土した。

4.　第6号竪穴址（第6図上）

第1次調査で竪穴の所在が確認されたのみで，精査は第2次調査に引き継れたピットである。（発掘中，西側にピットが発見され19号とするも，調査の結果同一の竪穴と判明したため，19号は欠番）

第Ⅲ層上部ソフトロームを掘り込むこと約70 cm 礫層上部に達する。竪穴の平面形は卵形を呈し，大きさは長径3 m，短径2米弱である。ピット底部は西側に若干傾斜しており，底面はほぼ平坦になっている。

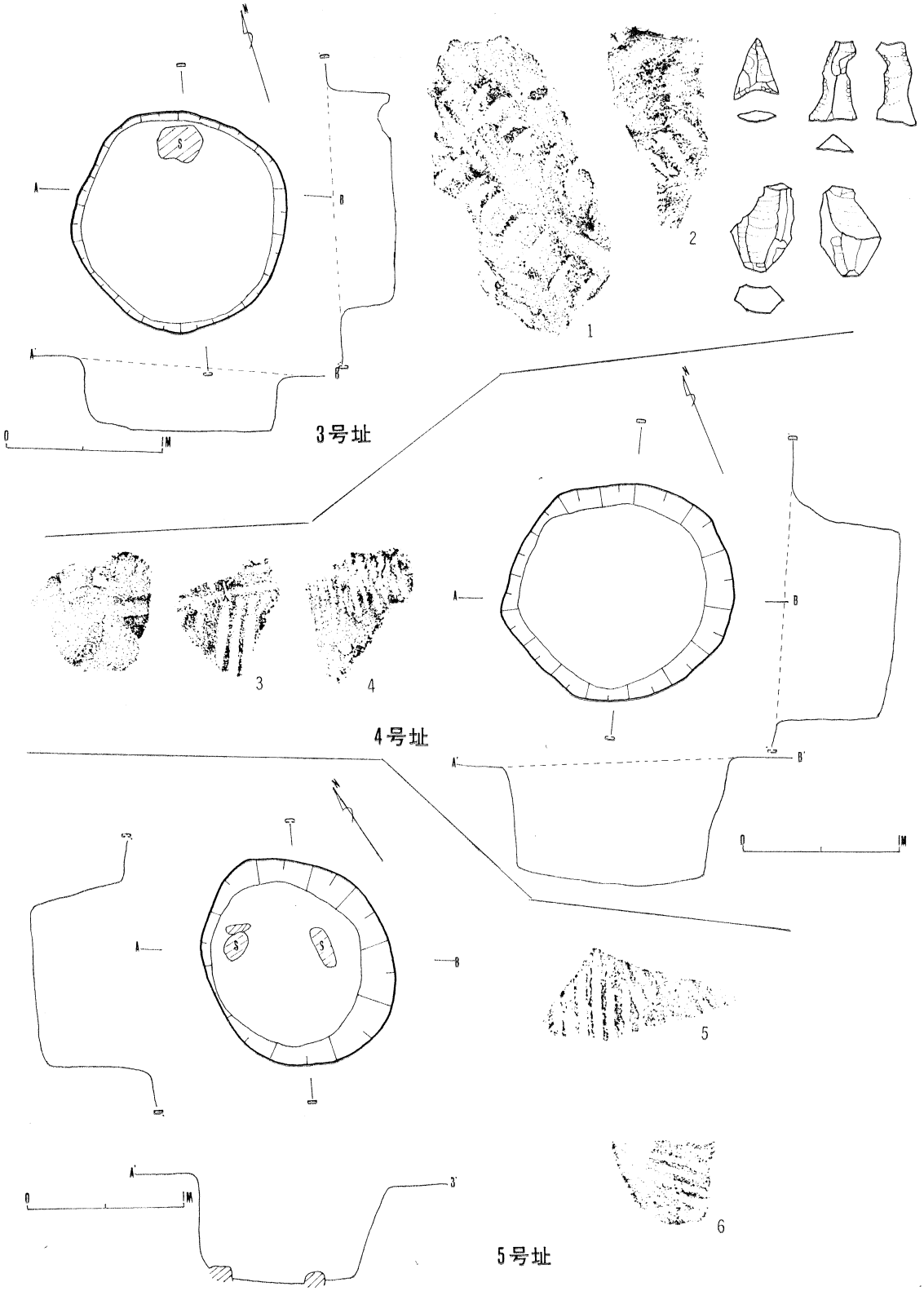
竪穴内の埋没土壌はソフトロームが充満しており，底部直上に10 cm程黒色有機質腐食土が認められる。充満しているソフトロームは若干赤味を増しており，パサパサして粘質性がない。一担掘り出された後，故意に埋められたと思われる。単に礫層上部まで掘りくぼめた感じであるが，埋没土からして人為的な何らかの埋設を考えても良いのではなかろうか。出土した土器片は少なく，茅山下層式（第6図2），上層（第6図1）式類似土器が出土しているのみである。

5.　第7号竪穴址（第6図下）

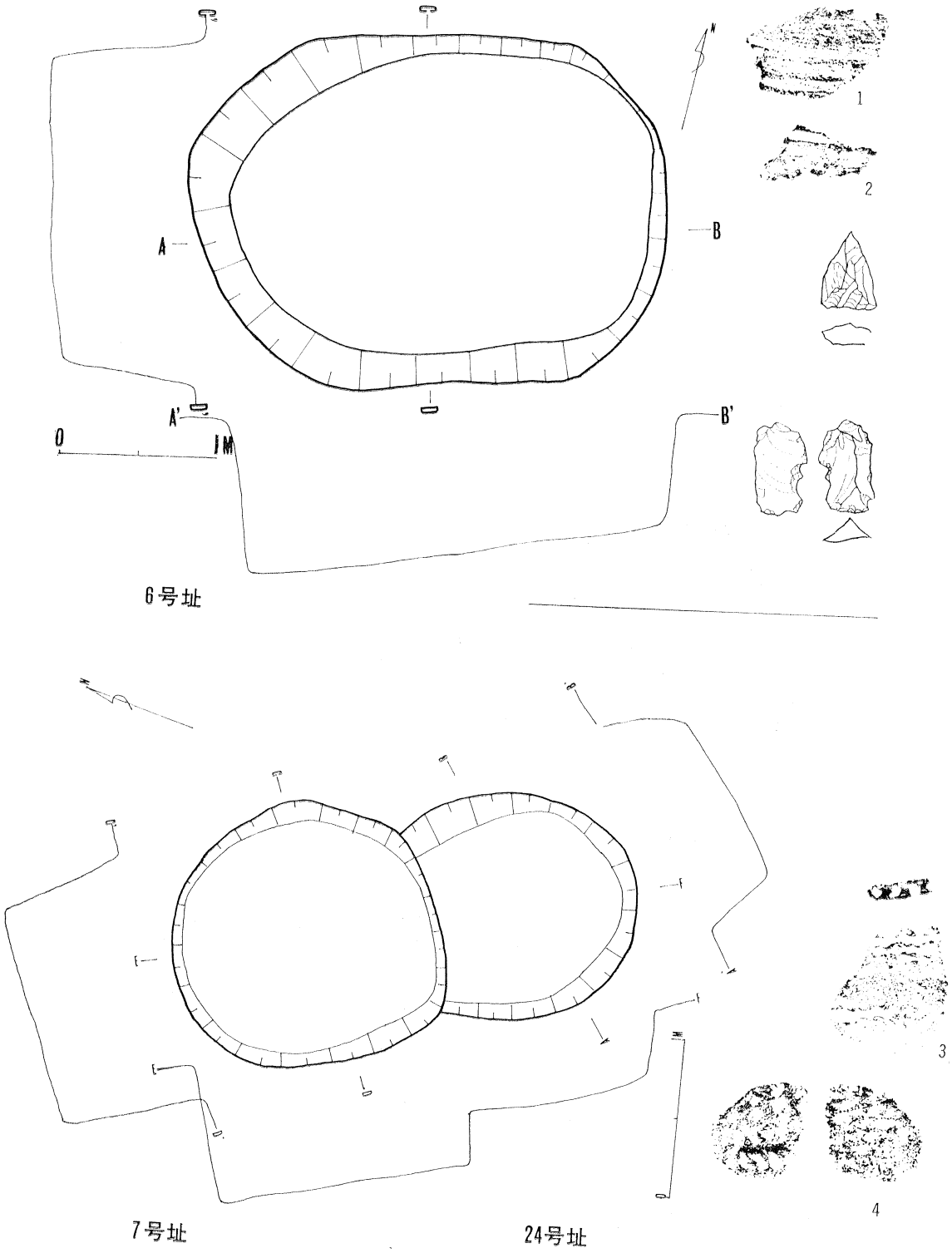
このピットは第1次調査において，第5トレンチ北端に発見され，7号址の一部床面を確認したのみにとどまり，精査は第2次調査に引き継れたものである。

第Ⅲ層下部ソフトローム層を切り込んで，二つの竪穴址が複合関係を示すかと思われる形をしている。7号址は1 m 70位の不整円形を呈し，深さは90 cm を測る。24号址は長径1 m 70 cm，短径1 m 40 cm 程の楕円形の北側が欠けた形である。深さは50 cm を測る。7号址西側壁は垂直な立ち上がりを示す。

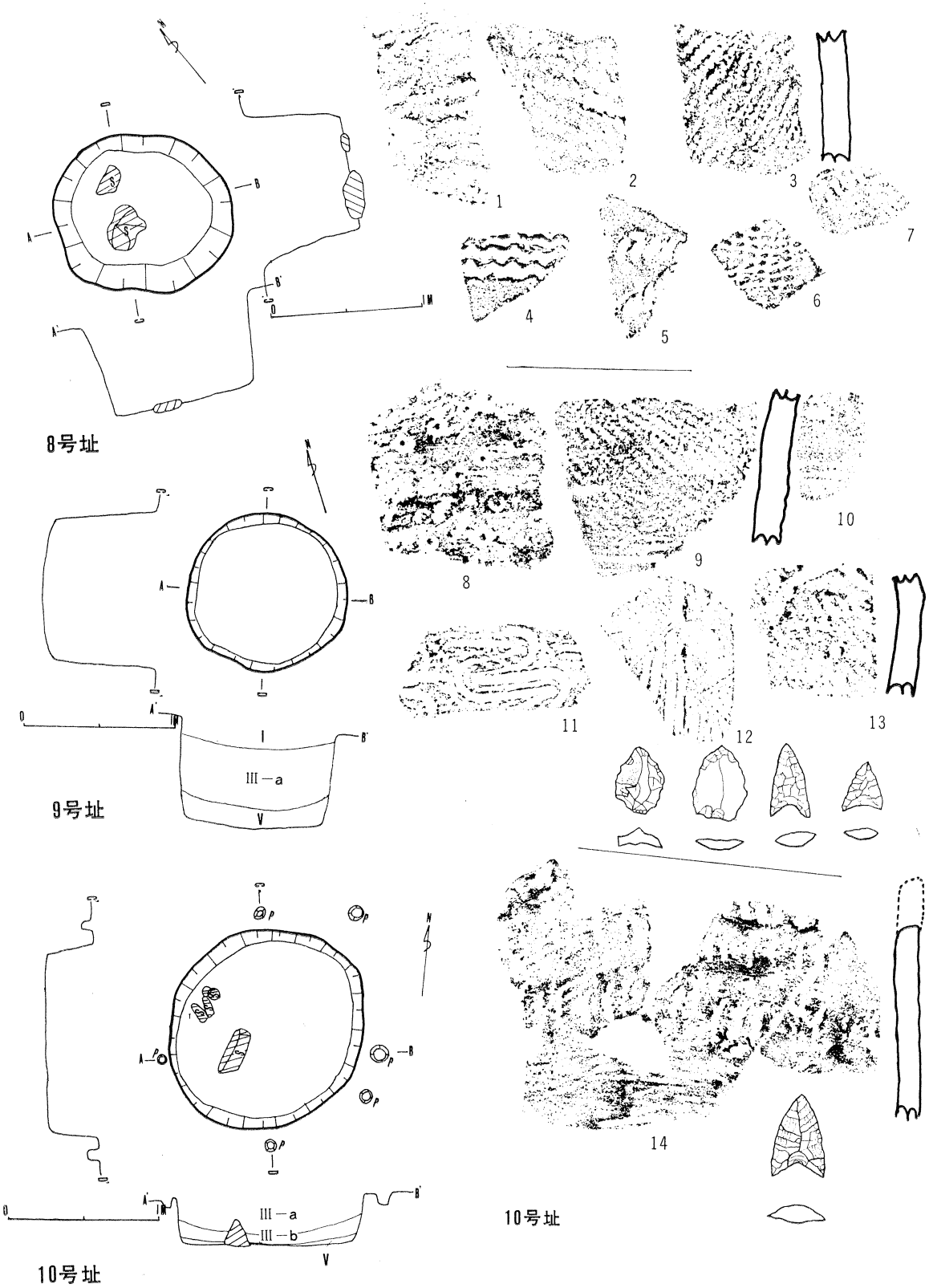
7，24号址共に床面，周壁はタタキが加えられ，堅い。埋没土，よごれたソフトローム，黒色有機質腐食土である。共に黒色土は20 cm 前後，腐食土は5 cm 程である。堆積状態はレンズ状を呈しており自然埋没を示



第5図　第Ⅳ層内竪穴（3号址，4号址，5号址）および同出土遺物



第6図　第Ⅳ層内竪穴址および出土遺物実測図（第6号址，第7号址，第24号址）



第７図　第Ⅳ層内竪穴址および出土遺物実測図（第８号址，第９号址，第10号址）

す。

竪穴址内出土遺物は覆土中より茅山式類似土器片が出土し，また7号址より，花の湖式類似土器（第6図版1）24号址より押型文式土器（第6図 3）がそれぞれ一片ずつ出土している。

6．第8号竪穴址（第7図上）

このピットは第Ⅲ層ソフトローム層を切り込んで，よごれたソフトロームが充満している。径1m10cmの円形を呈し，深さは約60cmを測る。床面から30cm程にかけて，周壁にそってロームブロックの腐乱がかなり認められたことからして，この竪穴は同筒形をなしているが，当初は袋状をなしていたのではないかと思われる。床面直上には5センチ程黒色有機質腐食土が認められた。床面は若干のタタキがあり，花崗岩が2個埋められていた。しかしながら焼土は認められなかった。このピットよりは茅山下層（第7図3），絡縄体圧痕文（第7図1, 2），押型文土器（第7図4, 6, 7）が共伴し，床面直上よりは粕畑式類似土器（第7図5）が出土している。

7．第9号竪穴址（第7図中）

この竪穴は第15トレンチ北端に位置し，表土下40cm第Ⅲ層上部より切り込んでいる。

竪穴の堆積土層状態は大まかにⅢ層に分けることができる。第Ⅰ層は黒色土（耕作土）第Ⅱ層はよごれたソフトローム，第Ⅲ層は黒色有機質腐食土である。第Ⅲ層はしまりが良く，原形をとどめる程の炭化物（腐食による）がかなり認められた。

プランは約1mの正円形を呈し，深さは60cm程の円筒状の竪穴である。出土した遺物は，竪穴上部からは鵜ケ島台式（第7図8, 12）茅山下層式（第7図—9, 11, 13）上層式（第7図10）類似土器である。石器は覆土第Ⅲ層より石鏃4個が出土している。尚竪穴に伴う焼土およびピットは認められなかった。

8．第10号竪穴址（第7図下図版Ⅶ）

第Ⅲ層下部ソフトローム層を切り込んで，よごれたソフトロームが竪穴上部を覆っている。ここではよごれたソフトロームの下にきれいなソフトロームが堆積し，その堆積状態が他の竪穴と違って明瞭に認められた。床面直上には若干の黒色有機質腐食土が認められた。プランは1米30センチ前後のほぼ円形を呈し，深さ30センチを有す。ピット外側には壁にそって6個の小ピットが不規則に並んでいる。共に浅いピットである。多分木の枝などをわたして草をそのうえにのせた簡単な上屋構造を併なった竪穴と考えられる。床面，周壁ともタタキが加えられており良好である。床面上には花崗岩小礫，磨石5個が並べられ，若干焼けた跡がみられる。集礫付近床面に密着して爪形文をもつ粕畑式類似土器（第7図14）が出土している。焼土は特に認められなかった。

9．第13号竪穴址（第8図上）

このピットは第Ⅲ層下部ソフトローム層を浅く切り込んだ竪穴でBグループを形成するものである。埋没土壌はよごれたソフトロームが充満し，床面直上にわずか黒色有機質腐食土が認められた。プランは1米50強の正円形を呈し，深さは30センチを測る。床面は若干舟底形を呈しており，タタキがみられる。覆土中より焼石が発見されている。黒耀石製大形石鏃と野島式類似土器（第8図3, 5），茅山上層式類似土器（第8図1, 2）や山形押型文（第8図4）などが出土している。

10．第14号竪穴址（第8図上右）

この竪穴は遺構第16号（炉穴）に隣接して発見された。表土下35cm，第Ⅲ層上部より切り込んでいる。竪穴内の堆積土壌は第9号竪穴とほぼ同じであるが，第Ⅰ層黒色土の堆積はさほど認められなかった。

竪穴は約1米10cmの円形を呈している。深さは80cmを有し，袋状の竪穴である。床面の状態は全面タタキが加えられており，良好である。出土した土器は茅山上層式類似土器（6）が主体をなし，他に鵜ケ島台式類似土器（第8図7）などがみられたが，床面直上よりの出土はなく，竪穴に直属するかどうか不明である。焼土およびピットは認められなかった。

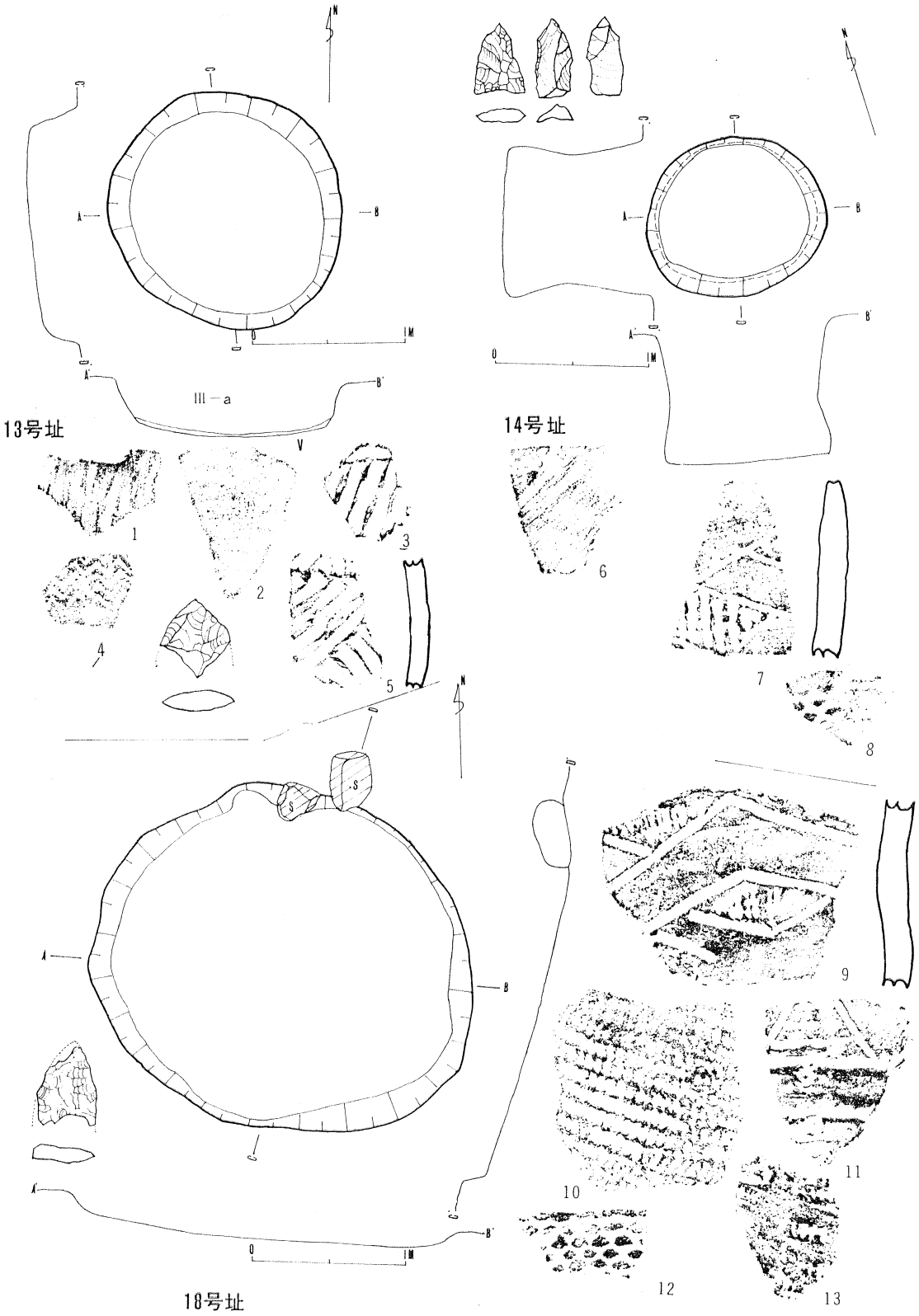
11．第18号竪穴址（第8図下）

このピットは舟山丘陵の中央に位置している。第Ⅲ層下部ソフトローム層をわずかに切り込んだ盆状の竪穴である。径2m20cm程のほぼ正円形を呈す。壁は西側は明瞭であるが，南側および東側はかなりくずれた状態である。壁高は西側で10cmを測る。北側壁に密着した状態で花崗岩が2個発見された。多分この竪穴に付随するものと思われる。床面は若干のタタキがみられ，部分的には良好である。焼土およびピットは確認されなかった。

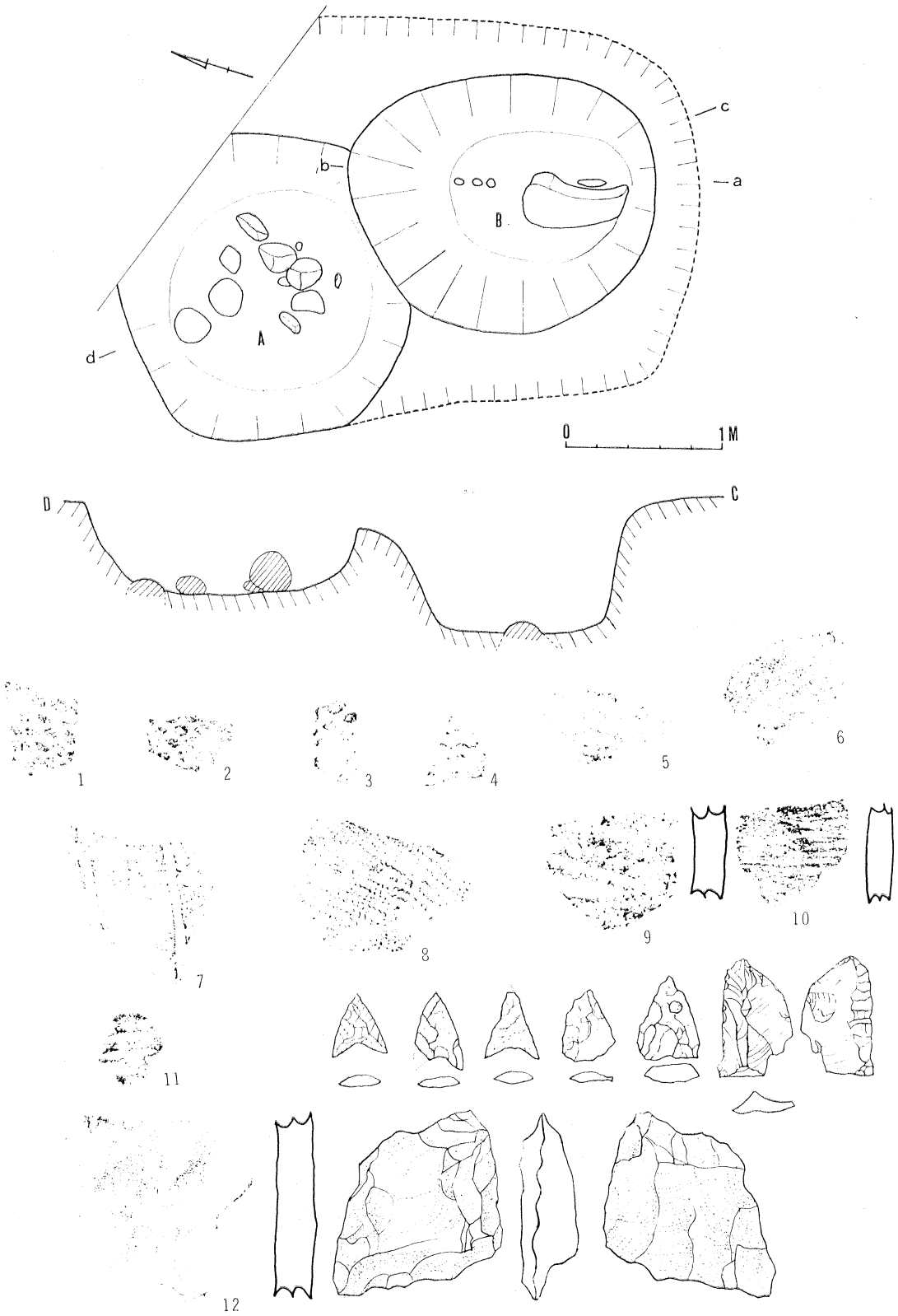
覆土内より楕円押型文式（第8図12），花の湖式，鵜ケ島台式（第8図9, 11），茅山下層式，茅山上層式（第8図13），等類似する各種の土器片が出土している。しかしながら床面直上よりの出土はない。

12．第15号竪穴址A．B（第9図上図版第Ⅷ）

この遺構は第Ⅲ層下部ソフトローム層を切り込んだ二つのピットよりなる。最初赤褐色土が方形に現われ住居址と判断して掘り下げたが壁の立ち上がりがなく，赤褐色土は緩かな傾斜の堆積を示していた。調査が進むうちに，内部に二つのピットを内包するものであることが判明した。北側ピットをA，南側ピットをBと称することとする。AはBよりも浅く，かつ底部が丸底状であるが，Bは円筒状である。AはBによって切られている。



第8図　第Ⅳ層内竪穴址および出土遺物実測図（第13号址，第14号址，第18号址）



第9図　第Ⅳ層内竪穴址および出土遺物実測図（第15号 A. B 址）

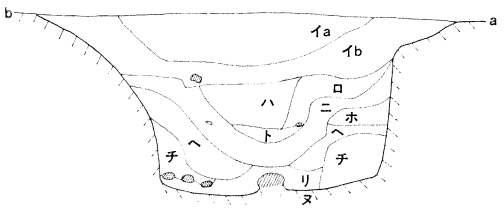
ピットA　（第9図上）

ピットAは径2m，深さ60cmで丸底を呈する。第Ⅲ層下部ソフトロームより切り込み，礫層上面まで及んでいる。覆土は上層においては，赤褐色土（ソフトローム質）であり，これはピットBの覆土と同じである。覆土中位において，黒色バンドがみられ，その下部は若干ソフトロームブロックが混在した赤褐色土となる。覆土上部で凹石の半片が出土し，それは，覆土中層で出土した凹み石の半片に符合した。ピット下底部において，人頭大の石が4個，それよりやや小形の石が数個，不規則に転在するのがみられた。遺物としては，覆土上層赤褐色土中より鵜ヶ島台式類似土器（第9図7）が出土しているが直接的関係はないと思われる。覆土中，下層より数片の押型文式土器（第9図1～6）の小片が散在した。ピット下底部に接して時期不明の繊維含有の厚手の黒色の土器片(12)が出土している。石鏃が数片覆土中層から下層にかけて出土している。

なお，このピットAは南壁をピットBによって切られている。

ピットB　（第10図，第9図。図版Ⅵ）

ピットBは，径2m×1.6mの楕円形を呈し，深さは95センチを有し，ピットAと同じく第Ⅲ層下部ソフトローム層を切り込み，底部は基盤である礫層に達している。このピットの土層は図のごとくである。上部には赤褐色土層（a, b）があり，その下のハ層（褐色土層）で上面はタタキ面になっており，住居址の床面を思わせるものであったが，ピット中央50cm内に限られている。つまり，ブロック状に褐色のハ層が存在している。この周囲にはニ層である黒色土が露出している。ハ層の下には黒色への漸移的な暗褐色土層がある。つまり，黒色土



第10図　小竪穴第15号B址断面実測図（40分の1）

イ　a　赤褐色土
　　b　黄褐色土
ロ　ソフトローム
ハ　混ハードローム
ニ　黒色土
ホ　暗褐色土
ヘ　黒褐色土
ト　暗黒色土
チ　ソフトローム
リ　炭ソフトローム
ヌ　礫層

層ニ層をU字状に埋設した上にロームブロックを含んだ褐色土（ハ層）を内部に埋設しているのである。ニ層の下には暗褐色土層が存在する。ニ層の下には中央部を除く壁側にチ層―褐色土（第Ⅲ層下部ソフトローム）があり，中央部にはリ層―炭化物を含む暗褐色土層が存在している。遺物はイ層からニ層までに見出すことができた。特に多く見出されるのはイ層であり，茅山下層式（第9図11, 12）上層式類似土器（第9図8, 9, 10）が出土している。ロ～ニ層にかけては遺物はほとんど見出すことはできなかった。リ層中の炭化物は集中的でなく散在しており，土器・石器類は全くみられなかった。

ピットの堆積状態は他の多くのピットと違って明らかに何らかの人工的な埋設が考えられる。この遺構を土壙的な性格を持つものと考えることも可能なわけである。（高林・児玉）

13．第16号炉穴址（第11図上，図版Ⅵ）

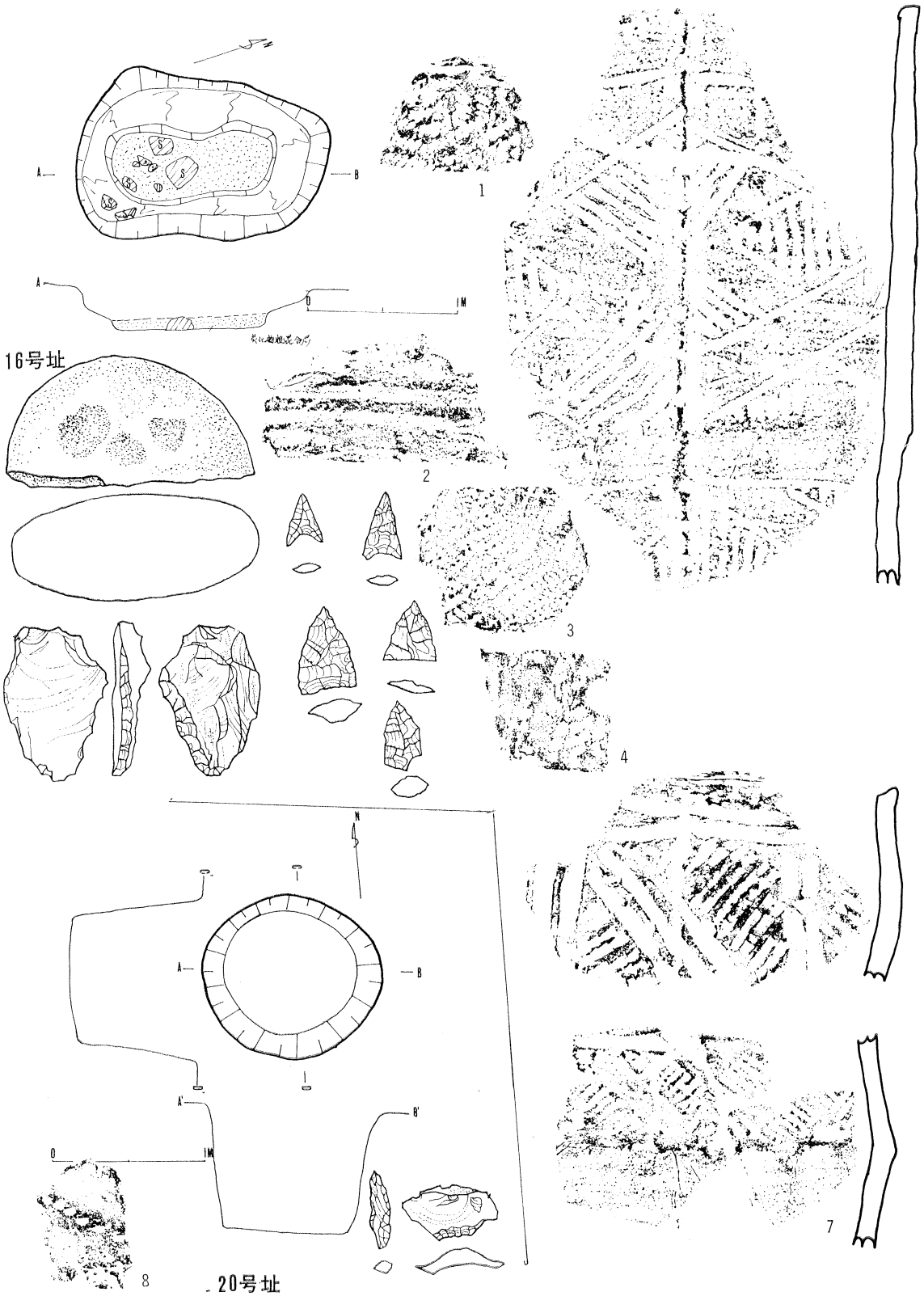
この遺構は表土下35センチ第Ⅲ層上部を掘り込んで中に段を持つ深さ30cmほどの竪穴である。外側は1m60cm，1mのほぼ楕円形をなしている。内側は長径1m，短径40cmほどの中央がくびれた楕円形のピットである。竪穴底部にはかなりの炭化物粒を含んだ焼土が10cmほど，固くしまって堆積している。焼土内には花崗岩質の焼石が数個転在してみられる。

この竪穴からは他の竪穴に比べて多量の土器片，石器が出土している。出土土器は鵜ヶ島台式類似土器（第11図4, 5, 6, 7）茅山下層式（第11図1, 3）同，上層式類似土器（第11図2）が多量に出土している。鵜ヶ島台式，茅山下層式類似土器は焼土内に焼石を囲む状態でつぶれた同一個体として出土している。石器は石鏃を主体として10点を越えている。焼土の堆積状態，焼石などからして，この竪穴は炉穴として考えて良いと思われる。この炉穴に併なうと思われる鵜ヶ島式・茅山下層式類似土器両者の時間的差異が問題となってくるがここでは報告にとどめておきたい。

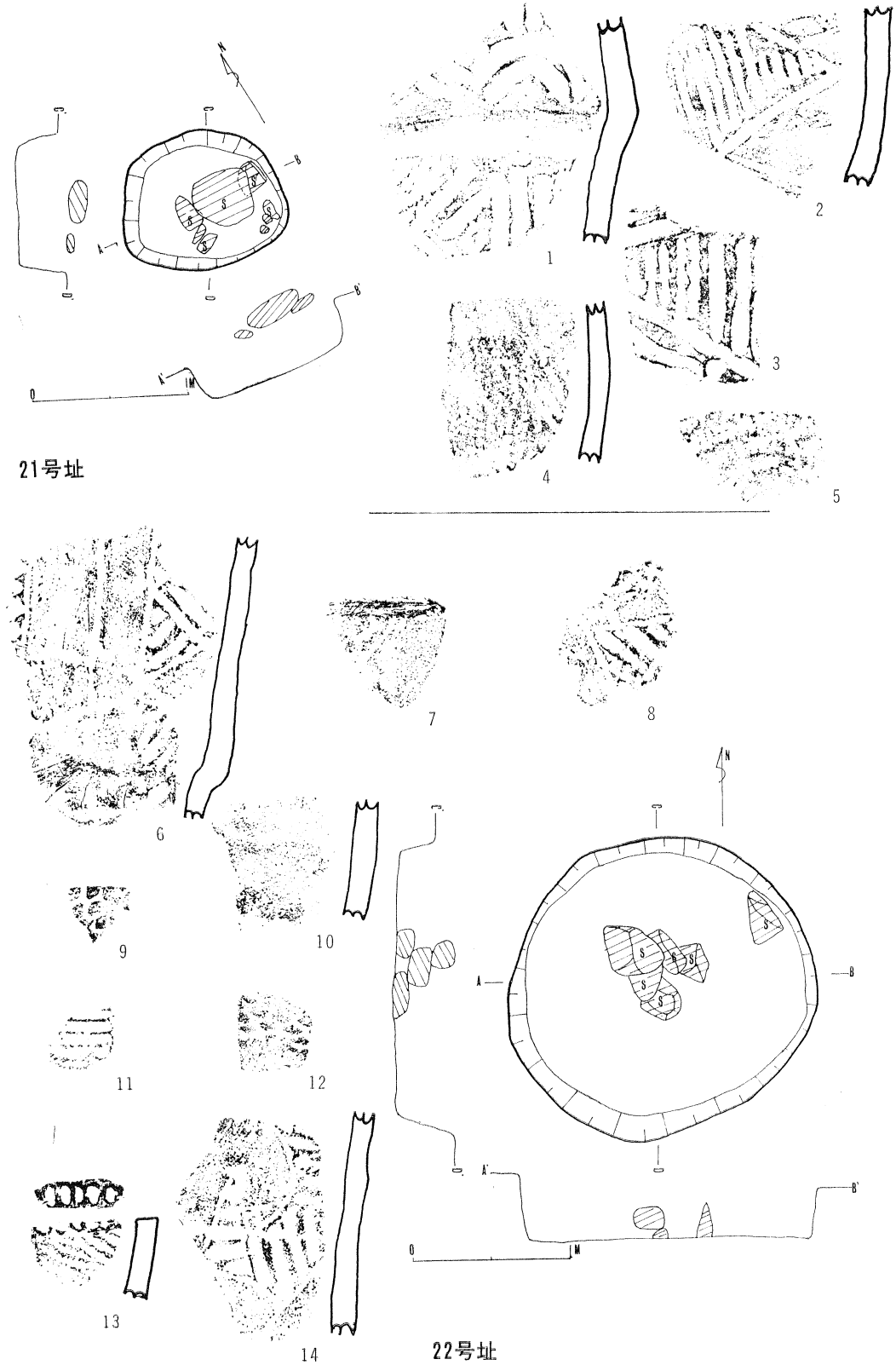
14．第20号竪穴址（第11図）

この竪穴は第5トレンチ南端・舟山丘陵の南斜面にかかる所に位置し，第7号竪穴と共にAグループを形成するものである。

竪穴の埋没土は上部を黒色土が覆い，よごれたソフトローム・黒色有機質腐食土の順で堆積している。黒色土が竪穴内上部を覆っているのは多分に桑畑の撹乱によるものと思われる。プランは東西80cm強，南北96cmほどのほぼ楕円形を呈し，深さは60cmを有す。床面・周壁ともにタタキが加えられ，良好である。竪穴に付属する



第11図　第Ⅳ層内竪穴址および出土遺物実測図（第16号址，第20号址）



第12図　第Ⅳ層内竪穴址および出土遺物実測図（第21号址，第22号址）

焼土などは認められなかった。この竪穴より黒耀石製石錐，リタッチをもった剝片が出土し，竪穴上部より，粕畑式類似土器（第11図8）が出土しているのみである。

15．第21号竪穴址（第12図上）

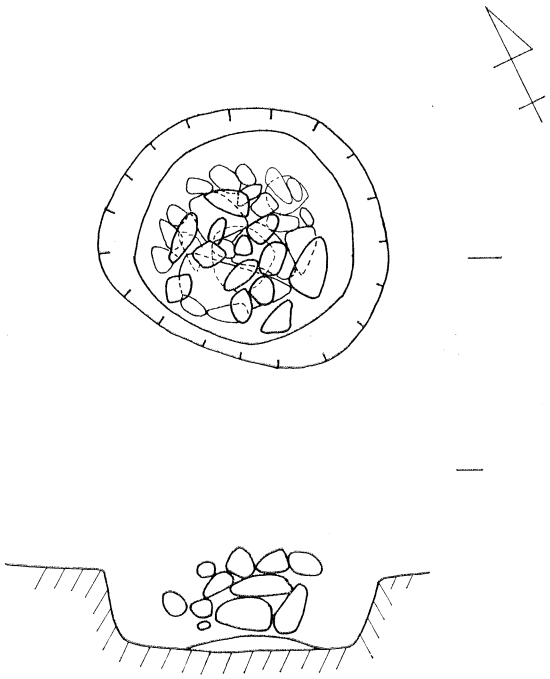
この遺構は表土下40センチ第Ⅲ層上部ソフトローム層を切り込んで，底部中央に盛土を行ない，その上に中央に平扁な花崗岩を置き，そのまわりにやはりこぶし大の石を配置してある。石・盛り土を除いた遺構は径1米ほどの不整円形をなし，深さ30センチを示す。一担ピットを掘り込んだ後に中心部に盛土が施されてある。ピット壁際は黒色土によって覆われている。中央の偏平な石の下より鵜ケ島台式土器（第12図1,2,3）が出土している。さらに絡条体圧痕文土器（第12図5），茅山上層式類似土器（第12図4）などが覆土中より出土している。遺構の堆積状態より何らかの埋設的な集石址を考えても良いであろう。

16．第22号竪穴址（第12図下・図版Ⅴ）

このピットは第13号南隣に位置し，浅く広い竪穴としてBグループを形成するものである。第Ⅲ層下部ソフトローム層を切り込んでよごれたソフトロームがかたくしまって堆積し，床面には黒色有機質腐食土が5 cmほど認められた。プランは径2m弱の正円形を呈し，壁高は40 cm前後を有す。

竪穴中央には床面上に頭大よりやや大きめな花崗岩が5個立体的に置かれている。石の下より同一個体と思われる鵜ケ島台式類似土器（第12図6, 8, 11, 14）がつぶれた状態で出土している所から，この石は埋設に伴なうものと思われる。出土土器は他に覆土上部より押型文式（第12図9, 12）茅山上層式類似土器（第12図7, 12）が出土している。焼土およびピットは認められなかった。

（以上各号　吉村　進）



第13図　第Ⅱ層内遺構実測図（11号土拡）

Ⅱ　第Ⅲ層内の遺構

1．第11号土拡（第13図，図版Ⅹ）

この遺構は第17トレンチ北端に位置し，第Ⅱ層上部を切り込んで大小の花崗岩を埋設してある。ピットの規模は直径1mのほぼ円形を呈し，深さは25 cmを測る。石の埋設状態は底部に若干のテラスを設け，その上に石を三段にぎっしりと積んである。埋設されている石の中には焼けたと思われる石もかなり発見された。遺構の上部は耕作土が堆積しているが，底部にはソフトロームが堆積している。この遺構内よりの土器の出土はないが，周辺から大洞A′式に比定され得る土器がかなり出土している点，石の埋設方法からして，弥生時代のものとは考えられず，縄文晩期の遺構と思われる。さらにこの遺構は土壙的性格をもつものと思われる。注目すべき遺物として土壙内底部，扁平な大きな石の下から出土した青銅器片である。この青銅器片は出土状態からして，後の流入とは考えられず，この遺構に伴うものと思われる。土壙墓と青銅器との関係などさまざまな問題があるが，報告にとどめて今後の検討を待ちたいと思う。

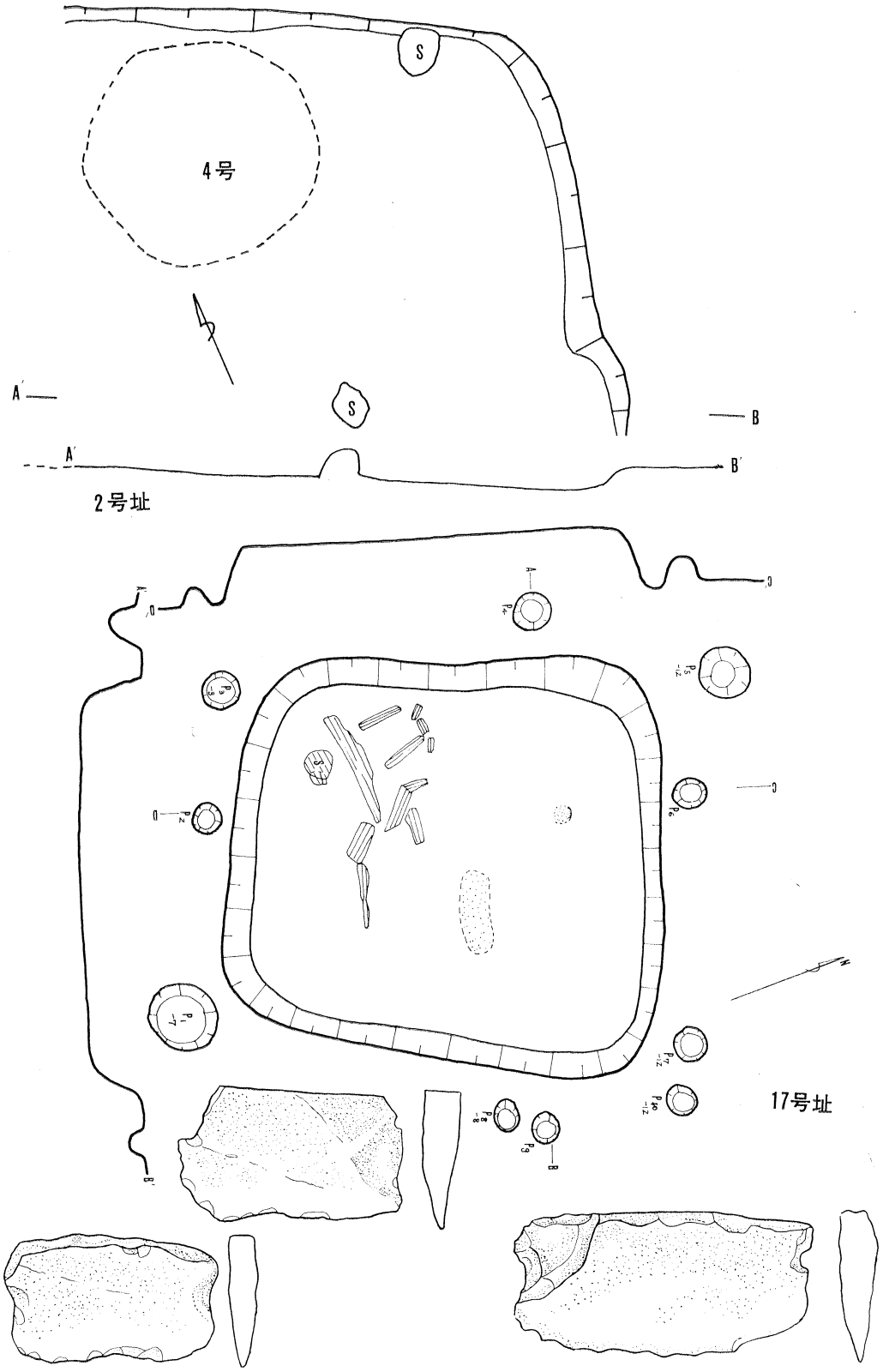
2．第1号竪穴式住居址（第14図・図版Ⅺ）

本遺跡における弥生式文化時代の遺構・遺物は遺跡の所在地である舟山孤立丘の一番西側にあたり，すでに開田されている地域に接している。表面採集においては弥生式の遺物は見当らなかったが，本調査において住居址3個，少量の土器石器の検出を見た。次にその遺構，遺物についての概略を述べる。

調査区域の西側に面した，グリットA21を中心とした位置に検出された。耕作により深く耕されており表土→漸移層→ソフトロームがはっきりせず，石囲炉の検出により住居址であることがわかった。

本住居址は隅丸方形のプランで規模は東西3.4m，南北4mの竪穴で主軸方向N—20—Eにとる。壁は耕作のためローム面が削られており壁高は南北西側は20 cm，東側は遺存状態不良で一部消滅している。また壁は緩やかである。床面上の施設として5個の柱穴が挙げられる。p_1 p_2 p_3 p_4を柱穴と解した。p_1 p_2 p_3の3柱穴は

第14図　第Ⅱ，Ⅲ層内遺構実測図（第1号竪穴）



第15図　第Ⅱ，Ⅲ層内遺構および出土遺物実測図（第2号址，第17号址）

径20～30 cm，深さ36 cmとやや小さく，p_4は径40 cm，深さ66 cmと大形である。p_5は不正楕円形で深さ23 cmあり内部より遺物は検出されていない。耕作上のものか，貯蔵庫か不明である。

炉址は北側の柱穴p_3 p_4の中央に4個の石で囲まれた石囲炉が設けられその中心部に底部を欠いた鉢形の土器を埋めてあり火壺としての役をはたしている。石囲と土器の間には焼土があり土器も焼けているが，土器の内部は軟らかい黒土と小量の炭化物が充満していた。ほかに中央東よりに焼土が直径20 cmの楕円形で舟底形に残っていた。

床面は平らでやや軟弱なたたきになっており一部貼床になっていた。（この床面の下部より縄文早期の竪穴遺構が検出された）。ほかに床面に頭大の石1個とこぶし大の石3個が存在していた。こぶし大の石は焼けており炉と何らかの関係があったと思われる。

遺物は石囲炉の中から検出された鉢形の土器と小形丸底の土器で弥生後期に所属するもので（第24図27）櫛描波状文を頸部に施してあり口縁が外反している。

3．第2号竪穴住居址（第15図上）

第1号住居址より西方4mの調査区域最西端，グリットB24を中心とした位置に検出された。第1号住居址より耕作のため遺存状態が不良であり，しかも西端であったことから壁，床面の一部しか調査できなかった。検出されたのは住居址の東北部でプランは隅丸であること，壁高は約20 cmで東側の壁は緩やかで胴張を呈している。北側の壁は急で直線を呈している。床面はやや堅いたたきになっており中央よりは貼床になっていた。この住居址の下部より縄文早期の遺構が検出された。

床面の北東の隅よりに径26 cm，深さ50 cmのピットがあり柱穴と解した。床面上に土器の床部が2個出土した。1個は破損した部分を平らに削り器台か何かに使用したものと思われる。2個とも上げ底であり上部器形ははっきりしない。

4．第17号竪穴住居址（第15図下，図版Ⅸ）

第1号址より南へ4m，西側水田に接した調査区域西端，グリットW20を中心とした位置に検出された。

住居址は東西2.5m，南北2.7mの小形でしかも南側が北側よりも短かくやや台形の隅丸方形のプランを持っている。主軸方向はN—20—Sである。床面はたたきになっており3個の弥生式住居のうちでは一番堅くなっていた。

この住居址は火災にあったのか一面に炭化物が散布されたように散らばっていた。特に南西の隅には数本の木炭がかたまって検出されたこの木炭は西から東に向かって倒れており大きい木炭は径10 cm長さ1mもあり径7～10 cmのものは杉であり径の小さなものは松であることがわかった。床面中央東よりに口縁底部が欠損している土器がつぶれて出土した。その下に焼土が径60 cmの楕円形に堆積され舟底形に堅くなっていた。これが炉と考えられる。また西北よりに径20 cmの円形の焼土がみられた。南西壁にそった床面に2個の打製の石庖丁が検出された。竪穴内には柱穴と思われるピットは存在しない。

壁上外周に10個のピットがあるp_4とp_8，p_3とp_7，p_5とp_9，p_2とp_6が竪穴を間に対称的になっており，p_1とp_{10}が東北の隅で対称になっている。このピットが柱穴と考えられる。p_1～p_{10}すべて浅く小形であるが穴の底部が竪穴側が深く，穴の方向が竪穴の中心部に向いている。したがって上屋構造は宝形造りの形態を持っていたことが推察される。

この住居址は他の弥生住居と比較して小形である。柱穴が竪穴外周にあり，床面一面に炭化物があったことが異なっていた。

遺物は床面焼土上に，一面にハケ状の文様がついている。壺形の，漏斗状複合口縁の立上り部分の破片が出土した石器は打製の石庖丁が出土している。（第15図下）　（本田　秀明）

Ⅲ　第Ⅱ層内の遺構

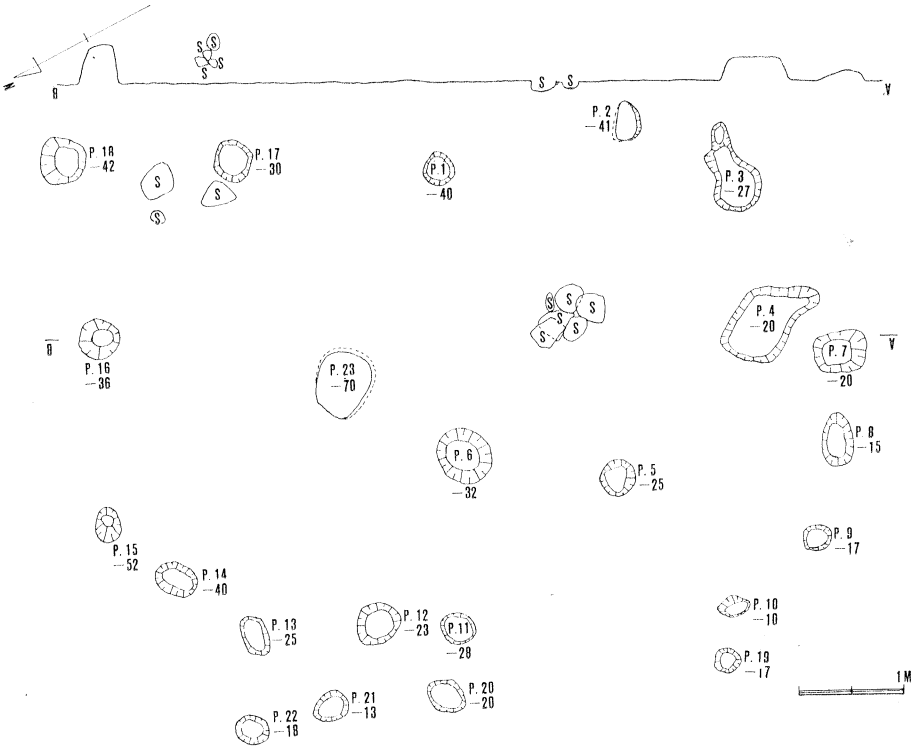
1．第23号遺構（第16図・図版Ⅸ）

この遺構は第5区の中心部に現われる。東西5m，南北8mの楕円形に15箇の柱穴が配置されこの内部に直径50cm～60cmのやや大形のピットが1.5m間隔に孤状に並びそれに囲まれるように枕大の石5箇で構成される配石遺構がある。層位は第2層中位である。

多くのピットのうち23ピットだけは他のものと異なり，60×50，深さ70 cmの袋状のもので，内部は真黒な腐食質が入っていた。

また，このピットの南側には6個からなる配石があり，堀ノ内Ⅱ式の土器がかたまって出土している。

数多くのピットを掘り下げて考えて見るとこの23ピットと集石を中心とした南北に長い小判型のプランをもつ平地式の建物跡と考えられる。　（柴　登己夫）



第16図　第23号柱穴址実測図

四　遺　　物

I　土　　器

今回の調査で発掘された土器は，復元可能なもの三個体および文様構成状態の判明でき得るものが大小の破片併せて約1600片を数える。層位別の包含量の比率は第Ⅱ層60%，第Ⅰ層30%第Ⅲ層20%で第1層下部から第Ⅱ層が主要包含層であった。時期別には縄文時代早期に属するものが85%を占め，中期が1%，後期が2%，晩期が10%，弥生時代に属するもの2%で縄文早期の土器片が圧倒的である。

これらの土器を文様，形態，製成の特徴および出土層位によって，10種に分類した。以下その詳細について述べよう。

第1類土器（第17図1～12，図版XII上）

小形の尖底土器で，縄文原体および撚糸原体を回転施文してあり，色調は淡褐色または黒褐色を呈する深鉢形で，胎土中に長石雲母を含み焼成は固く，厚さは中位でやや薄手のものもあり，施文の異なりにより次のように2分類した。

Aは表面に斜縄文を有するもの（1～7）である。（1, 4, 7）はやや外反する口縁で，（1, 4）は黒褐色を呈し，7は茶褐色を呈する。長石，雲母を含み，焼成は良好である。7は内面の斜縄文が，若干はがれている。

（2～3），（5～7）は比較的薄手のものである（2～3）は黒褐色を呈し，（5～6）は茶褐色を呈する。長石，雲母を含み，焼成は不良である。

Bは外面のみに斜縄文を有するもの，（8～11）であるが（8, 11）は比較的厚手のものである。8は口縁部が内反し，口唇部に浅い刻目がある。黒褐色を呈し，長石を含み，焼成は不良，

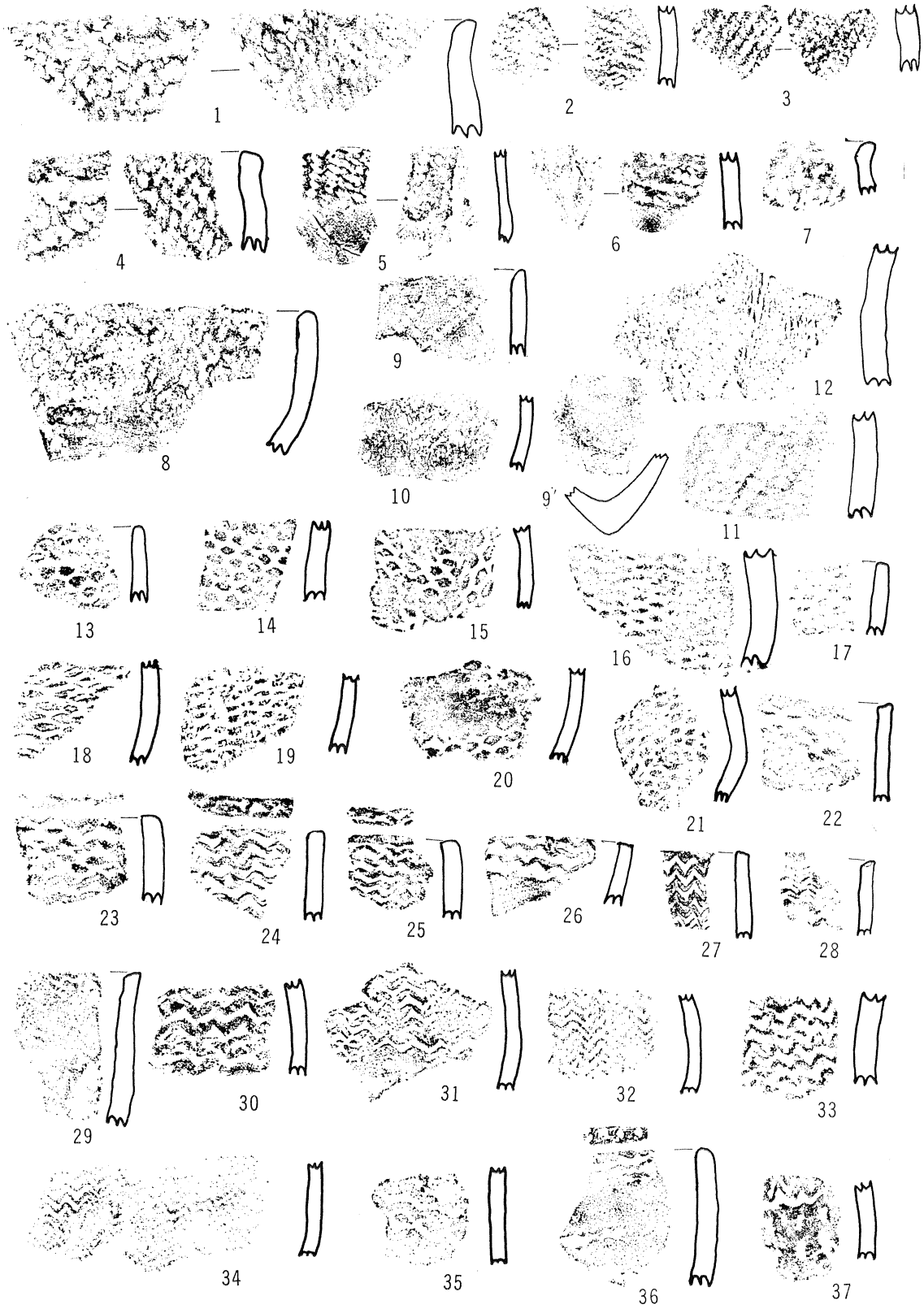
（9, 10）は比較的薄手のもので，茶褐色を呈し，雲母，長石を含み，焼成は良好である。

以上は主として第2類土器とともに第Ⅲ層上面に包含されていたが数は少なく11片を数えたのみである。岐阜県花の湖遺跡出土のⅡ式土器に類似している。

第2類土器　（第17図13～37，図版XII下）

押型文土器と呼ばれているもので文様により2分類できる。

A　楕円押型文を有するもの（13～21）原体を口縁に平行に回転させたものが多い。（13～15, 17）は比較的



第17図　土器拓影（1類，2類）

大粒で，丸味を持った楕円が主体をなしている。色調は茶褐色を呈し，焼成は良好であって，胎土中に長石を含む。

(16, 19) は小粒で丸味の乏しい楕円が主体をなしている。色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

(18) は菱形に近い粒帯が主体をなしている。色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

(20) は大粒の楕円文の間に，無文帯がみられ，無文部には若干，磨いた痕跡が認められる。

楕円が底部上半部では横列に，底部下半部では斜列に配せられている。茶褐色を呈し，焼成は良好である。

B　山形押型文を有するもの (22～37)

(22, 30, 35) は陽刻面と陰刻面は1対1の割合で施文されている。色調は黒味の強い茶色を呈し，焼成は良好である。

(23～25, 36) は口唇部にも文様帯が構成されている。23は陽刻面と陰刻面は1対1。

(24～25) は陽刻面と陰刻面は1対2の割合で施文されている。

(26, 31, 36) は口縁に並行する無文帯を持ち，36は陽刻面と陰刻面は1対3の割合で施文されている。(23～25, 36) 口縁と平行に原体を回転させ口唇にも施文されている。26は陽刻面と陰刻面は1対3の割合で，31は陽刻面は1対1の割合で施文されている。いずれも黒褐色を呈し，焼成は良好，雲母，長石を含んでいる。

(27～28, 32, 34) は施文帯の山形の幅が，非常に狭い。黒褐色を呈し，雲母並びに長石を含み，焼成は不良である。

(29, 33) は茶褐色を呈し，焼成は不良である。37は無文帯部に刺突文が施されている。黒褐色を呈し，長石を含み，焼成は不良である。

以上の押型文は主として第Ⅲ層上面に第1類土器とともに包含され，その数74片でA.B相半ばしているがこの共伴関係に注目したい。特に他の押型文を伴わず組成が比較的単純であることは押型文の1時期を示すものであろう。

第3類土器　(第18図38～42，図版XV上)

器面に絡条体圧痕文が施され，厚さ6～7mmの中厚手で色調黒褐色を呈し，胎土中に繊維を含み焼成はもろく不良である。内面は擦痕の見られるもの (39, 40, 42) とアナダラ属の貝殻腹縁による横位の条痕が施されるもの (38, 41) がある。出土数は極めて少なく15片であり，第2層下部から散発的に出土した。総じて子母口式土器に比定することができる。

第4類土器

厚手の胎土中に繊維を多量に含み，内外ともに貝殻条痕文を地文に持つことを特徴とする1群で出土数最も多く，全出土数の80％を占め，主として第Ⅱ層に包含されていた。施文様が多様で器形もバラエテイを持っているので，7種に分類することができる。

A　(第18図43～50図版Ⅷ)

細隆起線文を主体として文様を構成しているもの (43～50) で (44, 46, 47) は細隆起線の上に円形竹管文が押捺され，(49) は細隆起線の上に刻みが連続押される。また (45) のように微隆起線によって区画された中に横位の貝殻条痕文が施された場合もある。また細隆起線文と沈線文が組み合わせて施文される場合 (48, 50, 51) があり，裏面は (50) が横位の貝殻条痕文で (44～49) 擦痕が認められる。

色調は全体に茶褐色または黒褐色で繊維を多く含み，焼成は中位，器形は口縁が直立し口唇がやや外反する深鉢と思われ野島式土器に比定でき得る.

B　　第19図，第20図 (67～109) 図版XⅢの2)

茶褐色を呈する一般に厚手 (6mm～10mm) の土器で胎土中に多量の繊維と雲母を含み，器形はゆるやかな波状口縁 (67, 75, 99)，または平縁 (79, 83) の深鉢形土器で，口縁直立するものあるいはやや内弯し，口唇は内そぎに近く (83, 81) で胴部に近く段とくびれをもつもの (68, 69, 70, 100, 105, 108) があり，主文様は，沈線によって三角形，台形，菱形など幾何的な区画を施し，その内部を連続刺突または短かい沈線で充塡するもの (67, 75, 78, 88, 92, 104, 106) や，沈線により円形，渦巻などの文様を画き，その間を縄文で埋めるもの (97, 105, 109)，隆起線で稜を構成し半截竹管で連続刺突を施すもの (108)，口縁に斜めの条痕を交錯させその間に連続刻み目を施していくもの (98) などがある。そのほかに，浅い沈線を格子目状に交錯させるもの，(101) や，櫛状工具により，菱形を構成する文様を画きその角に竹管先端を押すもの (69, 70) などがある。また内面に小孔を穿つもの (99) がある。土器の裏側はいずれもアナダラ属の貝殻腹縁による条痕が水平に施されるが擦痕の施されたもの (71～86) もある。図版Ⅵに掲げた炉穴出土の土器はこの代表的なものである。この一群の土器はいわゆる鵜ヶ島台式土器に比定することができ得る。

C　　(第21図，図版XV上)

口縁は直立に近く，やや内弯した口唇に連続刻み目を持ったゆるい波状口縁で，胴部付近がゆるやかにしぼられ，尖底を押しつぶしたような平底を持つ深鉢形土器で，色調は黒褐色または茶褐色で焼成は総じて良い。主文様は，斜縄文で，短いLRの原体を口縁に平行して回転させ胴部以下に至るまで施文する。胎土中に繊維を含み，内面はいずれもアナダラ属の腹縁による横位の条痕を有する場合と擦痕をもつものとに分かれ，貝殻条痕を

もつものは表面の施文がLRの斜縄文が施されたもの（110, 112, 114, 120, 122）かその上に蛇行状の沈線が施される（121）で，擦痕をもつものは条の太い斜縄文（111, 115, 117, 118），羽状縄文の施された（113），列点文の施されるもの（116）がある。出土数は第4群中5%を占める。

以上の一群は恐らく神奈川県横須賀市茅山貝塚下層土器の一部として比定することができよう。

D　（第22図）

土器の外面および内面ともにアナダラ貝の腹縁による条痕を有し，胎土中に繊維を多量に含むもの（124～135）で，急角度の波状口縁で口唇部はやや外反し，胴部上でゆるく屈曲する深鉢形土器である。口縁に斜めの刻み目が施され（124, 125）条痕文は胴部から上半部は口縁に平行で（124, 125, 126, 128）胴部以下は斜めもしくは縦方向（130, 132）に施される。条痕には幅の広いものがありその間が微隆起線を構成するもの（131, 132, 129）などもある。出土数は，第4類中で最も多く780個，約70%強を占めている。いわゆる茅山上層式に比定することができる。

E　（第18図55～57, 59，図版XVの1）

小形の爪形文を器面の幅広い微隆帯の上に連続施文して文様を構成し，胎土中に多量の繊維を含み，色調黒褐色を呈する深鉢形土器で，焼成は中位であるが，繊維層が厚いため，表裏面ともに剝落する場合が多い。裏面は横位の貝殻条痕文で口縁は外傾し口唇は内そぎもしくは平でやや丸味を帯び，連続刻み目をもつ。波状口縁の頂きは内部の貫通した環状の把手が形成され（55, 57）ている。出土数は第4類中2位で15%を占める。この一群は茅山下層式に比定することができる。

F　（第18図60, 64, 65, 66. 図版XVの1・図版VIIの下）

明るい黄褐色のやや薄手な深鉢形土器で口縁は波状を呈しその頂点に皿状の突起を持つ（66）。胎土に繊維が含まれ，器面の表裏とも浅い貝殻腹縁による条痕が全面に施されている。底部は尖底もしくは尖底を押しつぶしたような形態である。図版VIIの第10号小形竪穴の床面出土の土器はこの種の典型的なもので波状の口縁に平行して2列の大きな鋸歯状爪形文が施されるのが特徴である。この爪形文は肋脈のある2枚貝の腹縁を原体とするもので圧痕はシャープである。これと同形のものは（64, 60, 65, 66）であるが爪形の鋸歯状はやや甘い。口唇は，内そぎで丸味を帯び刻み目が施され，やや外反する点，前述のE種と類似している。

総じて早期後葉の他地域土器に直接比定し得るものはないが最も近似しているのは吉井城山第一貝塚貝層直下出土の土器である。しかしながら爪形文はシャープで大きい点が異なる。

G　（第18図58, 62, 63）

わずか3片の出土であるが，薄手の土器でやや内弯する口縁に沿って微隆帯の上に，連続する細い爪形を施しているのが（58）特徴である。また口縁器形は同じだが，口縁に並行して細い爪形をやや間隔をおいて押捺していくもの（63）もある。いずれも土器の内面は擦痕が認められ繊維は含まれない。色調は，赤褐色（63）または黒褐色（58, 62）である。特に58は入海式に比定することができる。63は爪形文としては花の湖式や曽根の土器に近似している。

第5類土器　（第23図，図版XVの2）

明るい茶色を呈する厚さ2mm～5mmの極めて薄手な土器で，焼成は固く，繊維を全く含まない土器片が20片出土している。いわゆる「おせんべい」とよばれ，従来，薄手細線指痕文土器と称された一群である。口唇は丸味をおび内そぎでやや外反し，口唇に刻み目が施される。主文様は口縁に平行して直線または蛇行，円状の薄い隆帯がはりつけられ，その上を器面とともに縦方向の条痕を施したものである。

（136～138），（140～142），（147～148）は薄い粘土紐を，一条から数条にかけてはりつけた隆帯の上に，貝殻腹縁による条痕を斜方向や垂直方向に施文している。

（145～146）は粘土紐を三角状や，円形状にはりつけ，隆紐の上に貝殻条痕文がみられる。

（139, 143, 149）は全く隆帯を加飾してない。外面に貝殻条痕が施文されている。色調は（136, 144～149）は茶褐色を呈し，（137～141）は黒褐色を呈し，（142～143）は黒色を呈している。

（153～154）は横方向の捺痕がつけられ，いずれも（150～151）は貝殻腹縁による弧状の条痕がつけられている。東海地方の木島I式に比定でき得る一群である。

第6類土器　（第23図1～5）

縄文前期の土器に属するもの

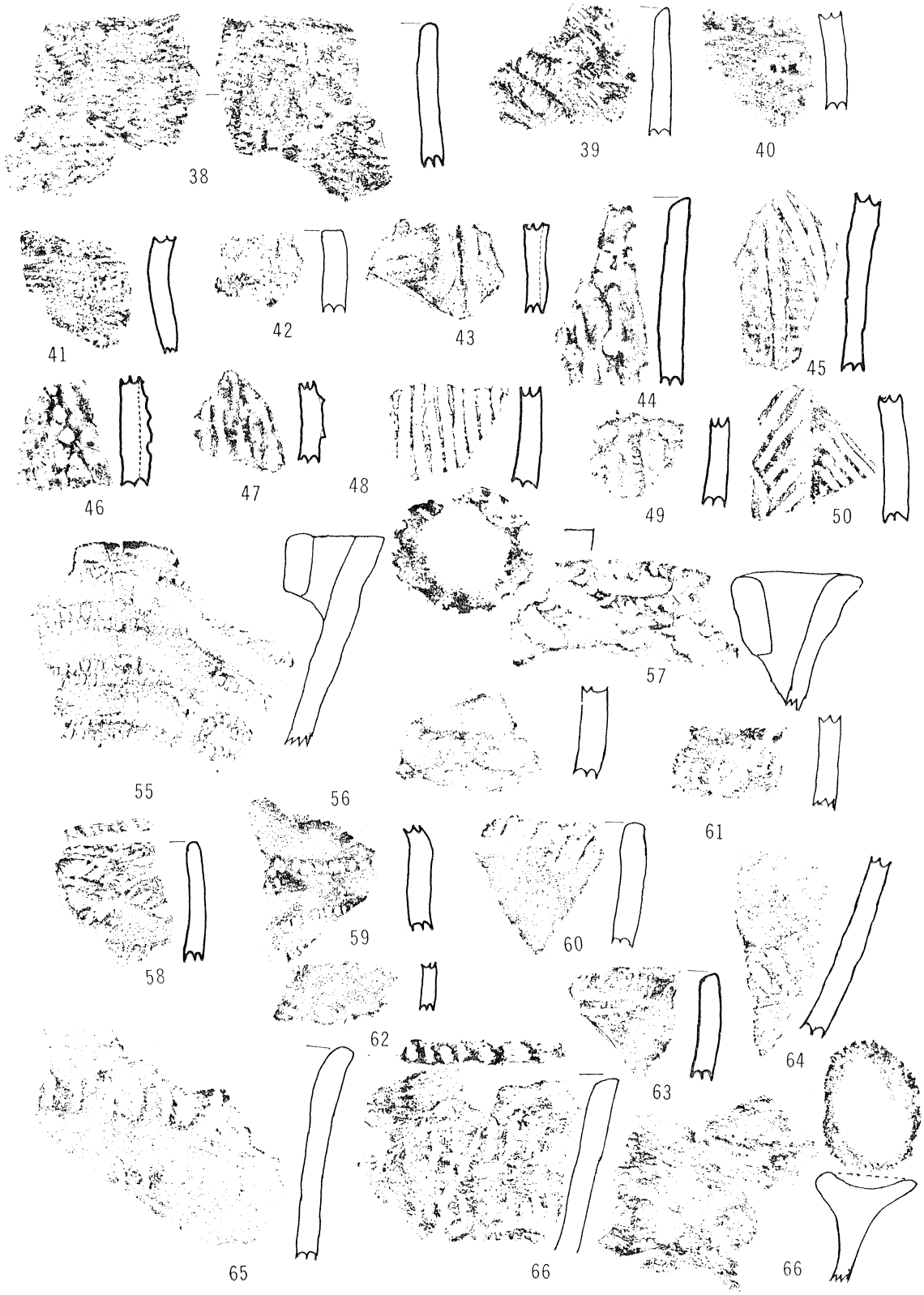
A　縄文前期前葉のもの（1～2）

1は複合口縁を呈し，口縁から胴部にかけて粗い斜縄文を施してある。色調は茶褐色，焼成は中位，胎土中に若干繊維を含み，また少量の雲母を含んでいる。

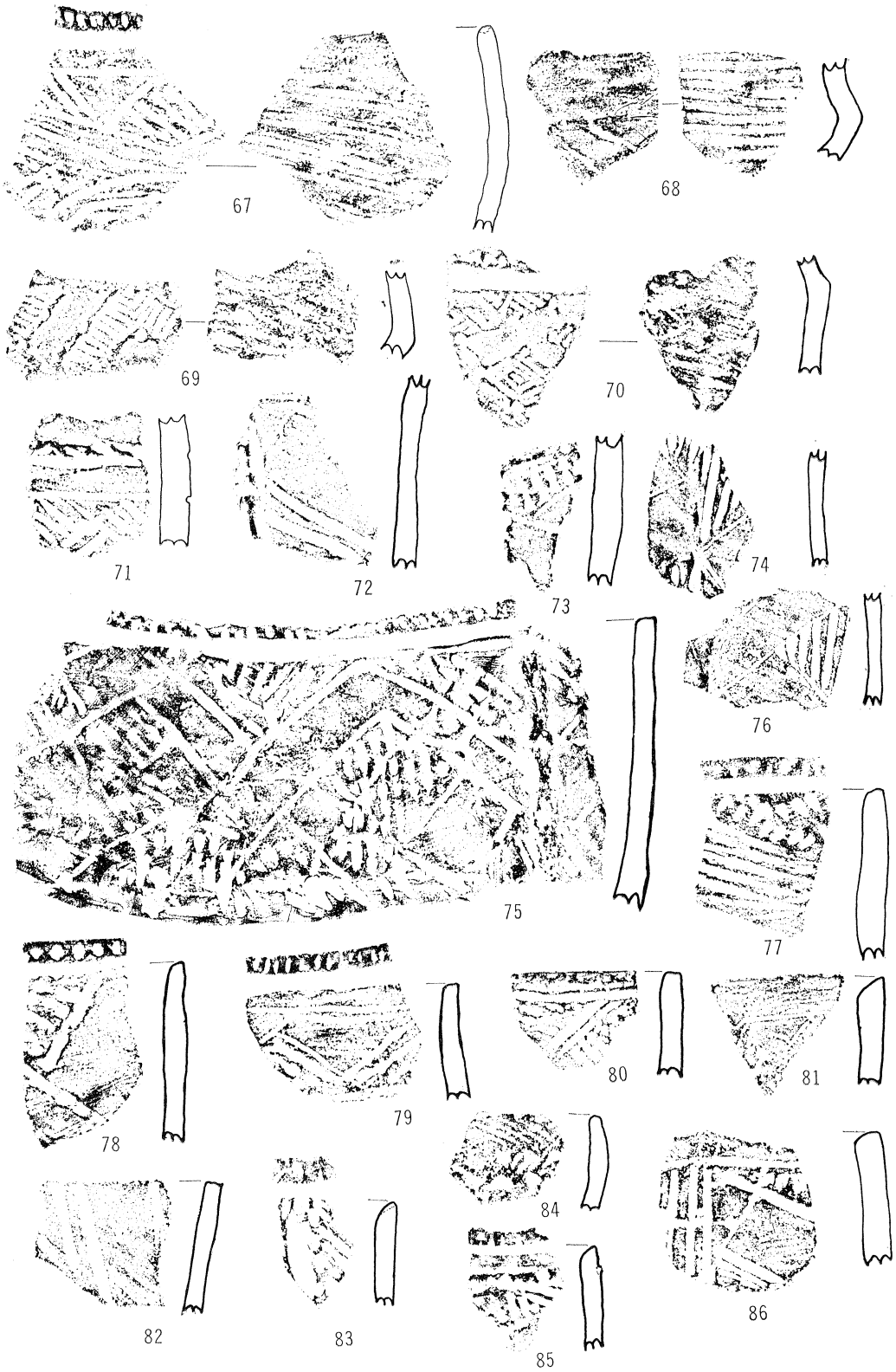
2は斜縄文地に半割竹管による沈線が施されている。色調は黒褐色を呈し，焼成は中位である。胎土中に繊維と雲母を含んでいる。

B　縄文前期後葉のもの（3～5）

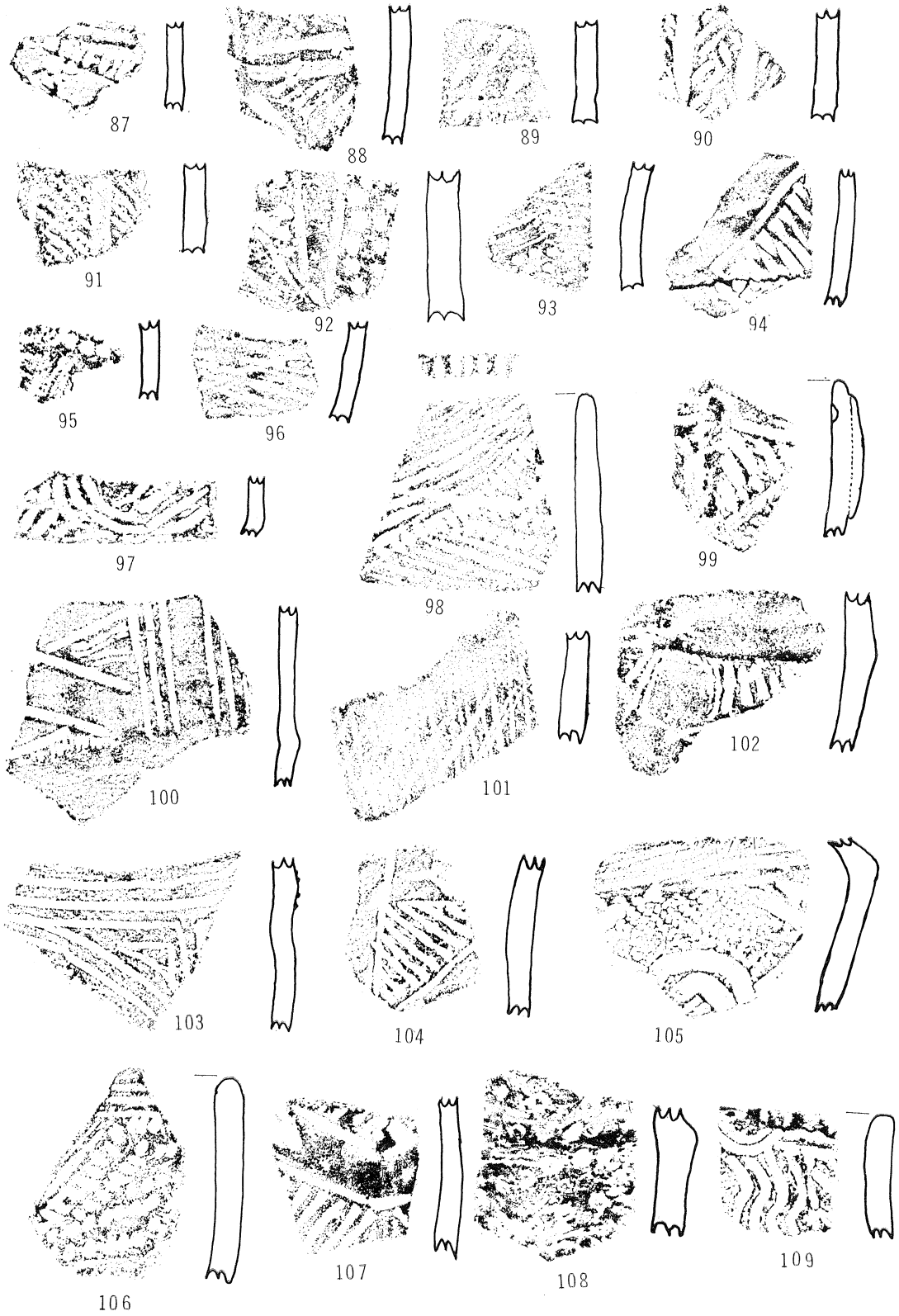
3は連続爪形文によって，文様構成がなされている。色調は茶褐色を呈し，焼成は不良であって，胎土中に長



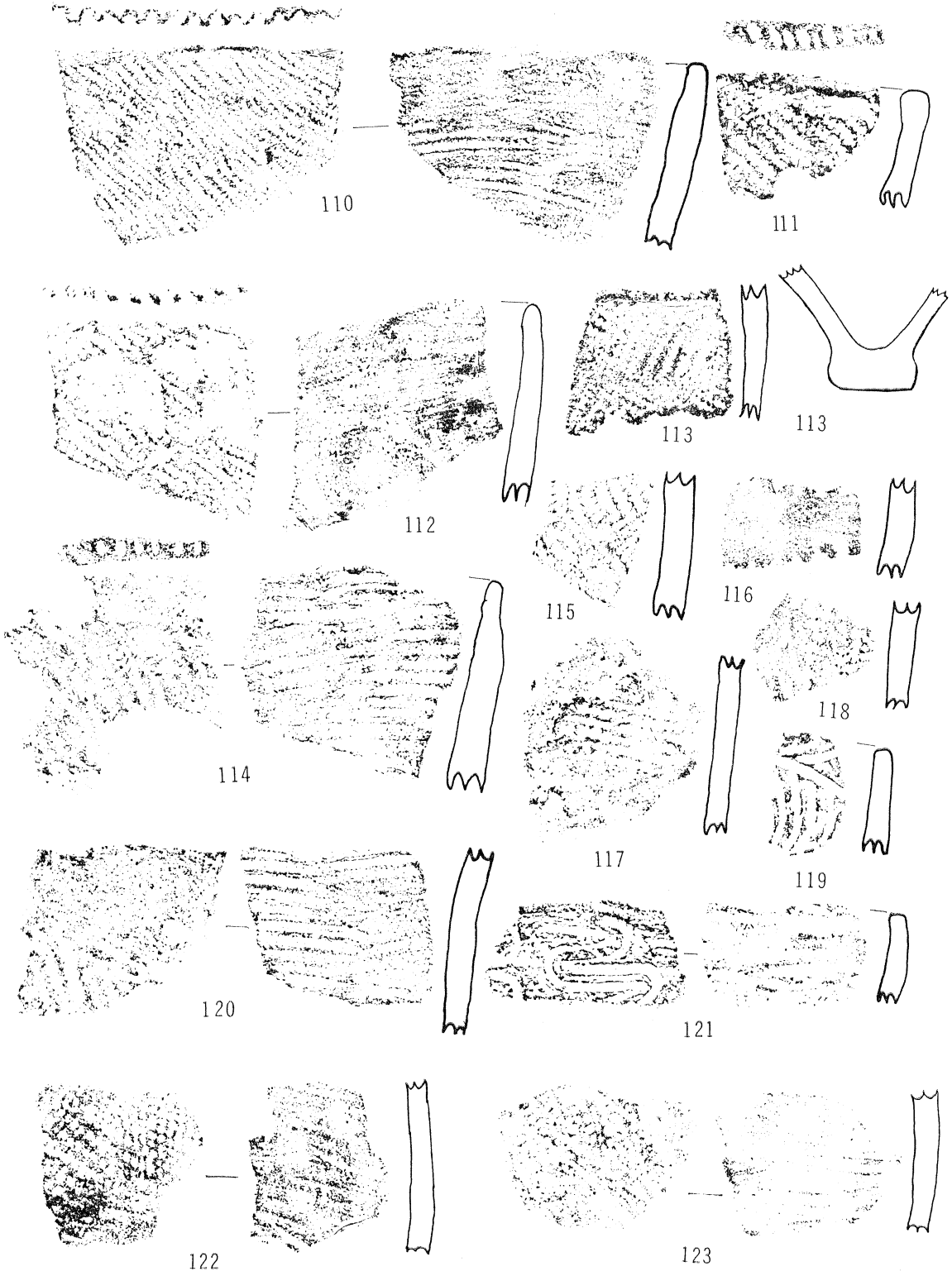
第18図　土器拓影（3類，4類A，4類E）



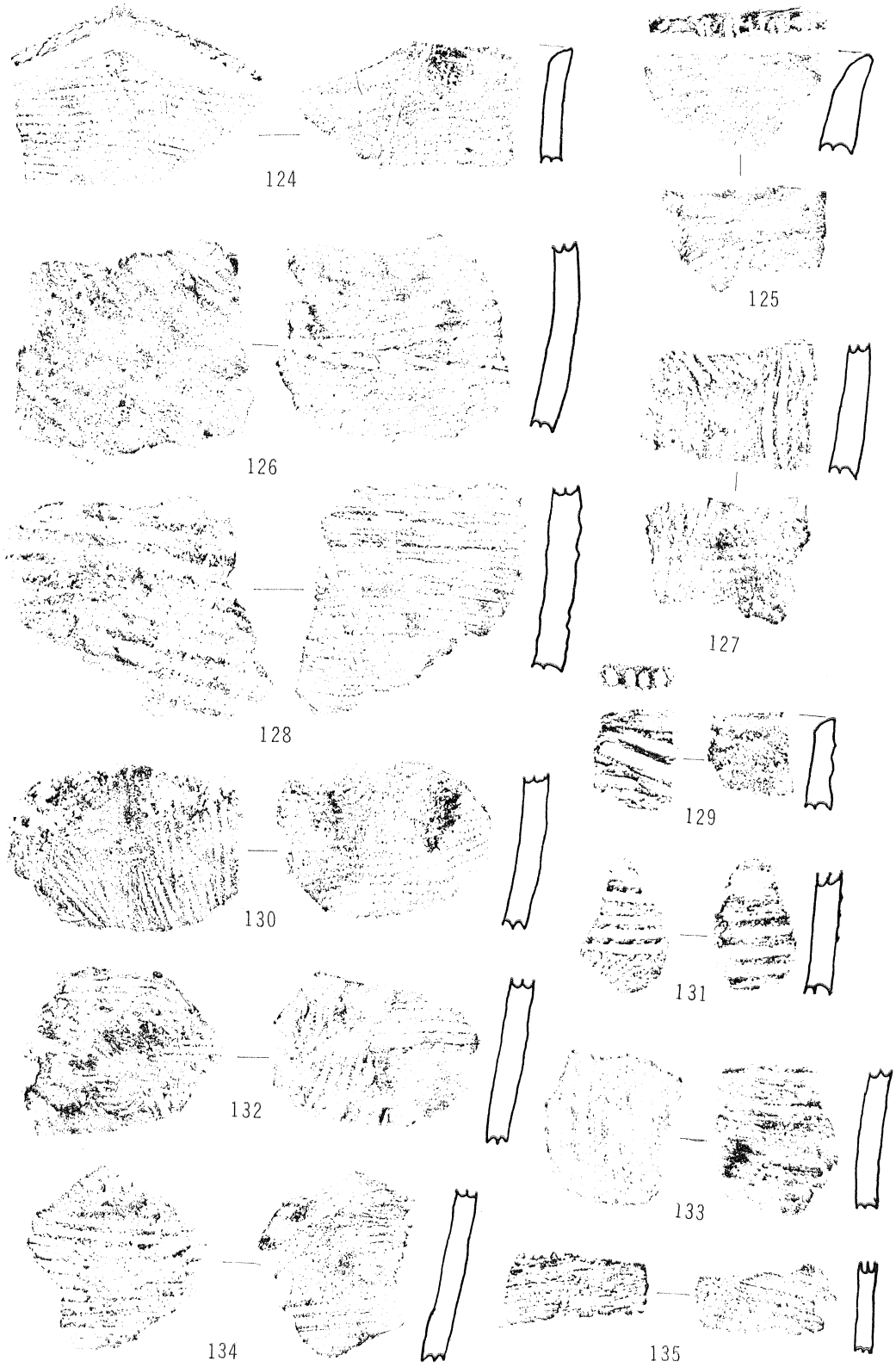
第19図　土器拓影（4類B）



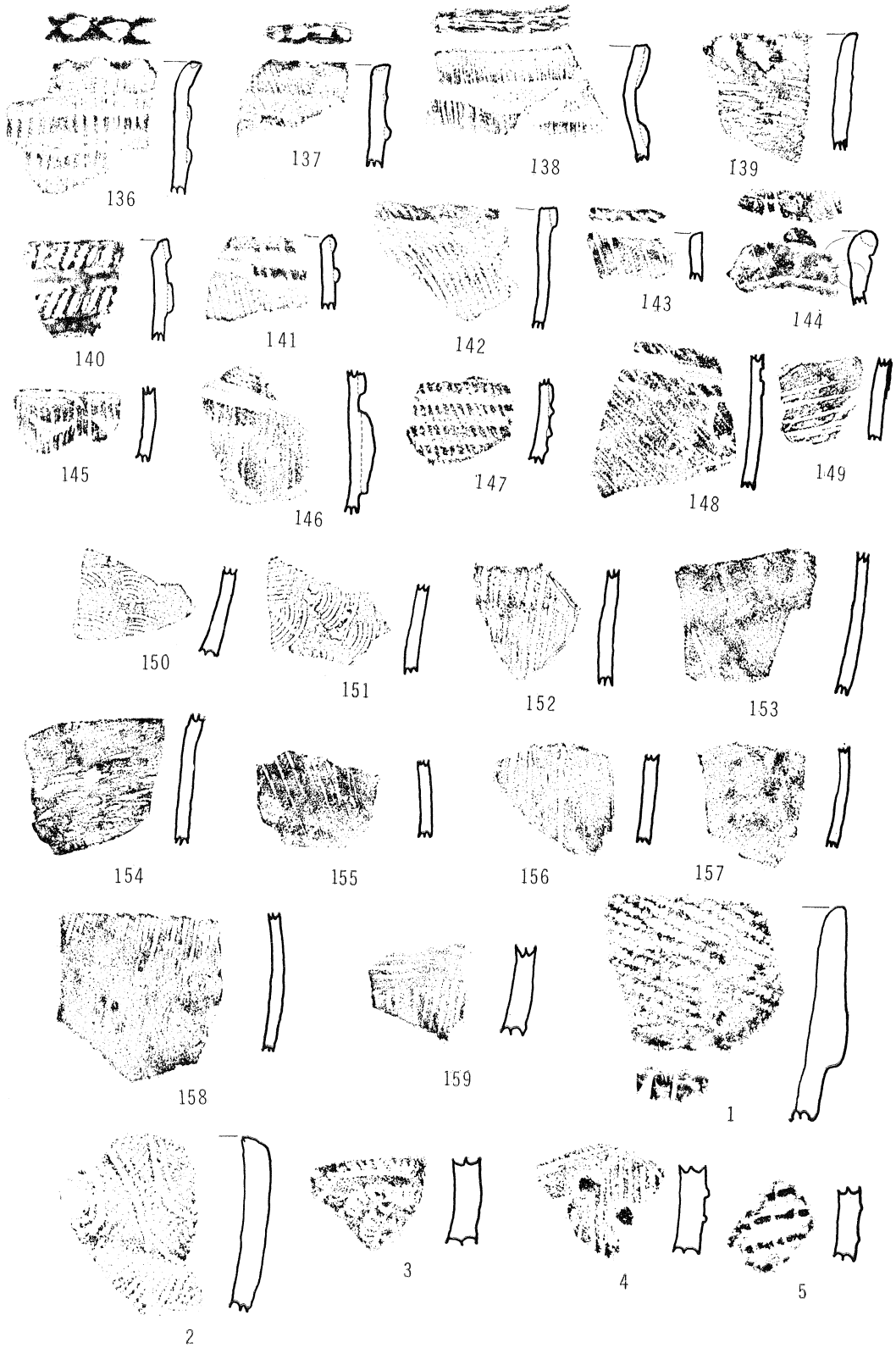
第20図　土器拓影（4類B）



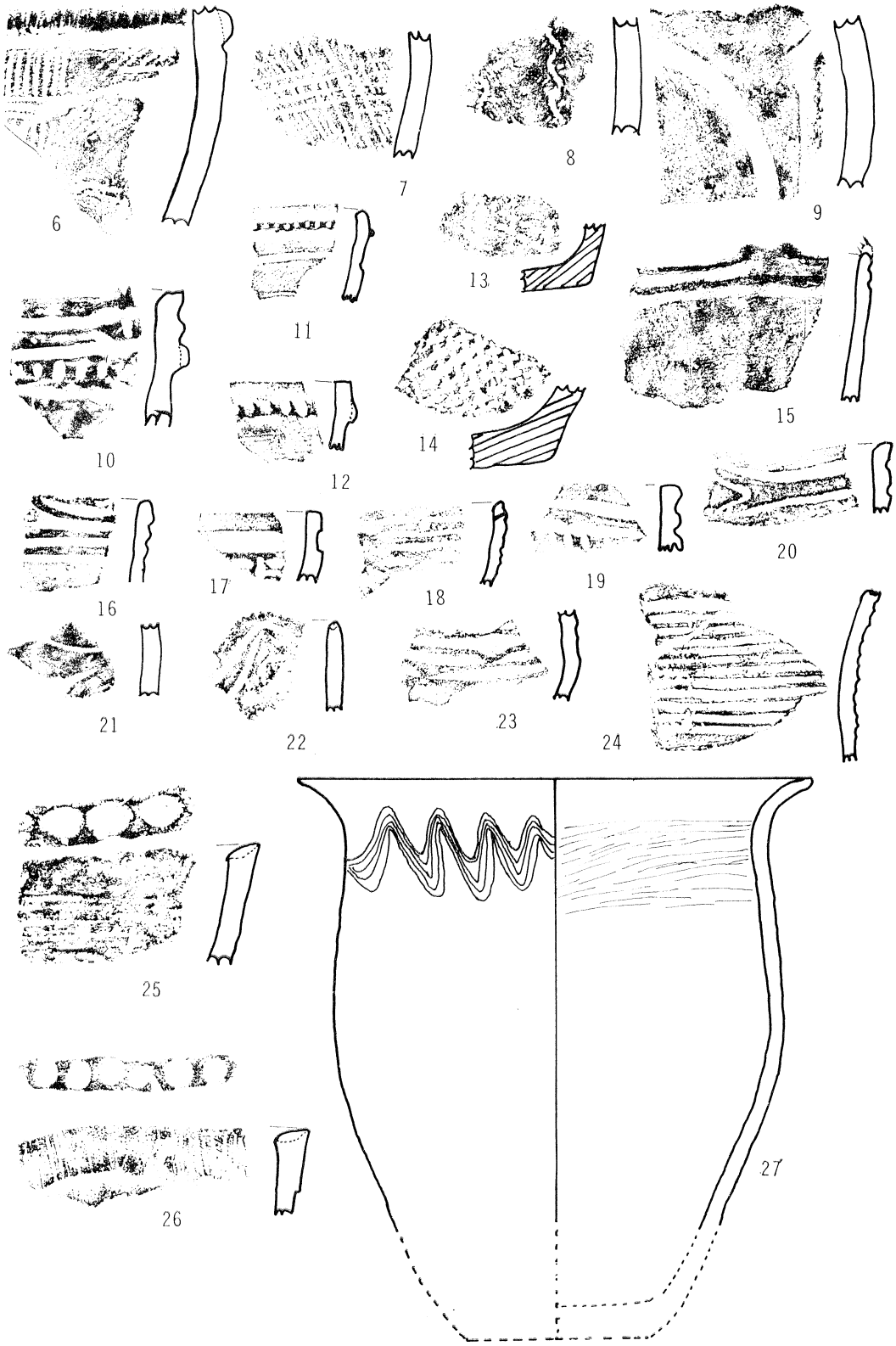
第21図　土器拓影（4類C）



第22図　土器拓影（4類D）



第23図　土器拓影（5類，6類）



第24図　土器拓影および実測図（7類～10類）

石や雲母を含んでいる。

(48) は半割竹管文を地文とし，その上にボタン状の突起を有する。色調は黒褐色を呈し，焼成は中位である。

5はソウメン状の粘土紐を貼り付け，その上に爪形状の刻目を施してある。色調は黄褐色を呈し，焼成は中位である。

第7類土器 (第24図6～8)

縄文中期の土器に属するもの

A 縄文中期初頭のもの (6～7)

6は隆帯を加飾し，その上に連続爪形文を施している。また半截竹管による平行沈線文の発達が著しい。色調は茶褐色を呈し，焼成は中位であり，胎土中に長石を含む。

7は半截竹管による沈線を格子状に施している。黒褐色を呈し，焼成は不良であり，胎土中に長石を含む。

B 縄文中期後葉のもの (8)

8は幅の狭い蛇行状の懸垂文がみられる。赤褐色を呈し，焼成は中位，胎土中に雲母や長石を含む。

第8類土器 (第24図9～14・図版XVIの1)

縄文後期の土器に属するもの (9～14)

9は無文地にヘラによる沈線が弧状に施されている。色調は茶褐色を呈し，焼成は不良，胎土中に長石粒を含む。10は突起状の口縁を呈し，口縁に沿って，二条の沈線がみられ，その下に隆帯を加え，その上に刻みを施している。色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である。11は口縁に沿って，細く，低い隆帯を加え，その上に，小円形の連続刺突文がみられる。横帯状の磨消縄文が施されている。色調は黒色で，焼成は良好である。12は隆帯の上に刻目が施されている。黄褐色を呈し，焼成は中位，胎土中に長石粒を含む。(13～14) は網代底である。13は黄褐色を呈し，14は赤褐色を呈する。焼成は中位である。

第9類土器 (第24図15～24・図版XVIの2)

縄文晩期の土器に属するもの

A 縄文晩期前葉のもの (15～19)

(15～19) は口縁に沿って，一条から数条の沈線がみられる。(15, 16, 18) は黄褐色を呈し，焼成は良好，(17, 19) は黒褐色を呈し，焼成は良好である。

B 縄文晩期後葉のもの (20～24)

(20～22) は入組文風な文様がみられる。22は口唇に刻みを有する。色調は黒褐色を呈し．焼成は良好である。23は変形工字文様がみられる。黒褐色を呈し，焼成は良好である。部分的に丹が塗ってある。24は貝殻腹縁による横位の条痕が施されている。黒色研磨されており，焼成は良好である。

第10類土器 (第24図，第25図，図版XIの下)

弥生式土器に属するもの。

A 弥生式前期の土器である。(25～26)

(25～26) は外面に条痕がみられ，口唇部に，指頭圧痕文が加えられている。25は黒褐色を呈し，焼成は中位である。26は黄褐色を呈し，焼成は良好である。

B 弥生式後期の土器である。(27～30)

27は口径17cm，器高約18cmの鉢形土器である。口縁部が外反し胴部のカーブもゆるく安定した形をしている。頸部に5条の櫛描波状文を施し，裏面には箆状工具を用い調整してあり，焼成も良好である。28は丸底壺形土器である。口縁部欠損している。表面は頸部，胴部にかけて擦痕を施し，底部にかけては無文である。器面の調整，焼成ともに不良である。29は上げ底であり破損したものの上部を平らに削ってある。30は壺形土器の口縁部である。漏斗状の複合口縁はL状で立ち上り部分に縦の沈線を1cm間隔に施してある。頸部から胴にかけて，刷毛状工具で器面全体を調整しており，胎土中には砂が多く焼成不良である。

(本田秀明・小池政美・林　茂樹)

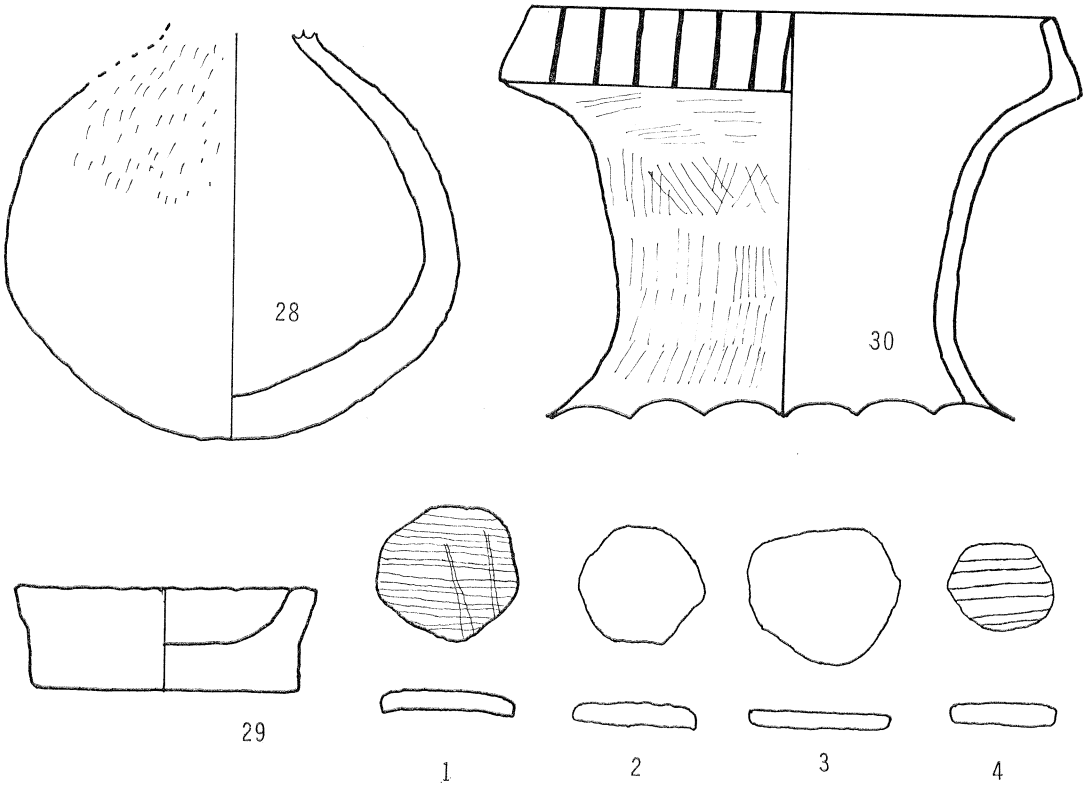
Ⅱ 土 製 品

・**土製円板** (第25図1～4) が4個出土している。第Ⅲ層中より出土したもので，土器破片を円形に整形し周辺を研磨してある。いずれも胎土中に繊維を含み，条痕のあるもの (1) 沈線の施されたもの (4)，無文のもの (2, 3) がある。第4類土器中に含まれるものである。

・**土製耳栓** (第31図101) 極めて小形の土製耳栓が1個だけ出土している。全面無文で研磨が加えてある程度の素朴なものである。第1層下部から出土しており，恐らく第9類土器に伴なうものであろう。 (林)

Ⅲ 石 器

本発掘により出土した石器は，剝片石器，礫核石器とも数が多く形態も多様である。従来，地表に散布し，児童に採集された数は莫大なもので舟山といえば，石のやじりの産地として知られていた。発掘資料をを形態により分類して次に詳述する。ここでは主として，第Ⅱ層ならびに第Ⅲ層出土のものを掲げた。



第25図　土器実測図（10類4類）

1．石　　鏃（第26図，図版XVIIIの1）

今回の発掘で出土した石鏃は総数333個を数えるが欠損品が極めて多い。層位別出土の概況は，第1層30%，第Ⅱ層60%，第Ⅲ層20%の割合を示す。石質は黒耀石が大部分で，硅岩，水晶が1%程度存在した。第26図は第Ⅱ層および第Ⅲ層出土の完全に近い形を保持する石鏃を掲載した。形態により分類すると6類に分けることができる。

A類　三角形を呈するいわゆる三角鏃で第1次剝離面を残す剝片鏃が多い（1, 4, 6, 7)。基部の底辺が直線状をなすもの（1, 2, 3, 4, 5）とやや張り出すもの（6, 7, 8, 9, 10）とがある。

B類　三角形で基部の抉入がゆるやかな曲線を画くもの（11～16）であるが，ゆるやかに尖り，尖端が急にとがるか，球状にとがるもの（11）と基部から急に鋭角をなして尖るもの（12, 13, 14, 15, 16）がある。

C類　基部の抉入がやや深くなり尖端まで急に鋭く尖るもの（17～21）で，21は飛燕形を呈する。

D類　基部の抉入が急角度で深くなり，底辺に対して高さが著しいもの（22～28）で形態がいずれも大きい。

E類　基部の抉入が深くなり，胴部で急に尖端に向かって細くなるので全体に五角形を呈する形態となるもので，（29～34）条痕繊維土器に伴うことが多く，注意すべき形態である。

2．掻　　器(第27図，図版第XVIIIの2)

広義の意味において掻器としての付刃を有するものは剝片のすべてにあって数が多い。ここでは掻器として正しい形態をもつもののみをとりあげて説明したい。

A　拇指形掻器（第27図，図版第XVIIIの2）

縦長剝片の一部または基部の部分を円形に整形しその周辺に連続リタッチして，50°～80°に近い刃を作出してあるもの（37～48）で（37, 39）は小形の（53, 54）は中形の典型的な形態を持つものである。

なかに縦長剝片を折りとったままで方形を呈するものがある（48）。また台形もしくは扇形を呈するもの（49, 50）があり，縦長剝片のバルブの部分を利用したもの（49, 53, 55）があり，一部にプラットホームを残している。

B　舟底形掻器（第27図57, 58）

極めて小形の石器で断面V字形を呈し，全体に舟底形を呈する。舷側に当る二面は，甲板部を打面として数枚の剝離が並列しており，打面と剝離面とのなす角に磨滅痕が認められることから掻器としての機能を持つものと思われる。

C　箆状掻器（第27図59～61）

縦長剥片の両面を細かに打剥して調整したもので刃は薄く鋭い。

D　抉入掻器（第28図70）

黒耀石の縦長剥片の側辺に数個の小さな抉入をもったものである。粗雑な剥片にノッチをつけたものも数が多い。No 58の舟体形石器の付刃はこの類に入る機能を持つものと思われる。

3．石　錐（第26図35, 36第28図74・図版XVIIIの1右下）

黒耀石を原材として紡錘形に打調された石器で，断面は円形に近い凸レンズ状を呈する。（74）は片側の尖端のみ調整している。いずれも尖端は鋭く調製されており，磨滅痕が認められることからドリルとしての機能を持つものと解される。

4．石　匙（第28図63, 64, 66, 67, 68, 69）

比較的大形が多く総数12点が出土した。石質はすべて玻璃質安山岩である。形態により3分類できる。

A形　丹念に作出された撮部を頂点とし，刃部を底辺とする横長の三角形を呈するもので大形のもの No 63と小形のもの No 64とがある。No 63は全面が丹念に打剥調製され，底辺に両面からのリタッチが加えられ鋭い刃部を作出してある。

B形　撮部の作出がなされていないもので横剥の台形を呈する No 66, 67がある。いずれも底辺に連続リタッチして，鋭い刃部を作出してある。No 66は第Ⅳ層内から出土したもので青色硅岩を原材としている。

C類　石匙としての形態を持たないが，周辺に鋭い刃部を持つ大形の剥片で石質はすべて多孔性の玻璃質安山岩である。No 68はB類に近い形態を持った断欠品である。No 69は円形に近く刃先が内弯していることからみて，掻器に属するかも知れない。No 56は中央から切断されているが，刃部は極めて鋭く調製されている。

5．石　斧（第28図No 75）

粘板岩製の小形局部磨製石斧が第Ⅲ層から出土した。断面形が，かまぼこ状を呈し，平面形は基部から刃部に至るにしたがいやや幅広くなる箆状を呈し刃線は丸味を帯びている。表面側は高くもり上がり，裏面は底平である。全面が研磨されているが，表裏とも打剥調製痕を一部に残している。刃は片刃に近いが刃部の裏側中央に凹部があり刃先から見ると鴨のくちばし状を呈し，丸鑿形に近い形態である。靴箆状石斧と称すべきか。

6．刃　器（第29図）

縦長剥片をそのままもしくは一部に調製を加えて使用しているもので，No 76は白色頁岩製で正面に中軸に並行する三条の剥離面があり，裏面は第一次剥離のままで，打面を残し剥離高は90°内外で縁辺は第一次剥離によって生じた鋭いエッヂをそのまま利用して刃として使用したのか使用痕が認められる。No 77も黒耀石製の縦長剥片で打面を残し鋭い縁辺の一部には使用痕が認められる。No 78は青色硅岩の縦長剥片でバルブの部分は折れて欠失している。No 79, 80は黒耀石製の縦長剥片で側辺の片側を打調して刃潰し，反対の縁辺は第一次剥離のままの鋭い刃部が形成されている。裏面は第一次剥離のままで，バックドブレードに類似した石器である。No 80は小形のスポールである。

7．尖頭器（第29図）

すべて断欠品であるが計7点が出土した。このうち正しく柳葉形槍先形尖頭器としての形態が認められるものは No 89で現長5.5cmの基部のみで尖端を断欠している。断面は凸レンズ状を呈し，表裏面ともに丹念な調整痕が残っている。石質は玻璃質安山岩で推定10cm内外の長さを有する大形に近い尖頭器で，石質が，後述の異形石器と同じである点に注意したい。他は小形石槍の欠損品と認められるもので，No 84, 85, 88は基部，No 82, 83は尖端部の一部である。

また石槍ではなく，広義の尖頭石器としての形態を持つものに No 90, 91がある。石質は褐鉄色の玻璃質安山岩で断面形は三角形を呈し，縁辺から大きな剥離をくり返し全面を調整し，特に尖端は鋭く尖り，中軸に高い稜が作出される。基部もやや鋭く調整されているが，特に No 91は薄く鋭い刃が作出されており，断ち切りの機能を持つと思われる。

8．チョッパー状石器（第30図・図版XVIIの2）

石質は尖頭器の大形のものと同じ玻璃質安山岩を全面打調した石器で，いずれも一部欠損している。No 92, 93は，断面凸レンズ状を呈するよう側辺から加えられた打撃によって調整されている。特に No 94は，断面三角形を呈し，いわゆる神子柴形石斧に類似の形態を持つものとして注目したい。No 95は形態が楕円形を呈し，中心部に大きな剥離状の一部が残り，その周辺は縁辺から交互に剥離された同形の剥離痕が並び，整然とした形を保っている。周辺の刃は鋭く作出され，特に下部は丹念な調整が加えられており，チョッパーとしての機能を持つ石器と思われる。

9．トランシェ状石器（第30図91）

長さ8.8cm，最大幅4cm，厚さ1.9cmの石斧状を呈する石器（No 91）で，断面三角形を呈し，基部は尖がり，先端のシャープな刃先は両面ともに基部方向から加えられた剥離の交叉によって作出されている。なお刃を形成する剥離面のひとつは，この器体が石核から剥離される以前に形成されている点に注目したい。

10. **磨　　石**（第31図）

硬砂岩の棒状礫の側面に中軸線に並行して磨痕のある磨石（第31図96）で長さ19.5cm，幅7cm，厚さ4cmを測る。従来押型文土器に伴う「こくずり石」があるがこれもその同類であるが大形に属する。No 97の石器は現長7cmを測る断欠品であるが先端部に無数の打痕があり，磨石とは機能が異なるものと思われ，恐らく石器打調の器具であろう。

11. **凹　　石**（第31図）

直径9cm内外の扁平な形態で全面が磨調され，表面の中央に凹部があるもので，No 98は両面に，No 99は片面に設けられている。

12. **環状石斧**（第31図100，図版第Ⅲの1）

硬砂岩を原材とした径8cmの楕円形を呈し，中央部に直径2.2cmの穴が穿たれていて棍棒頭石斧とも称されるものである。縁辺は表高とも周辺から打剝され鋭い刃が作出されている。この石器は，第17号竪穴（弥生時代住居址の北壁に接した第Ⅰ層下部に包含され，大洞A′式土器片を伴っていたものであきらかに縄文晩期終末の所産と見做される。

（林　茂樹）

Ⅳ　金属器

1. **青銅器断片**（図版X．下）

第11号土拡の配石石組内から出土した微少な青銅器断片である。現長17mm，最大幅5mmの扁円筒形で上部の細まった角に長さ5mm，幅1.5mmの扁平な突起がつけられている。主体部の筒は裂けて鋳造内部を見せている。青銅の厚さ1mmで，表面は青銅色で光沢をもち部分的に緑青が認められる。青銅製垂飾品の部分断欠であろうか。出土した第11号土壙は，大洞A′式土器を伴っていることから，同時期の青銅器と見做される。

（林　茂樹）

舟山遺跡緊急発掘調査作業参加者名簿（順不同）

◦駒ヶ根郷土研究会

気賀沢善右衛門，水上保政，木下義男，下村忠比古，白鳥静男，宮下一郎，福沢伝一，山本喜久男，小平善重，中島清，小原保之助，田中耕夫，福沢朝七，清水正人，小松兼夫，倉田金一郎，渋谷米男，大沼勝蔵，森岡忠一，松村義也，井口富夫

◦辻沢遺跡研究会

北沢雄喜，吉沢文夫，気賀沢紀敬，伊藤利勝，堀内修身，岩村哲男

◦長野県中央道遺跡調査会

根津清志，福沢幸一，宮沢隆良，佐藤正俊，伊藤宗男，北沢頌子

◦駒ヶ根市内

倉田源重，塩沢博，竹内杉九郎，下島喜久，永井克巳，小原今朝十，平沢仲蔵，中原忠雄，塩沢敏子，塩沢崇，米山すみゑ，吉村英一，宮下みつ，松井ひさよ，二ツ木ぎんよ，下島照美，真島まさの，米山清吉，堺沢洋弘，飯島数恵

◦赤穂公民館　　中城正，中城明雄，荒井和子

◦駒ヶ根市図書館協議会　　春日津多恵，浜崎久江

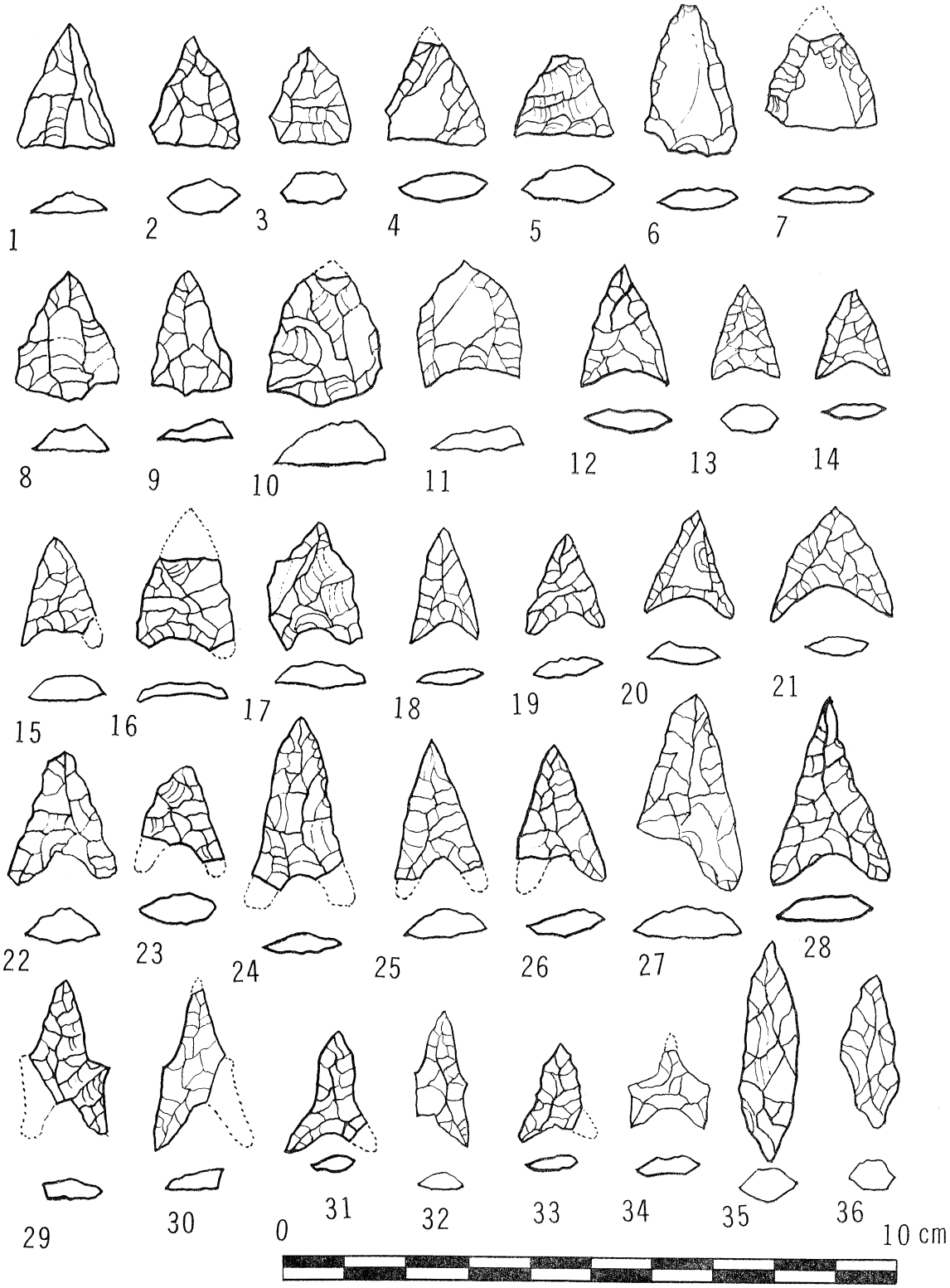
◦学生・生徒

斉藤由幸（明治大学生），渋谷勝清（東洋大学生），宮下典彦（飯田高），小池浩文（岡谷南），堺沢茂（上農高）

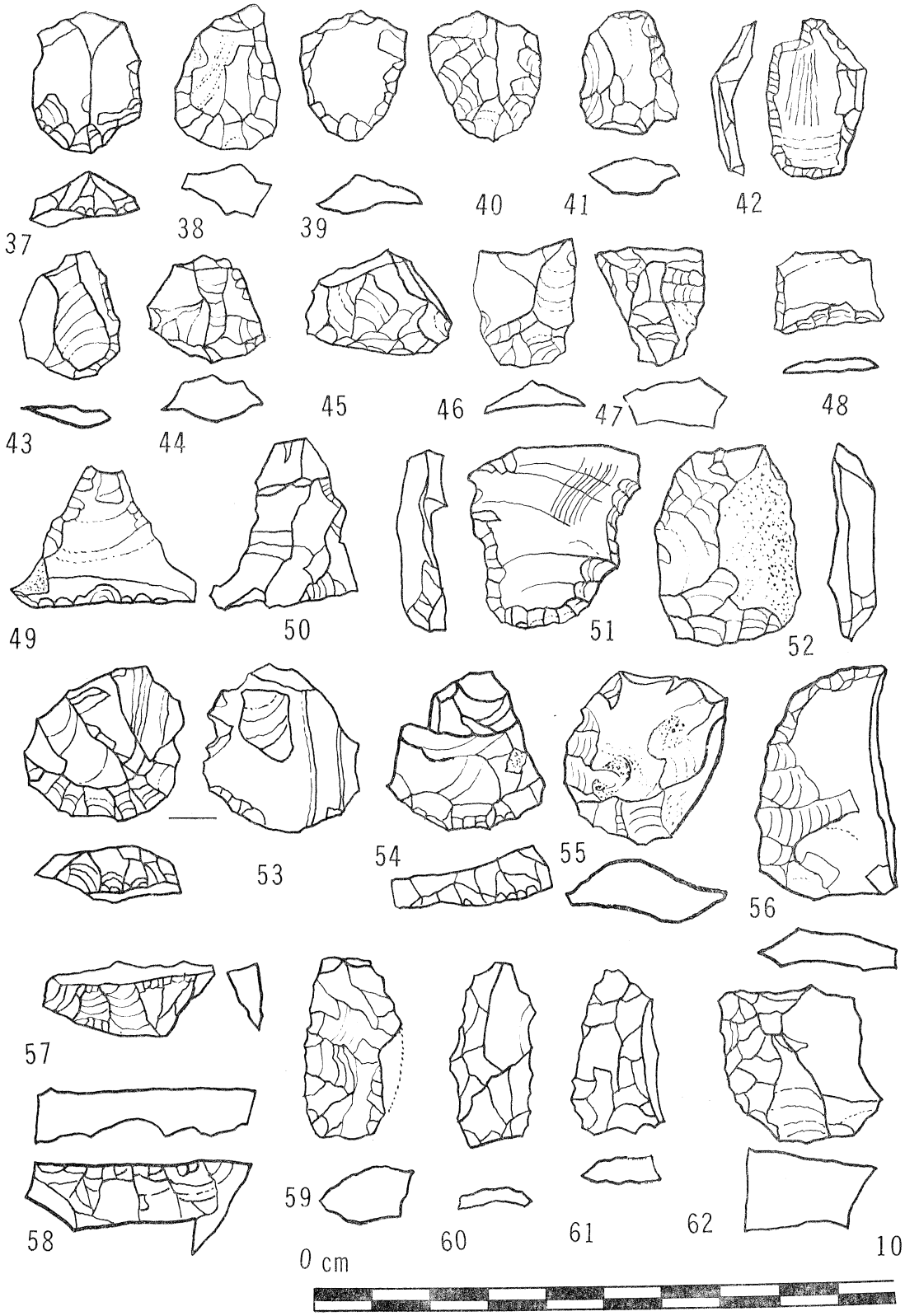
◦赤穂高校郷土クラブ

下村修，下島保美，宮脇健介，宮脇深志，石沢正彦，板山準治，清水忠良，小原茂幸，小木曽文彦，平沢貴美子，片桐厚子，酒井映子，北沢美佐子，下平まち子，小松恵，松崎節子，滝沢里江，池上治，戸田博，中山泉，宮下静子，大沢常子，小林秀子，北沢美智子，佐藤弘子，山岸京子，川口久美子，砂場弘志

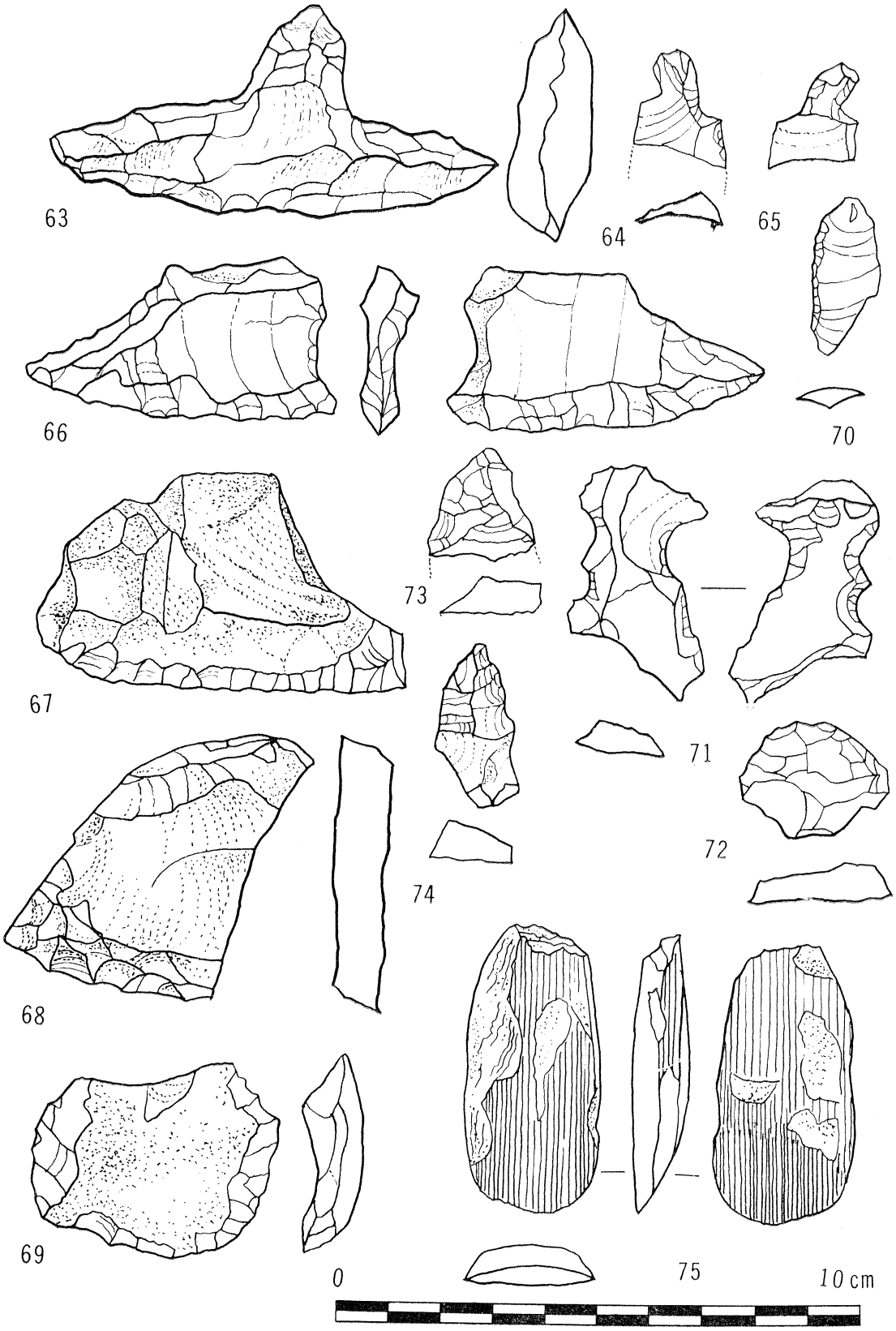
◦赤穂中学校郷土クラブ　20名　　◦伊那中学校生徒　1名　　◦飯島小学校生徒　15名　　◦南箕輪小学校生徒　9名



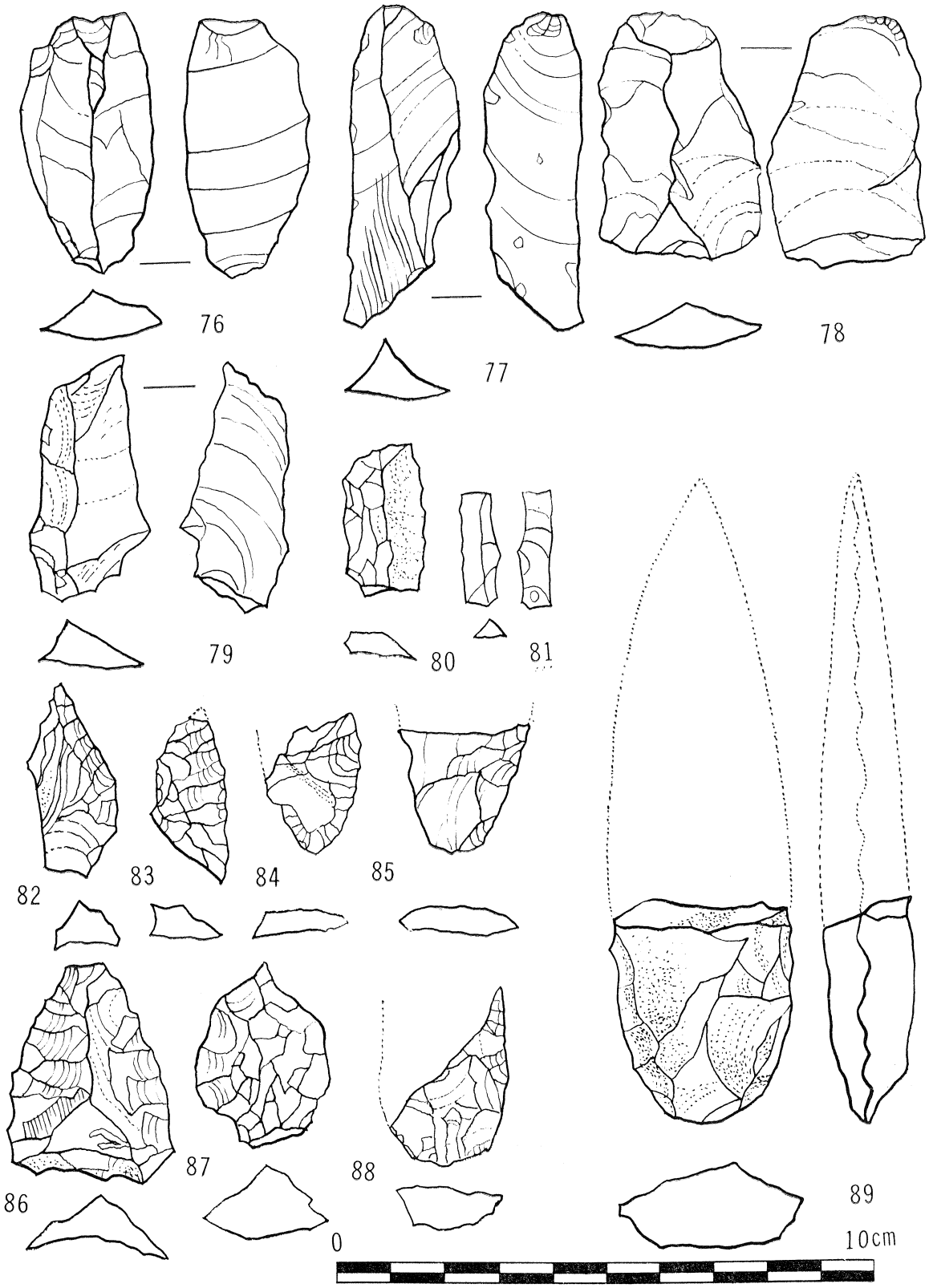
第26図　石器実測図（石鏃，石錐）



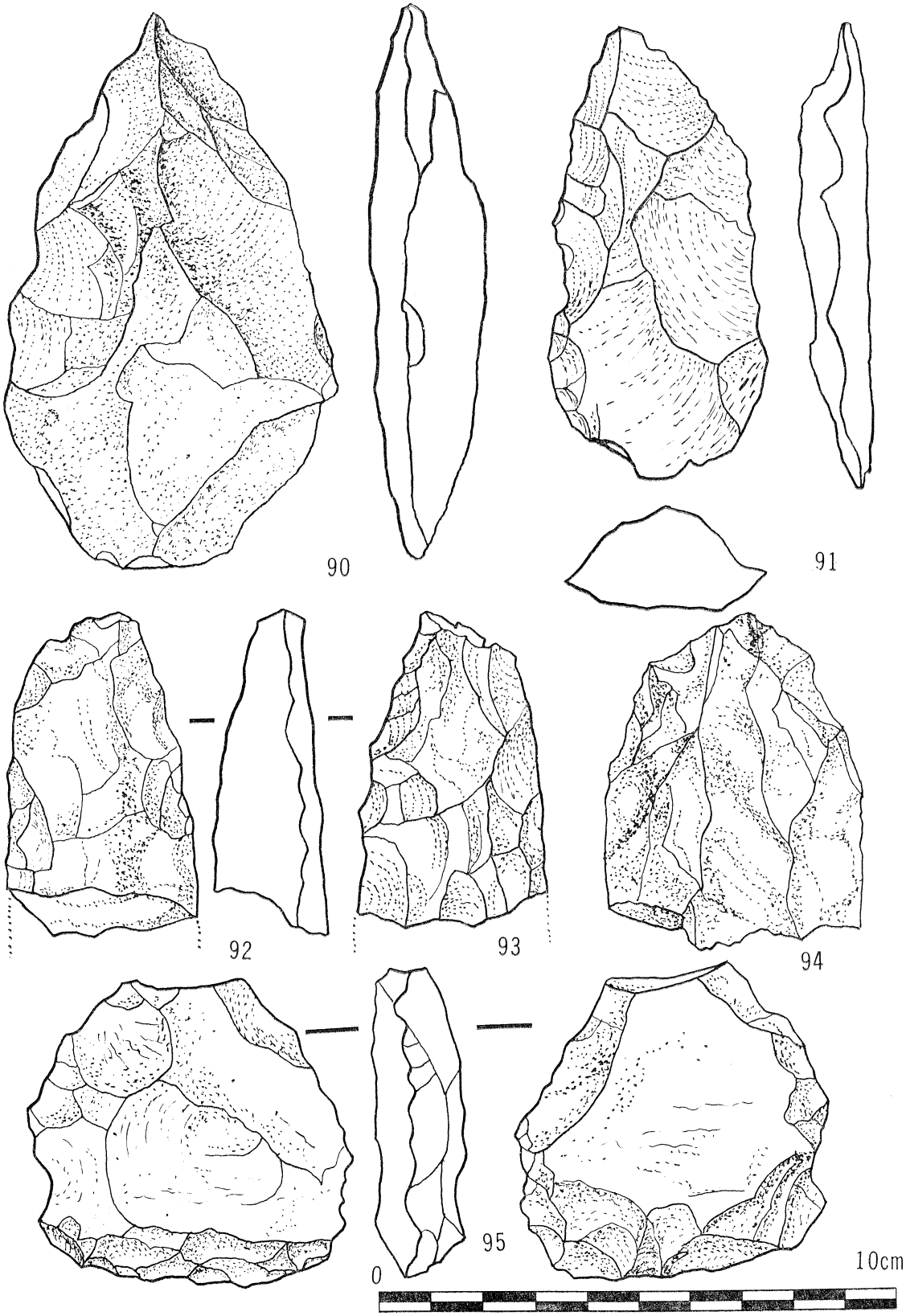
第27図　石器実測図（掻器）



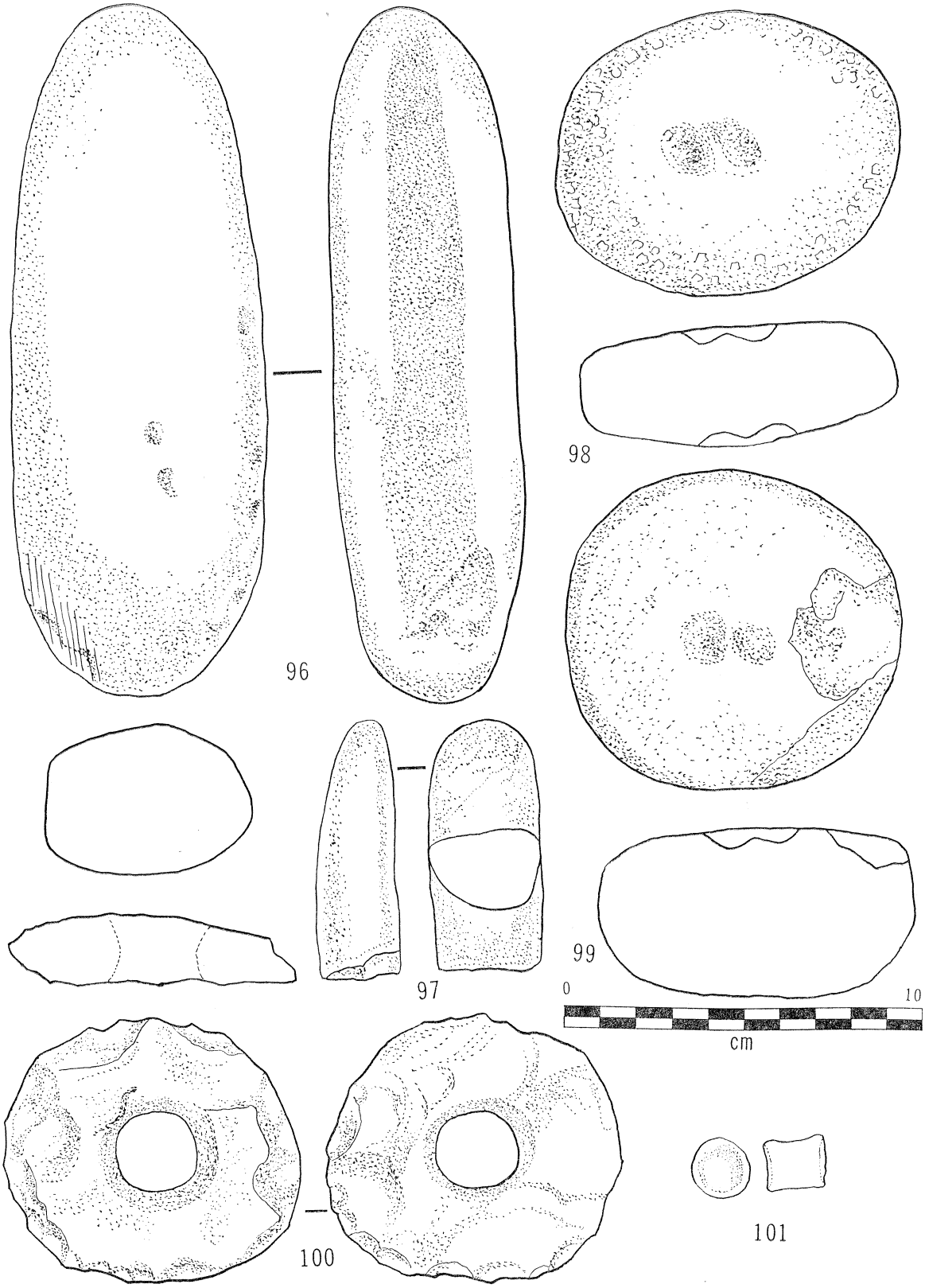
第28図　石器実測図（石匙，掻器，石斧）



第29図　石器実測図（剥片，刃器，尖頭器）



第30図 石 器 実 測 図（礫核石器）



第 31 図　石器実測図（磨石，凹石，環石，101 は土製耳栓）

五　所　　見

市街化現象の波の中に壊滅しようとしている舟山遺跡救出のために実施された緊急発掘調査を担当し，夏季8日間に第1次調査，晩秋に12日間，計20日間に至る調査の状況は今までの報告に尽きる訳であるが，その経緯を通じての所見について記したい。

今次調査は，表面観察の結果が複雑な状態を内包するという観点に立って，本来の学術調査にもとらないように努め，機械力による除土を避け一切を手掘りとし，調査員の観察を詳細に行なうことに重点を置いて進めた結果1部分の発掘にもかかわらずこの舟山遺跡全体の性格を予察し得る成果を挙げることができたのはまことに快ばしい次第である。

この田切扇状地に形成された小さな独立丘の舟山に営なまれた先史および原始時代の遺跡は縄文時代早期から，歴史時代にかけて断続しながらも継起し数千年の長期に亘っていることが明らかにされた。これを層位別に見るならば次のようになる。

〔層位〕　　〔土器〕　　〔遺構〕

第Ⅰ層　灰釉陶器，須恵器

下部弥生式（水神平式，中島式）……竪穴式住居址3戸

〃　縄文晩期（大洞式）……土拡墓2ケ

〃　縄文後期（堀の内Ⅱ式）……平地住居址Ⅰ単位

第Ⅱ層上部縄文前期，縄文早期（木島Ⅰ）

下部縄文早期（茅山式・子母口式）……小竪穴18ケ

第Ⅲ層上部　（押型文，花の湖Ⅱ式）

以上が複合した状況を層位別に把あくした状態で，各時期においてそれぞれ問題を持つものであるが，ここでは省略し，第Ⅲ層以下のローム層内に発見された小竪穴群18箇の存在は考古学上における新しい知見であり，縄文早期の理解の上に極めて重要な問題を提起したのでこれに係わる問題に限定して，その二，三について述べて見たい。

第一は，**小型竪穴の性格**についてである。この遺構は，第Ⅲ層以下に構築され，堆土も第Ⅲ層が充満しているので第Ⅲ層上においての確認はなかなか難かしく調査員を悩ませたが，床面近くに炭化物を混える層があり，若干の遺物が包含されることをいち早く把あくしたので，これを手がかりとして探索に努めた結果18箇の所在と群集状態を確認することができた。第Ⅲ層のソフトローム上面から第Ⅳ層のハードロームにかけて構築された円形のプランを持ち，直経1.5～1.2m，深さは30cm内外のものと70cm内外のものとがあり，円盤型と円筒型を呈する2種類に分けることができる。壁は垂直壁で，床面は底平で，各面とも敲き固められた状態が認められた。第10号址においては周辺に径5cm内外の傾斜した柱穴をめぐらせ，屋根の架構が想定される。埋没状態は自然的で一次的に埋められたものではない。内部からは石鏃，磨石等の石器や茅山式系の土器片や稀に押型文土器片が出土しており第10号址では床面につぶれた状態で土器が出土している。この小竪穴の内部の空間は人間1人が横臥できるかまたは，二人が蹲据して座す程度のひろがりをもっている。以上の要素は生活址的な匂いが強く休むためあるいは眠るための機能をもつ竪穴「ねぐら」と解されるのである。また，第15号址の如く二箇の小竪穴がペアで並び，内部に配石を伴ない埋没状態が1次的性格を示すものがあり，これらは墓地としての要素の強いものである。また貯蔵穴としては，たこ壺状を呈し，内部に有機質腐植層を充満していた第9号址はこの条件を備えている。

このような縄文早期における小竪穴の存在は，過去の発掘例から見ると意外に多い。まず当伊那地域においては，箕輪町の東部山頂に所在する萱野遺跡(註1)である。ここは押型文と子母口式土器を伴なう高地性遺跡であるが，ローム層内に入って，小竪穴2箇が発見されている。炉址と思われる焼土と配石の近くに位置し，直経1.2m，深さ60cm内外の円形竪穴と，長径1.5m内外，深さ30cmの楕円形を呈する竪穴が確認されている。前者は山形押型文，後者は磨石，石鏃が出土しこの点本例によく似ている。トレンチ調査のためこの2箇しか発見できなかったがこの小竪穴も群在が予察される。筆者と共同調査した藤沢宗平氏は，このような小竪穴は仮眠のための施設と想定している(註2)。これについては，筆者も現地において確認し同調したところである。また伊那市三つ木遺跡(註3)においても各種押型文土器を伴なう配石炉址の群集地点の1部に，長径1.8m内外，深さ40cmの小竪穴2箇を確認している。これら，直接経験した以外の報告例を示せば，住吉町式土器の標準遺跡として知られる函館市住吉町遺跡からは，遺物包含層下の粘土層に堀りこんだ直径1m内外，深さ40～50cmほどのピット17箇が発見され，ピットの外側には大小の礫が積まれていたという(註4)。またこの近く，根崎公園遺跡(註5)では，洪積世火山灰層に深く堀りこまれた底経1.8mの低状ピット6箇が発見されている。また横浜市大丸遺跡(註6)の場合は径1.4m，深さ80cmの長楕円状の小穴が発見されており，栃木県普門寺遺跡(註7)では経1m，深さ40cmのプランを持つ垂直

壁竪穴が2箇，昭島市林の上遺跡(註8)では径1.8m，深さ70cmの楕円状ピットが1箇それぞれ発見されている。これらの遺構については住吉町例は墳墓，あるいは作業場，根崎例は墳墓・大丸例は炉穴以外のものとされ調査者によりまちまちである。青森県八戸十日市の赤御堂遺跡(註9)では直径1.6m内外の円形竪穴が発見されているが，床面中央および周壁に沿って20箇の小柱穴址があり，住居址として認められている。

また茅山式の住居址としては，このような小竪穴以外に隅丸方形を呈する確然とした竪穴式住居が御蔵島ゾウ遺跡で，楕円形を呈する竪穴住居址が，隣村宮田村元宮神社遺跡(註10)などで発見されている。特に後者は本遺跡と同時に緊急発掘された中央道宮田地区の元宮神社東遺跡においては，長径3.9mの楕円形を呈する竪穴住居址三箇が発見され，その外側に径80cm内外の小穴三箇があり調査者はこれを墓拡と認めているがこの大形の竪穴式住居址とされるものとの関係は今後の調査によって明らかにしたい。

舟山遺跡において重要なことは前述のような生活的要素を持つ小竪穴が群集し，一定の配置形態を持って展開していることである。今回はグリットまたは，トレンチによる部分的発掘であるので推定の域を出ないが，第2区の西北部には南から第5号址，第6号址，第10号址，第14号址，第8号址，第21号址と6箇が西方に向いて孤状に展開し，その北端に9号址（貯蔵穴），中央に第16号址（炉穴）と第21号址（配石土拡）が配置されている。また別な1単位が第2区の中央部から第1区西端にかけて展開している。即ち，南から20号址，第7号址，第6号址，第18号址，第22号址，第13号址と6箇の竪穴が西南方を向いて孤状に展開しこの中央位置の北寄りに第15号址の相並ぶ墓拡が配置されていることである。さらにこの二つの単位の中間は無遺構の地帯となり，ただ1箇の配石炉が存在する。これは集落の共同広場としての意味を持つものであるかも知れない。この小竪穴群の配置形態は周辺の発掘を進めなければ確定できないがまず仮説として妥当性は認められるようである。数箇の寝穴と1箇の炉穴と貯蔵穴と墓拡を持って展開する小竪穴群こそ生活の全容を示す一単位の生活址でなくて何であろうか。そしてこの生活址が設営使用された時期はいわゆる茅山式土器文化期であることは小竪穴内出土の土器の大部分が茅山式であり，然も床面に存在した大型破片はいずれもいわゆる茅山式に属するものであることからして証明でき得るのである。さらにこの小竪穴からは茅山式以前の押型文や子母口式土器片が若干出土しているが茅山式以後の木島Ⅰ式はじめ各期の土器は全く伴うことがない点からも傍証できよう。今後調査の機会があればこの小竪穴の分布状態確認をその主要な目標として精査したいと思う。

第二は，この小竪穴群に伴う**土器群の構成**についてである。この土器群は，厚手の繊維を含む尖底もしくは小平底を呈する深体で器面の内外にアナダラ属の貝殻腹縁を施文原体とする条痕が施されていることを共通点としており，広義の意味でいわゆる茅山式の一群（第4類土器）として捉えられているが，細別すれば，A, B, C, D, E, F，即ち茅山式の細別で確定された野島式，鵜ヶ島台式，茅山下層式，茅山上層式，粕畑式に分類でき得るのである。三浦半島の標準遺跡においては以上の記述順序をもって時間的に継起変遷したものと認定されているが本例においては第Ⅱ層内に上下の関係なく包含され，然も小竪穴内出土も同じ状態を示していることからみて，この1群は時間差がなく共伴関係をもって存在したものと解される。然も粕畑式比定のもの（第4類C）の実態は，いわゆる粕畑式(註11)ではなく，吉井城山遺跡の貝層直下に茅山上層式の古いものと共伴した先粕畑式(註12)に最も類似していると認められる。さらに東京都清水坂貝塚出土の第一型式土器(註13)にも近似しているが施文方法が異なりこれよりやや古い時期のものと考えられる。やや薄手の深鉢で器面内外に貝殻条痕が施され，やや波状を呈する口縁に沿って二枚貝の腹縁を連続押捺して大形爪形文を二段に構成施文する手法は独特でありまた円筒・皿状把手，器形の屈曲等に特徴を持ち東海地方のいずこかに原郷土を持つ個性的な土器であり，他に類例のないことから見て，舟山式と仮称したい。以上述べたような茅山式に属する土器群の共伴関係は前述の隣村宮田村元宮神社東遺跡においても鵜ヶ島台式，茅山上層式，茅山下層式の共伴関係が認められ，中部山地帯南部における縄文早期後半における共通現象と考えられるのである。前述の吉井城山第一貝塚の茅山上層式に粕畑式土器が共伴することと対象的な現象と理解して差し支えないであろう。この時期における茅山式土器の東海への伝播さらに中部山岳地帯への遡上は一定の期間を費しその間における文化交換現象を，もの語るものではあるまいか。ただし静岡県西部には今の処良好な遺跡が発見されておらず，三重県に純粋な鵜ヶ島台式土器のみを出す遺跡が存在することから見て，更に東海地域における解明が必要となろう。

第三は，茅山式文化を形成する**石器の組み合せ**についてである。前述の三浦半島における標準遺跡においては，石鏃等の剝片石器が少なくこれに反して礫器と骨角器が卓越しており，礫器がたたき切る，けずる，ひききる等9種の機能を持つものとして分類されている。これに対して本遺跡例においては，剝片石器が卓越し，礫器が少なく，丹念に調整された礫核石器もしくは大形ぶ厚な剝片石器が多い。これはフォッサマグナを持つ伊那谷の地質が，秩父古生層を東半部に持ち，天竜川の川原には各種の石器に適する原材が存在することと，黒耀石産地の和田峠が近くにあること，彼等の生産の対象とするファウナ（動物相）の状態がこのように鋭利なそして多様な石器群を作成することを必然的ならしめたのであろう。また円形掻器等を豊富に持っていることは，茅山貝塚，城山第一貝塚の出土の骨角器が示すように，尖頭骨角牙器をはじめ鋸形骨器，篦形骨，鏃形骨角器，針形骨器，釣針形骨器など多量の骨角牙器の製造がさかんであったことを示していよう。本遺跡においては包含層が酸性の弱い土質であるために完全に消滅してその残影すらも認められないが，本県栃原岩陰遺跡(註14)においても押型文土器

に極めて多量のそして精微を極めた骨角器が伴っていることからしてもこの多彩な掻器類，使用痕ある剝片の多いことは骨角牙器の盛行をネガチブに物語るものであろう。加えて本遺跡の立地が天竜川に注ぐ上穂沢川の屈曲点に突出した丘陵であることは，漁撈的な占地として適当な場所であり，早期の集落址が漁撈期の1時点に営なまれたものとしての性格を持つものであるかも知れない。いずれにしても土器が海岸地帯の要素を多く持つのに対して，石器は極めて個性的で中部山岳地帯の早期後半の生活の様相を端的に表明し得ているようである。

以上縄文早期の遺構に得る課題について述べたが，これと別に晩期土拡墓と目される第11号址出土の**青銅器断片**について付言したい。この青銅器断片は，土拡内に組まれた礫群の下部に存在し，後世の遺物混入の疑いは全く無く，土拡に直属する遺物である。形態は中空のある突起様のもので垂飾品の突起部分を思わせる微細なもので，恐らく副葬品の1部として埋納されたものであろう。縄文晩期における出土例は確たるものがなく，ただ1例鳥海山麓の青銅製刀子が知られているのみである。本遺跡例も東北地方晩期文化の影響下にもたらせたものであろう。この系統をひくものとすれば，恐らく綏遠系の青銅器と推定したが精査の段階に至らないので問題提起にのみとどめて置きたい。大方の御教示をお願いしたい。　（林　茂樹）

註1　林　茂樹　上伊那の考古学的調査　昭 41
註2　藤沢宗平　萱野遺跡　一押型文土器文化の生活遺構について　伊那路9巻10号　昭 41
註3　昭和42年緊急発掘調査し筆者も調査担当として現地で実見した。報告書未刊。
註4　児玉・大場　函館市住吉町遺跡の発掘について　北方文化研究報告八　昭 28
註5　吉崎章一　縄文文化の発展と地域性―北海道―　日本の考古学Ⅱ所収　河出書房　昭 40
註6　芹沢長介　神奈川県大丸遺跡の研究，駿台史学七　昭 31
註7　酒詰・渡辺　栃木県萎村普門寺遺跡発掘概報　人類学雑誌61の1
註8　昭島市教委　昭島市拝島林の上石器時代遺跡調査概要
註9　江坂輝弥　青森県八戸市　十日市赤御堂遺跡　日本考古学年報9所収　昭 31
註10　日本道路公団，長野県中央道埋蔵文化財包蔵地調査報告書一宮田地区　昭 45
註11　中山英司　入海貝塚　愛知県知多郡東浦町文化財保存会　昭 30
註12　鈴木　尚　東京都王子区上十条清水坂貝塚　人類学雑誌第49巻第5号　昭 9
註13　岡本　勇　横須賀市吉井城山第一貝塚の土器　横須賀博物研究報告第6号　昭 39
註14　正報告未刊，筆者がこの調査に参加し出土状態を実見した。

六　おわりに　――市民のみなさんへ――

由緒ある文化財と，人々の心の美しさを誇る駒ケ根市の市民のみなさんに，舟山遺跡の尊い価値を知っていただくために，やや専門的な報告を綴ってきましたが，ここでわかり易く要約してみましょう。

むかしから石のやじりなど多く出る場所として知られていた舟山の丘が，都市化のために破壊される恐れがあるので，事故以前に学術調査を行なってその正体を見きわめ，将来の市民のために保存する必要に迫られ，国，県，市の協力によって科学のメスをこの丘に加えることとなり，昭和45年の夏から秋にかけて発掘調査が20日間にわたって行なわれました。その結果，数千年間地中に秘められていた先人の生活の痕跡が現実の陽光に照らされながら浮き彫りにされたのです。駒ケ根の地に人間が足跡を印し始めたのは，今から数千年前との推定は今までになされていましたが，舟山の発掘によって現に証明されたわけです。それは今からおよそ7000年ほど前の頃，東海地方から狭い渓谷を縫うようにしてこの伊那谷に入ってきた人々です。いずれも尖り底の土器を携えてこの舟山の丘に住みつきました。当時まだ岩蔭や大木の下に眠りながら動物群を追って生活していた情勢の中で，舟山の人々は小さいながらも屋根のある竪穴の家を作り数人が1グループになって，集落を形づくって共同の生活を営んでいたようです。今のところ日本で最も古い集落の跡を残しているわけです。その後1000年を単位とする縄文時代の生活が続きました。前期の人々も，中期人も，この丘にやってきました。後期の人々はわりあいに大きな柱をもった平地式の家を建てたようです。そして晩期のころ，すでに大陸の影響を受けた進んだ文化をもった人々が如来寺の周辺，上穂沢川のほとりに住みつきました。その時彼らはこの丘を神聖な墓地として亡くなった人々を埋葬したようです。やがて弥生時代になると，濃尾平野でさかんになった稲作文化，それは縄文時代とちがった輝かしい自立自営の生活方法を身につけた人々の文化です。この初期水稲農耕の文化がこの丘に足跡を印します。弥生時代の終りごろ，この丘に数戸の竪穴式わらぶきの家が立ち並びました。如来寺川の底湿地帯に水田を経営する人々の家です。それは今から1800年ほど前の頃です。また古墳時代，奈良時代の人々の足跡もわずかながら印されています。それ以後，現在まで人々はこの丘にくることをすっかり忘れ果ててしまったようです。このように今回の発掘によって駒ケ根市の歴史にとって重大な意味を持つ舟山の丘であることが立証できたことはまことに喜びに堪えません。

舟山は，この地域の自然に人間が働きかけた営みを最初に印した記念碑とも言うべきでしょう。どうかこの丘

が開発によって壊されることなくその姿を永遠にとどめていくような施策が講ぜられることを祈ってやみません。市民のみなさんの保存へのご協力を心からお願い申しあげる次第です。

終りにこの発掘調査についてご心配戴いた市当局の方々，はじめ，ご多忙の中をそして暑さと寒さをいとわず発掘作業に汗を流してくださった駒ケ根郷土研究会（会長気賀沢善右衛門氏）辻沢遺跡研究会，赤穂高校郷土クラブ，老人クラブのみなさんおよび，市民のみなさんに対し，調査団を代表して厚くお礼を申しあげます。

（林　茂樹）

昭和45年度文化財保存事業（舟山遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査）

補助事業経費収支精算書

イ．収入の部

区分	昭和45年度予算額	昭和45年度収入済額	差引額		備考
			増	減	
都道府県補助額	150千円	150千円	0	0	
市町村　〃	350	350	0	0	
小計	500	500	0	0	
国庫補助額	500	500	0	0	
合計	1,000	1,000	0	0	

ロ．支出の部

区分	昭和45年度予算額	昭和45年度精算額	差引額		備考
			増	減	
賃金	493千円	493千円	0	0	
報償費	125	125	0	0	
旅費	40	40	0	0	
需用費	225	225	0	0	消耗品費 燃料費 食糧費 印刷製本費
役務費	7	7	0	0	通信運搬費
使用料及び賃借料	57	57	0	0	
補償補塡及び賠償金	53	53	0	0	
合計	1,000	1,000	0	0	

舟山遺跡緊急発掘調査報告

―― 第Ⅰ次・第Ⅱ次調査 ――

昭和 46 年 3 月 25 日 印 刷
昭和 46 年 3 月 30 日 発 行

駒ケ根市赤穂 10780 番地の 2
発行所　駒ケ根市教育委員会

岡谷市川岸 108 番地
印刷所　中央印刷株式会社